

瑞穂遺跡 5

～第3・4・7・8・10次調査～

大野城市文化財調査報告書 第200集

2022

大野城市教育委員会

みず ほ い せき

瑞穂遺跡 5

～第3・4・7・8・10次調査～

大野城市文化財調査報告書 第200集

2022

大野城市教育委員会

序

福岡県大野城市は福岡平野南部に位置し、市域は中央がくびれ南北に細長いひょうたん形をしています。その市名は日本最古の朝鮮式山城「大野城」に由来し、北部に大野城跡、中央に水城跡、南部に牛頸須恵器窯跡とそれぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財が残る歴史豊かな街です。

瑞穂遺跡は市域のほぼ中央、牛頸川左岸の微高地上に位置しています。これまでの発掘調査により古墳時代中期の集落跡、奈良時代や中・近世の遺構が確認されていました。本書で報告する発掘調査のうち、特に7・8次調査では甕棺墓を中心とする弥生時代の墓地を確認し、大野城市を代表する弥生時代の遺跡であることが明らかになりました。また、10次調査では中国・四国地方から持ち込まれたと考えられる瀬戸内系の弥生土器が発見され、古くより遠隔地の人々と交流があったことがわかりました。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、我々にたくさんのことを教えてくれます。こうした遺跡を記録し、報告書というかたちで広く一般に公開するとともに、後世へと伝えていけるよう努めています。本書が文化財の理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究や教育の面で広く活用していただけたら幸いです。

最後になりましたが、事業関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

令和4年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 伊藤 啓二

例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した大野城市曙町1丁目、瑞穂町2丁目所在の「瑞穂遺跡第3・4・7・8・10次調査」の報告書である。
2. 発掘調査は各事業者の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は3・4次調査を徳本洋一、7・8次調査を早瀬賢、10次調査を山崎悠郁子が担当した。
4. 遺構写真は調査担当者が撮影した。遺跡全景写真は(有)空中写真企画に委託した。
5. 遺物写真撮影のうち、7・8次調査の弥生時代甕棺を(株)アーキジオ九州に委託した。この他の遺物については、牛嶋茂が撮影した。
6. 遺構平面実測図は、7・8次調査の全体図を(株)埋蔵文化財サポートシステム福岡支店に委託し、このほかの全体図及び個別の実測図は調査担当者のほか、天野正太郎・梶原詩織が実施した。
7. 出土人骨の保存・分析については九州大学アジア埋蔵文化財研究センター舟橋京子氏(九州大学アジア埋蔵文化財研究センター)に依頼し、人骨出土状況の実測・取り上げは田中良之・石川健・舟橋京子・高椋浩史・端野晋平・米元史織・岩橋由季・谷澤亜里・李ハヤン・中井歩が実施した。
8. 3・4次調査の遺構実測図中の方位は磁北、7・8・10次調査の方位及び図上の座標は国土座標(第Ⅱ系)を示す。
9. 遺物のうち、7・8次調査の弥生時代甕棺の実測・拓本・製図、遺構のうち、7・8次調査の弥生時代甕棺墓の製図は(株)アーキジオ九州が、このほかの遺物実測・拓本・製図、遺構図製図は(株)タクトが担当した。また、10次調査の一部の遺物実測については、上田龍児が担当した。
10. 遺物観察表は、(株)タクトが作成した。
11. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25000地形図『福岡南部』『太宰府』を使用した。
12. 7・8次調査の遺構番号のうち、弥生時代甕棺墓については、文章中では「○号甕棺墓」、挿図中では「K○」と表記している。
13. 遺物の名称のうち、須恵器蓋杯については平城京分類、輸入陶磁器については太宰府分類(太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡XV』2000年(太宰府市の文化財第49集))による呼称を用いる。
14. 本書に掲載した資料は、大野城市教育委員会が管理・保管している他、出土人骨は九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室が管理・保管している。
15. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用している。
16. 本書の執筆は、各遺物文章は(株)タクトが担当し、澤田康夫・上田が加筆・修正したほか、Ⅶ章を舟橋・米元・梶佐古幸謙・富田啓貴・足達悠紀・松尾樹志郎・植野律子・白楊・Stephen Nguyen Si Minh・出見優人・小高蒼大・田渕朱莉・松村祐奈・足立達朗・中野伸彦・小山内康人が、これ以外の上田が執筆した。編集は(株)タクトの協力のもと、澤田・上田がおこなった。
17. 発掘調査・報告書作成に関しては以下の方々から、ご教示を得た。(五十音順・敬省略)
牛嶋茂・久住猛雄・舟橋京子・溝口孝司・山崎頼人

本文目次

I. はじめに

- 1. 調査に至る経緯と経過 1
- 2. 整理作業の経過 3
- 3. 調査・整理の体制 4

II. 位置と環境

- 1. 地理的環境 7
- 2. 歴史的環境 7

III. 瑞穂遺跡第3次調査

- 1. 調査概要 13
- 2. 遺構と遺物 13
 - (1) 溝状遺構 13
 - (2) 竪穴状遺構 15
 - (3) その他の出土遺物 15
- 3. 小結 15

IV. 瑞穂遺跡第4次調査

- 1. 調査概要 16
- 2. 遺構 16
 - (1) 土坑 16
 - (2) 溝状遺構 16
- 3. 小結 16

V. 瑞穂遺跡第7・8次調査

- 1. 調査概要 17
- 2. 遺構と遺物 17
 - (1) 弥生時代の遺構 17
 - ① 甕棺墓 17
 - ② 土坑墓・木棺墓 52
 - ③ 石蓋土坑墓 62
 - ④ 石棺墓 66
 - ⑤ その他の弥生時代遺構 69
 - (2) 古墳時代の遺構 73
 - (3) 近世・近現代の遺構 81

①甕棺墓	81
②桶棺墓・縦棺墓	105
③木棺墓・土坑墓	121
④その他の遺構	146
(4) その他の出土遺物	150
3. 小結	152

VI. 瑞穂遺跡第10次調査

1. 調査概要	153
2. 遺構と遺物	154
(1) 溝状遺構	154
(2) 木棺墓	160
(3) 横口式土坑墓	161
(4) 土坑	162
(5) その他の出土遺物	163
3. 小結	164

VII. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土人骨について

1. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土の弥生時代人骨の埋葬状態と形質的特徴	175
2. 瑞穂遺跡第7・8次調査出土近世人骨の埋葬状態と形質的特徴	184
3. 瑞穂遺跡出土弥生時代人骨の歯牙のストロンチウム同位体比分析	209

VIII. 総括

1. 瑞穂遺跡における土地利用の変遷	221
2. 弥生時代～古墳時代墳墓の変遷とその背景	222
3. 近世墓地の変遷	230

表 目 次

表1 発掘調査履歴	2
表2 第3次調査出土遺物観察表	165
表3 第7・8次調査出土遺物観察表(甕棺)	165
表4 第7・8次調査出土遺物観察表(土器・土製品・磁器・瓦器)	167
表5 第7・8次調査出土遺物観察表(金属製品)	170
表6 第7・8次調査出土遺物観察表(玉・ガラス製品)	172
表7 第7・8次調査出土遺物観察表(石製品)	173
表8 第7・8次調査出土遺物観察表(その他の出土遺物)	173
表9 第10次調査出土遺物観察表	174

挿 図 目 次

第 1 図	調査地点位置図 (1/3000)	3
第 2 図	周辺遺跡分布図 (1/25000)	9 ~ 10
第 3 図	遺構配置図 (1/100)	13
第 4 図	竪穴状遺構 (SX01) 実測図 (1/30)	14
第 5 図	出土遺物実測図 (1/3)	14
第 6 図	遺構配置図 (1/60)	16
第 7 図	土坑実測図 (1/30)	16
第 8 図	遺構配置図 (1/150)	19 ~ 20
第 9 図	1 号 ~ 6 号甕棺墓実測図 (1/40)	21
第 10 図	7 号 ~ 11 号甕棺墓実測図 (1/40)	22
第 11 図	1 号・2 号甕棺実測図 (1/6)	23
第 12 図	3 号・4 号甕棺実測図 (20・21 は 1/6、22 ~ 24 は 1/10)	24
第 13 図	5 号 ~ 7 号甕棺実測図 (25・26・29・30 は 1/10、27・28 は 1/6)	25
第 14 図	8 号 ~ 10 号甕棺実測図 (1/10)	26
第 15 図	12 号 ~ 17 号甕棺墓実測図 (1/40)	28
第 16 図	11 号 ~ 14 号甕棺実測図 (37・38・41 は 1/6、他は 1/10)	29
第 17 図	15 号・16 号甕棺実測図 (1/10)	30
第 18 図	17 号 ~ 19 号甕棺実測図 (1/10)	32
第 19 図	18 号 ~ 23 号・25 号・26 号甕棺墓実測図 (1/40)	33
第 20 図	20 号 ~ 22 号甕棺実測図 (52・53 は 1/6、他は 1/10)	35
第 21 図	23 号・25 号・26 号甕棺実測図 (58・59 は 1/6、他は 1/10)	36
第 22 図	27 号 ~ 29 号・31 号・33 号 ~ 35 号甕棺墓実測図 (1/40)	37
第 23 図	27 号・28 号甕棺実測図 (1/10)	38
第 24 図	29 号 ~ 34 号甕棺実測図 (69・70・75 は 1/10、71 ~ 74・76・77 は 1/6)	39
第 25 図	36 号 ~ 41 号甕棺墓実測図 (1/40)	41
第 26 図	35 号・36 号甕棺実測図 (78・79 は 1/10、80・81 は 1/6)	42
第 27 図	37 号 ~ 40 号甕棺実測図 (82・83 は 1/6、84 ~ 87 は 1/10)	43
第 28 図	42 号 ~ 45 号甕棺墓実測図 (1/40)	45
第 29 図	41 号 ~ 43 号甕棺実測図 (90 は 1/6、他は 1/10)	47
第 30 図	44 号・45 号甕棺実測図 (1/10)	48
第 31 図	46 号・47 号・49 号 ~ 51 号甕棺墓実測図 (1/40)	49
第 32 図	46 号・47 号甕棺実測図 (1/10)	50
第 33 図	49 号 ~ 51 号甕棺実測図 (103 は 1/6、他は 1/10)	51
第 34 図	SK02・SX13・20・23 実測図 (1/30)	53

第 35 図	SX24・25・35・56 実測図 (1/30)	54
第 36 図	SX64・65 実測図 (1/30)	55
第 37 図	SX72・77・155・156 実測図 (1/30)	57
第 38 図	SX182・183・185 実測図 (1/30)	59
第 39 図	SX186・187 実測図 (1/30)	60
第 40 図	SX188・194 実測図 (1/30)	61
第 41 図	SX200・201 実測図 (1/30)	62
第 42 図	1・2 号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	63
第 43 図	3・4 号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	64
第 44 図	5・6 号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	65
第 45 図	7 号石蓋土坑墓実測図 (1/30)	66
第 46 図	1・2 号石棺墓実測図 (1/30)	67
第 47 図	弥生時代遺構出土遺物実測図 (1)	
	(104・117 は 2/3、108～111 は原寸、115・116 は 1/2、他は 1/3)	68
第 48 図	SX26・74・75・86・121 実測図 (1/30)	69
第 49 図	弥生時代遺構出土遺物実測図 (2) (120～124 は 1/8、他は 1/3)	71
第 50 図	SX138・191・197・198 実測図 (1/30)	72
第 51 図	弥生時代遺構出土遺物実測図 (3) (1/3)	73
第 52 図	1 号墳実測図 (1/100)・周溝 (SD03) 土層図 (1/60)	74
第 53 図	1 号墳主体部検出状況実測図・土層図 (1/30)	75
第 54 図	1 号墳主体部掘方実測図・土層図 (1/30)、鉄器出土状況実測図 (1/20)	76
第 55 図	1 号墳出土遺物実測図 (1)	
	(128 は 1/3、129～131 は 1/2、132～135 は原寸)	77
第 56 図	1 号墳出土遺物実測図 (2) (142・143 は 2/3、他は 1/3)	78
第 57 図	2 号墳実測図 (1/60)・主体部実測図 (1/30)	79
第 58 図	3 号墳実測図 (1/60)	80
第 59 図	3 号墳出土遺物実測図 (1/3)	81
第 60 図	SX01・04・05・07・10 実測図 (1/30)	83
第 61 図	SX12・80・81・87・88 実測図 (1/30)	84
第 62 図	SX04・05・07・10・12・80 甕棺実測図 (1/10)	85
第 63 図	SX89・92 実測図 (1/30)	86
第 64 図	SX96・97 実測図 (1/30)	87
第 65 図	SX100・107 実測図 (1/30)	88
第 66 図	SX88・92・97・107・158・161 甕棺実測図 (1/10)	89
第 67 図	SX01・04・87～89・97・107 出土遺物実測図 (160 は 1/2、他は原寸)	91
第 68 図	SX158・159・161・166・169 実測図 (1/30)	92

第 69 図	SX170・171・172・174・175・176 実測図 (1/30)	94
第 70 図	SX166・169・171・172・174・175 甕棺実測図 (1/10)	95
第 71 図	SX161・166・169・170 出土遺物実測図 (179・190・199～201 は 1/2、他は原寸)	97
第 72 図	SX178～181・189 実測図 (1/30)	99
第 73 図	SX178～181・189・190 甕棺実測図 (1/10)	101
第 74 図	SX174・176・178～181 出土遺物実測図 (213・214 は 1/3、215・216・221・222 は 1/2、他は原寸)	102
第 75 図	SX190・196・199 実測図 (1/30)	103
第 76 図	SX196・199・帰属不明甕棺実測図 (1/10)	104
第 77 図	帰属不明甕棺実測図 (1/10)	106
第 78 図	SX02・06・09・11・14 実測図 (1/30)	107
第 79 図	SX15～17・27・31 実測図 (1/30)	108
第 80 図	SX38・39・44・49 実測図 (1/30)	110
第 81 図	SX50～54・59 実測図 (1/30)	111
第 82 図	SX78・79・83・84・90 実測図 (1/30)	112
第 83 図	SX02・06・14・39・52・78・84・91 出土遺物実測図 (237～243・253 は 1/2、244 は 2/3、249 は 1/3、他は原寸)	114
第 84 図	SX91・93・94・101・104 実測図 (1/30)	115
第 85 図	SX105・106・108・110・113 実測図 (1/30)	116
第 86 図	SX108・110・122 出土遺物実測図 (260・265 は 1/3、他は原寸)	118
第 87 図	SX122・130・131・150 実測図 (1/30)	119
第 88 図	SX163～165・167 実測図 (1/30)	121
第 89 図	SX130・131・150 出土遺物実測図 (269・270・280 は 1/3、274 は 1/2、他は原寸)	122
第 90 図	SX03・18・19・21・22 実測図 (1/30)	123
第 91 図	SX32～34・37 実測図 (1/30)	124
第 92 図	SX41・45・48・55・57 実測図 (1/30)	126
第 93 図	SX58・60・61・62 実測図 (1/30)	127
第 94 図	SX63・67～70 実測図 (1/30)	128
第 95 図	SX18・21・22・32～34・37・41・45・55・61・63 出土遺物実測図 (282・283・291・297・299～304・308・309 は 1/3、他は原寸)	131
第 96 図	SX73・82・85・95 実測図 (1/30)	132
第 97 図	SX98・102・103・112 実測図 (1/30)	133
第 98 図	SX67・95・102 出土遺物実測図 (317 は 1/3、318 は 1/8、他は原寸)	134
第 99 図	SX114・116～119 実測図 (1/30)	136

第100図	SX120・125～129 実測図 (1/30)	137
第101図	SX132～135 実測図 (1/30)	138
第102図	SX136・137・139・146 実測図 (1/30)	140
第103図	SX103・114・118・119・125・129・134・137 出土遺物実測図 (331・337・343～346・353は1/3、他は原寸)	141
第104図	SX147～149・151・152 実測図 (1/30)	142
第105図	SX153・154・168・173・195 実測図 (1/30)	144
第106図	SX139・146・149・154 出土遺物実測図 (359～361・368は1/3、他は原寸)	145
第107図	SX71・99・109 実測図 (1/30)	147
第108図	SX111・115・162・177 実測図 (1/30)	148
第109図	SX99・109・177・SP02 出土遺物実測図 (382・387は原寸、他は1/3)	149
第110図	SX28・56・60-69 周辺、その他の出土遺物実測図 (388～390は1/3、他は原寸)	150
第111図	カクラン・表土・その他の出土遺物実測図 (1/3)	151
第112図	遺構配置図 (1/80)	153
第113図	SD01 ①・②・SD02 土層実測図 (1/40)	154
第114図	SD01 出土遺物実測図 (1) (403は1/8、他は1/3)	155
第115図	SD01 出土遺物実測図 (2) (1/3)	156
第116図	SD01 出土遺物実測図 (3) (415・416は1/3、他は1/8)	157
第117図	SD01 出土遺物実測図 (4) (1/3)	158
第118図	SD01 出土遺物実測図 (5) (1/3)	159
第119図	ST01・SX03 実測図 (1/30)	161
第120図	ST01 出土遺物実測図 (1/3)	161
第121図	SX02・04・05 実測図 (1/30)	162
第122図	その他の出土遺物実測図 (1/3)	163
第123図	波状文を施す壺と石勺遺跡の凹線文土器	221
第124図	墓地変遷図1・2段階 (1/300)	223
第125図	墓地変遷図3・4段階 (1/300)	224
第126図	墓地変遷図5・6段階 (1/300)	225
第127図	大野城市における弥生時代の主要遺跡分布図 (1/50000)	226
第128図	森園遺跡の墓地と周辺の集落と墳墓	227
第129図	原門遺跡遺構配置図と8号墓出土内行花文鏡	228
第130図	瑞穂墓地と対応する集落の想定	228
第131図	瑞穂遺跡7・8次調査近世墓 (1/300)	230

図 版 目 次

図版 1

- (1) 3次東半部全景（南から） (2) 3次東半部全景（西から）
(3) 3次西半部全景（東から）

図版 2

- (1) 4次全景（北から） (2) 4次溝全景（北から）
(3) 4次土坑全景（南から）

図版 3

- (1) 7・8次調査区南東側全景（北から） (2) 7・8次調査区東側全景（南から）

図版 4

- (1) 7・8次調査区東側全景（北から） (2) 7・8次調査区中央部全景（北から）

図版 5

- (1) 7・8次調査区全景（上空から） (2) 7・8次調査区南西部全景（上空から）

図版 6

- (1) 7・8次1号・3号甕棺墓全景（北西から） (2) 7・8次1号甕棺墓全景（北西から）
(3) 7・8次3号甕棺墓全景（北西から）

図版 7

- (1) 7・8次2号甕棺墓全景（北から） (2) 7・8次2号甕棺墓完掘状況（北から）
(3) 7・8次3号甕棺墓人骨出土状況（西から）

図版 8

- (1) 7・8次4号甕棺墓人骨出土状況（北から） (2) 7・8次4号甕棺墓全景（北から）

図版 9

- (1) 7・8次5号甕棺墓全景（西から） (2) 7・8次6号甕棺墓全景（西から）
(3) 7・8次7号甕棺墓完掘状況（北西から）

図版 10

- (1) 7・8次7号甕棺墓全景（北から） (2) 7・8次8号甕棺墓全景（西から）
(3) 7・8次8号甕棺挿入状況（南から）

図版 11

- (1) 7・8次8号甕棺墓全景（西から） (2) 7・8次8号甕棺墓人骨出土状況（西から）

図版 12

- (1) 7・8次8号・9号甕棺墓検出状況（西から） (2) 7・8次9号甕棺墓完掘状況（北西から）
(3) 7・8次10号甕棺挿入状況（南から）

図版 13

- (1) 7・8次10号甕棺墓全景（東から） (2) 7・8次10号甕棺墓人骨出土状況（南西から）

図版 14

- (1) 7・8次 11号甕棺墓全景(南から) (2) 7・8次 12号甕棺墓全景(北東から)
(3) 7・8次 15号・17号・19号甕棺墓全景(西から)

図版 15

- (1) 7・8次 15号甕棺墓全景(北西から) (2) 7・8次 15号甕棺挿入状況(北西から)
(3) 7・8次 15号甕棺墓完掘状況(西から)

図版 16

- (1) 7・8次 16号甕棺墓全景(西から) (2) 7・8次 16号甕棺墓人骨出土状況(西から)

図版 17

- (1) 7・8次 16号甕棺挿入状況(北西から) (2) 7・8次 16号甕棺墓全景(西から)
(3) 7・8次 16号甕棺墓掘方全景(西から)

図版 18

- (1) 7・8次 17号甕棺墓全景(北東から) (2) 7・8次 17号甕棺墓人骨出土状況(北東から)
(3) 7・8次 17号甕棺挿入状況(北東から)

図版 19

- (1) 7・8次 19号甕棺墓全景(東から) (2) 7・8次 21号甕棺墓半裁状況(西から)

図版 20

- (1) 7・8次 21号甕棺墓全景(西から) (2) 7・8次 21号甕棺墓人骨出土状況(西から)
(3) 7・8次 21号甕棺墓検出状況(西から)

図版 21

- (1) 7・8次 22号甕棺墓全景(西から) (2) 7・8次 22号甕棺墓完掘状況(東から)
(3) 7・8次 22号甕棺挿入状況(北から)

図版 22

- (1) 7・8次 26号・27号甕棺墓検出状況(東から) (2) 7・8次 26号甕棺墓全景(東から)

図版 23

- (1) 7・8次 26号甕棺挿入状況(北から) (2) 7・8次 27号甕棺墓人骨出土状況(北から)
(3) 7・8次 27号甕棺挿入状況(北から)

図版 24

- (1) 7・8次 28号甕棺墓全景(北から) (2) 7・8次 28号甕棺墓検出状況(北から)

図版 25

- (1) 7・8次 28号甕棺墓半裁状況(北東から) (2) 7・8次 29号甕棺墓全景(東から)
(3) 7・8次 29号甕棺墓検出状況(南東から)

図版 26

- (1) 7・8次 33号甕棺墓人骨出土状況(東から) (2) 7・8次 33号甕棺墓検出状況(南東から)

図版 27

- (1) 7・8次 34号甕棺墓全景(東から) (2) 7・8次 35号甕棺墓全景(北東から)

図版 28

- (1) 7・8次 35号甕棺墓人骨出土状況（北から） (2) 7・8次 36号甕棺墓全景（東から）

図版 29

- (1) 7・8次 36号甕棺挿入状況（東から） (2) 7・8次 36号甕棺墓全景（北から）
(3) 7・8次 37号甕棺墓全景（南から）

図版 30

- (1) 7・8次 38号甕棺墓全景（北東から） (2) 7・8次 38号甕棺墓人骨出土状況（北東から）
(3) 7・8次 38号甕棺墓調査状況（北から）

図版 31

- (1) 7・8次 39号甕棺墓検出状況（北から） (2) 7・8次 39号甕棺墓全景（南から）
(3) 7・8次 41号甕棺墓全景（東から）

図版 32

- (1) 7・8次 43号甕棺墓全景（南から） (2) 7・8次 44号甕棺墓検出状況（北から）
(3) 7・8次 44号甕棺墓全景（北西から）

図版 33

- (1) 7・8次 35号・45号甕棺墓全景（東から） (2) 7・8次 45号甕棺墓全景（東から）
(3) 7・8次 45号甕棺挿入状況（北から）

図版 34

- (1) 7・8次 46号甕棺墓全景（北西から） (2) 7・8次 46号甕棺墓検出状況（西から）
(3) 7・8次 47号甕棺墓全景（北東から）

図版 35

- (1) 7・8次 49号甕棺墓全景（南から） (2) 7・8次 49号甕棺墓検出状況（南西から）
(3) 7・8次 49号甕棺墓半裁状況（西から）

図版 36

- (1) 7・8次 50号甕棺墓全景（北東から） (2) 7・8次 50号甕棺墓全景（西から）

図版 37

- (1) 7・8次 SX20 全景（北から） (2) 7・8次 SX23 土層（南から）
(3) 7・8次 SX23 周辺全景（西から）

図版 38

- (1) 7・8次 SX64 周辺全景（東から） (2) 7・8次 SX64 全景（東から）
(3) 7・8次 SX155・156 全景（北から）

図版 39

- (1) 7・8次 SX183 全景（北から） (2) 7・8次 SX185 全景（北東から）

図版 40

- (1) 7・8次 SX188 全景（北から） (2) 7・8次 SX194 土層（北から）

図版 41

- (1) 7・8次1～3号石蓋土坑墓周辺全景（北から） (2) 7・8次1・2号石蓋土坑墓全景（東から）

図版 42

- (1) 7・8次3号石蓋土坑墓全景（東から） (2) 7・8次3号石蓋土坑墓完掘状況（北西から）
(3) 7・8次3号石蓋土坑墓顔料検出状況（西から）

図版 43

- (1) 7・8次4号石蓋土坑墓全景（北東から） (2) 7・8次5号石蓋土坑墓全景（西から）

図版 44

- (1) 7・8次5号石蓋土坑墓全景（東から） (2) 7・8次5号石蓋土坑墓遺物出土状況（西から）
(3) 7・8次5号石蓋土坑墓遺物出土状況（西から）

図版 45

- (1) 7・8次6号石蓋土坑墓全景（東から） (2) 7・8次7号石蓋土坑墓全景（東から）

図版 46

- (1) 7・8次7号石蓋土坑墓全景（東から） (2) 7・8次7号石蓋土坑墓人骨出土状況（南東から）
(3) 7・8次7号石蓋土坑墓人骨出土状況（南から）

図版 47

- (1) 7・8次1号石棺墓周辺全景（北東から） (2) 7・8次1号石棺墓全景（北東から）

図版 48

- (1) 7・8次1号石棺墓小口（西から） (2) 7・8次1号石棺墓南側壁（北から）
(3) 7・8次1号石棺墓北側壁（南から）

図版 49

- (1) 7・8次1号石棺墓遺物出土状況（東から） (2) 7・8次1号石棺墓遺物出土状況（北東から）
(3) 7・8次1号石棺墓土層（北から）

図版 50

- (1) 7・8次1号墳全景（西から） (2) 7・8次1号墳主体部全景（北から）

図版 51

- (1) 7・8次1号墳南側小口部（北から） (2) 7・8次1号墳北側小口部（南から）
(3) 7・8次1号墳主体部完掘状況（南から）

図版 52

- (1) 7・8次1号墳主体部検出状況（南から） (2) 7・8次1号墳主体部半裁状況（西から）
(3) 7・8次1号墳主体部土層（西から）

図版 53

- (1) 7・8次1号墳主体部土層（北から） (2) 7・8次1号墳主体部土層（北から）
(3) 7・8次1号墳周溝（SD03）土層（南から）

図版 54

- (1) 7・8次2号墳主体部全景（西から） (2) 7・8次3号墳（SD01・02）全景（西から）

(3) 7・8次3号墳周溝 (SD01・02) 土層 (東から)

図版 55

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| (1) 7・8次 SX01 全景 (東から) | (2) 7・8次 SX04 全景 (西から) |
| (3) 7・8次 SX04 人骨出土状況 (西から) | (4) 7・8次 SX05 全景 (北から) |
| (5) 7・8次 SX07 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX07 人骨出土状況 (北から) |
| (7) 7・8次 SX10 検出状況 (北から) | (8) 7・8次 SX10 遺物出土状況 (北から) |

図版 56

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| (1) 7・8次 SX10 全景 (北から) | (2) 7・8次 SX80 全景 (北から) |
| (3) 7・8次 SX87 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX87 人骨出土状況 (南から) |
| (5) 7・8次 SX88 全景 (西から) | (6) 7・8次 SX88 人骨出土状況 (西から) |
| (7) 7・8次 SX92 全景 (東から) | (8) 7・8次 SX97 検出状況 (北から) |

図版 57

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| (1) 7・8次 SX97 全景 (西から) | (2) 7・8次 SX97 人骨出土状況 (西から) |
| (3) 7・8次 SX100 全景 (東から) | (4) 7・8次 SX158・159 全景 (南東から) |
| (5) 7・8次 SX161～163 全景 (南東から) | (6) 7・8次 SX161 全景 (南西から) |
| (7) 7・8次 SX166 全景 (北西から) | (8) 7・8次 SX169 検出状況 (北から) |

図版 58

- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| (1) 7・8次 SX169 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX169 人骨出土状況 (南から) |
| (3) 7・8次 SX170 全景 (北から) | (4) 7・8次 SX170 人骨出土状況 (北から) |
| (5) 7・8次 SX172 全景 (北西から) | (6) 7・8次 SX174 全景 (東から) |
| (7) 7・8次 SX176 全景 (北西から) | (8) 7・8次 SX176 人骨出土状況 (北西から) |

図版 59

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| (1) 7・8次 SX178 全景 (西から) | (2) 7・8次 SX178 人骨出土状況 (西から) |
| (3) 7・8次 SX179 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX179 人骨出土状況 (南から) |
| (5) 7・8次 SX180 全景 (北から) | (6) 7・8次 SX181 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX189 全景 (東から) | (8) 7・8次 SX190 全景 (東から) |

図版 60

- | | |
|-------------------------|----------------------------|
| (1) 7・8次 SX196 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX199 全景 (北西から) |
| (3) 7・8次 SX02 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX06 全景 (南東から) |
| (5) 7・8次 SX09 全景 (南東から) | (6) 7・8次 SX09 人骨出土状況 (北から) |
| (7) 7・8次 SX14 全景 (東から) | (8) 7・8次 SX15 全景 (東から) |

図版 61

- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| (1) 7・8次 SX17 全景 (北から) | (2) 7・8次 SX50 全景 (東から) |
| (3) 7・8次 SX51 人骨出土状況 (東から) | (4) 7・8次 SX78 全景 (北から) |
| (5) 7・8次 SX79 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX83 人骨出土状況 (西から) |
| (7) 7・8次 SX83 全景 (西から) | (8) 7・8次 SX84 全景 (南から) |

図版 62

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| (1) 7・8次 SX91 全景 (西から) | (2) 7・8次 SX94 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX104 全景 (西から) | (4) 7・8次 SX122 全景 (東から) |
| (5) 7・8次 SX130 全景 (北西から) | (6) 7・8次 SX131 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX164 全景 (南東から) | (8) 7・8次 SX18 全景 (南から) |

図版 63

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| (1) 7・8次 SX19 全景 (東から) | (2) 7・8次 SX21 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX21 人骨出土状況 (南から) | (4) 7・8次 SX22 全景 (南東から) |
| (5) 7・8次 SX32 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX33 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX34 全景 (南東から) | (8) 7・8次 SX34 漆器検出状況 (南西から) |

図版 64

- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| (1) 7・8次 SX37 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX41 全景 (北西から) |
| (3) 7・8次 SX45 全景 (南西から) | (4) 7・8次 SX58 全景 (東から) |
| (5) 7・8次 SX61 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX62 全景 (西から) |
| (7) 7・8次 SX63 全景 (南西から) | |

図版 65

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| (1) 7・8次 SX67 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX68 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX69 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX70 全景 (南から) |
| (5) 7・8次 SX82 全景 (西から) | (6) 7・8次 SX85 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX95 全景 (南西から) | (8) 7・8次 SX95 人骨出土状況 (南西から) |

図版 66

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| (1) 7・8次 SX98 全景 (南から) | (2) 7・8次 SX102 遺物出土状況 (北から) |
| (3) 7・8次 SX102 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX103 全景 (南から) |
| (5) 7・8次 SX116 全景 (北東から) | (6) 7・8次 SX117 全景 (南から) |
| (7) 7・8次 SX118 全景 (東から) | (8) 7・8次 SX125 全景 (南から) |

図版 67

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| (1) 7・8次 SX126 全景 (南東から) | (2) 7・8次 SX127 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX128 全景 (南から) | (4) 7・8次 SX128 漆器出土状況 (北西から) |
| (5) 7・8次 SX128 漆器出土状況 (北西から) | (6) 7・8次 SX129 全景 (東から) |
| (7) 7・8次 SX129 玉類出土状況 (南から) | (8) 7・8次 SX132 全景 (北から) |

図版 68

- | | |
|------------------------------|--------------------------|
| (1) 7・8次 SX133 全景 (西から) | (2) 7・8次 SX134 全景 (西から) |
| (3) 7・8次 SX134 人骨出土状況 (南から) | (4) 7・8次 SX135 全景 (南西から) |
| (5) 7・8次 SX136 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX137 全景 (南東から) |
| (7) 7・8次 SX137 人骨出土状況 (南東から) | (8) 7・8次 SX139 全景 (南東から) |

図版 69

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| (1) 7・8次 SX146 全景 (北から) | (2) 7・8次 SX147 全景 (南から) |
| (3) 7・8次 SX148 全景 (北西から) | (4) 7・8次 SX149 全景 (南から) |
| (5) 7・8次 SX150 全景 (南から) | (6) 7・8次 SX151 全景 (南東から) |
| (7) 7・8次 SX153 全景 (北から) | (8) 7・8次 SX173 全景 (南から) |

図版 70

- | | |
|----------------|----------------|
| (1) 7・8次人骨調査状況 | (2) 7・8次人骨調査状況 |
| (3) 7・8次人骨調査状況 | (4) 7・8次調査風景 |
| (5) 7・8次調査風景 | (6) 7・8次調査風景 |
| (7) 7・8次調査風景 | (8) 7・8次調査前風景 |

図版 71

- | | |
|------------------|--------------------|
| (1) 10次全景 (北西から) | (2) 10次 SD01 (西から) |
|------------------|--------------------|

図版 72

- | | |
|-----------------------|-------------------------|
| (1) 10次 SD01 (東から) | (2) 10次 SD01 東壁土層 (西から) |
| (3) 10次 SD01 土層 (西から) | |

図版 73

- | | |
|---------------------------|-------------------------|
| (1) 10次 ST01 遺物出土状況 (北から) | (2) 10次 ST01 完掘状況 (北から) |
| (3) 10次 ST01 遺物出土状況 (南から) | |

図版 74

- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| (1) 10次 ST01 土層 (北から) | (2) 10次 SX03 全景 (東から) |
| (3) 10次 SX03 下部全景 (西から) | |

図版 75 出土遺物 1

図版 76 出土遺物 2

図版 77 出土遺物 3

図版 78 出土遺物 4

図版 79 出土遺物 5

図版 80 出土遺物 6

図版 81 出土遺物 7

図版 82 出土遺物 8

図版 83 出土遺物 9

図版 84 出土遺物 10

図版 85 出土遺物 11

図版 86 出土遺物 12

図版 87 出土遺物 13

図版 88 出土遺物 14

図版 89 出土遺物 15

- 图版 90 出土遺物 16
图版 91 出土遺物 17
图版 92 出土遺物 18
图版 93 出土遺物 19
图版 94 出土遺物 20
图版 95 出土遺物 21
图版 96 出土遺物 22
图版 97 出土遺物 23
图版 98 出土遺物 24
图版 99 出土遺物 25
图版 100 出土遺物 26
图版 101 出土遺物 27
图版 102 出土遺物 28

I. はじめに

1. 調査に至る経緯と経過

瑞穂遺跡は市域中央部、御笠川西岸の沖積微高地上に位置する。戦後までは農村地帯として田園風景が広がる景観であったが、JR鹿児島本線や西鉄天神大牟田線の沿線沿いであったこともあり、昭和40年代から都市化が進み、現在では低層・高層の住宅が建ち並ぶ住宅地となっている。本書で報告する瑞穂遺跡第3・4・7・8・10次調査も様々な開発が要因となり調査を実施した。各調査地における経緯・経過は以下のとおりである。なお、瑞穂遺跡におけるこれまでの発掘調査履歴および調査地点の位置を、表1・第1図に示す。

【瑞穂遺跡第3次調査（平成20年度調査）】

幼稚園の増築に伴い、事業者より平成20年6月9日付で文化財保護法93条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ（20大教文第280号）、同6月16日付（20教文第1号-136）で発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて平成20年7月18日より発掘調査を開始した（担当：徳本）。重機による表土除去を経て人力による遺構検出・遺構掘削を進めるとともに、遺構実測・測量・写真撮影を実施した。同8月28日に全ての作業を終了し、調査を完了した。

【瑞穂遺跡第4次調査（平成21年度調査）】

個人住宅建設に伴い、事業者より平成21年6月15日付で文化財保護法93条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ（21大教文第323号）、同6月22日付（21教文第1号-162）で発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて平成21年6月25日より発掘調査を開始した（担当：徳本）。重機による表土除去を経て人力による遺構検出・遺構掘削を進めるとともに、遺構実測・測量・写真撮影を実施した。同7月14日に全ての作業を終了し、調査を完了した。

【瑞穂遺跡第7・8次調査（平成23・24年度調査）】

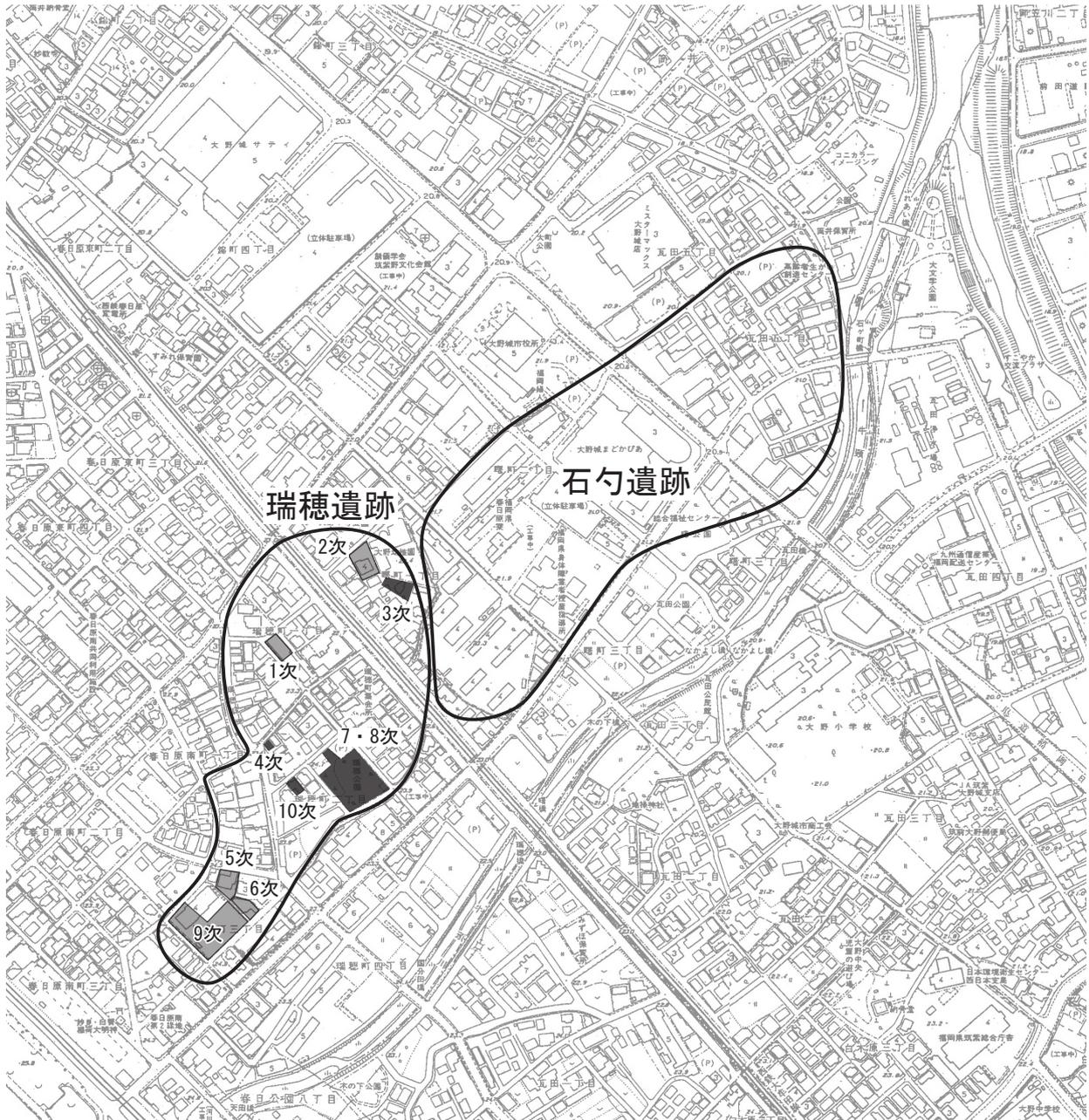
公園整備に伴う調査である。平成23年度調査は、平成23年10月5日付で文化財保護法94条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ（23大教文第813号）、同10月14日付（23教文第1号549）で発掘調査を実施する旨の通知があった。平成24年度調査は、平成24年4月17日付で文化財保護法94条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ（24大教文第93号）、同5月7日付（24教文第1号63）で発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて平成23年10月30日より発掘調査を開始した。重機による表土除去を経て人力による遺構検出・遺構掘削を進めるとともに、遺構実測・測量・写真撮影を実施した。また、弥生時代の墳墓および近世・近現代の墳墓から多数の人骨が出土したことを受けて、委託事業として九州大学基層構造講座に人骨出土状況の記録・取り上げおよび分析を依頼した。平成24年8月23日に全ての作業を終了し、調査を完了した。なお、平成23年度を7次調査、平成24年度8次調査として実施したが、同一の調査のことである。

表 1 発掘調査履歴

調査回数	調査年月	調査面積 (㎡)	調査概要	報告書
1	1991年9月～10月	200	溝・ピット	2001『瑞穂・原ノ畑遺跡』 (市第57集)
2	1998年4月～5月	200	古墳時代集落(井戸1基:5世紀前半頃)	
3	2008年7月～8月	100	竪穴状遺構・溝・ピット(古墳時代～平安時代)	本書
4	2009年6月～7月	30	土坑・溝(時期不明)	本書
5	2010年4月～5月	175	溝4条(近世?)、ピット	2011『瑞穂遺跡Ⅱ』 (市第95集)
6	2011年6月～7月	150	古墳時代集落 (住居4基:5世紀前半頃、土坑墓:7世紀か)	2012『瑞穂遺跡Ⅲ 横峰遺跡Ⅰハザコ遺跡』 (市第105集)
7・8	2011年10月～ 2012年8月	1400	弥生時代墓地(甕棺墓・土坑墓・木棺墓) 古墳時代墓地(古墳3基:古墳時代初頭) 近世～近現代墓地(甕棺墓・桶棺墓・土坑墓・木棺墓)	本書
9	2012年12月～ 2013年4月	1800	古墳時代集落(住居1基:5世紀前半頃) 奈良時代墓地?(土坑墓?1基) 近世大溝	2014『瑞穂遺跡Ⅳ』 (市第116集)
10	2013年2月～3月	100	弥生時代墓域?(溝1基:弥生時代中期後半) 奈良～平安時代初頭墓地(土坑墓1基) その他時期不明遺構	本書

【瑞穂遺跡第10次調査(平成24年度調査)】

住宅建設に伴い、事業者より平成25年1月31日付で文化財保護法93条の届出が提出され、福岡県文化財保護課に届け出たところ(24大教文第1440・1441号)、同2月15日付(24教文第1号1116)で発掘調査を実施する旨の通知があった。これを受けて平成25年2月19日より発掘調査を開始した(担当:山崎)。重機による表土除去を経て人力による遺構検出・遺構掘削を進めるとともに、遺構実測・測量・写真撮影を実施した。同3月11日に全ての作業を終了し、調査を完了した。



第1図 調査地点位置図 (1/3000)

2. 整理作業の経過

瑞穂遺跡第7・8次調査の弥生時代甕棺墓に関する遺物の洗浄・展開・接合・実測・製図・写真撮影、遺構図の整理・製図・レイアウト等については、平成25年度に(株)アーキジオ九州に委託し、事業を進めた。3・4・10次調査の遺物洗浄については、市単費事業として随時実施した。これ以外の整理作業については、令和3年度に(株)タクトに委託し、遺物の展開・接合・実測・製図・写真撮影、遺構図の整理・製図・レイアウトおよび執筆作業・編集作業を進め、報告書の印刷製本を行った。

3. 調査・整理の体制

【平成 20 年度（瑞穂遺跡第 3 次調査）】

大野城市教育委員会	教育長	古賀宮太
	教育部長	森岡勉
	ふるさと文化財課長	舟山良一
	文化財担当係長	中山宏
	主 査	徳本洋一、石木秀啓、丸尾博恵
	主任技師	林潤也、早瀬賢
	技 師	上田龍児
	嘱 託	石川健、遠藤茜、大里弥生、甲斐康大、 玉ノ井博紀、中島圭、能塚由紀

発掘調査作業員

岡本妙子、大海雅子、高木幸子、藤田和子、前田チエ子、田中照子、中垣親、岩切ふえ、日野律子

【平成 21 年度（瑞穂遺跡第 4 次調査）】

大野城市教育委員会	教育長	古賀宮太
	教育部長	森岡勉
	ふるさと文化財課長	舟山良一
	文化財担当係長	中山宏
	主 査	徳本洋一、石木秀啓、丸尾博恵
	主任技師	林潤也、早瀬賢
	技 師	上田龍児
	嘱 託	石川健、遠藤茜、大里弥生、甲斐康大、 玉ノ井博紀、中島圭、能塚由紀

発掘調査作業員

岡本妙子、大海雅子、高木幸子、藤田和子、前田チエ子、田中照子、中垣親、岩切ふえ、日野律子

【平成 23・24 年度（瑞穂遺跡第 7・8・10 次調査）】

大野城市教育委員会	教育長	吉富修
	教育部長	藤島正明
		(平成 23 年 10 月～24 年 3 月ふるさと文化財課長兼務)
	ふるさと文化財課長	浦山敏弘 (平成 23 年 4 月～9 月)
		藤島正明 (平成 23 年 10 月～24 年 3 月)
		鐘ヶ江義則 (平成 24 年 4 月～)

文化財担当係長	中山宏（～平成 24 年 3 月） 徳本洋一（平成 23 年 10 月～） 平田哲也（平成 24 年 4 月～）
主 査	徳本洋一（～平成 23 年 9 月）、石木秀啓
主任技師	林潤也、早瀬賢、上田龍児
技 師	齋藤友紀（平成 24 年 4 月～）
主任主事	岡本晃一（平成 24 年 4 月～）
文化財専門員（再任用）	舟山良一
嘱託（調査関係）	梶原詩織、山崎悠郁子、渡邊和子、國分ゆみ（～平成 24 年 5 月）、白石溪牙（平成 24 年 4 月～）、茂友美、無津呂健太郎（平成 24 年 5 月～）、主税英徳（平成 24 年 4 月～6 月）、天野正太郎（平成 24 年 8 月～）
嘱託（歴史資料展示室）	境聡子、馬場麗菜、柳屋あづさ（～平成 24 年 4 月）
嘱託（庶務）	井上絵美子

発掘調査作業員

岡本妙子 大海雅子 高木幸子 藤田和子 織田徹 坂本泰子 小林敏子 広渡隆子 田中照子
 岩切ふえ 大藪英美 深野一美 船越桃子 穴井和子 仲前富美子 井口るみ子 日野律子 川岸
 晶子 溝口忍 山下隆子 団野ハマ子 篠崎繁美 東島真弓 安里由利子 中山文子 槇坂陽子
 大島五津子 大浦旗江 松尾純子 田中悦子 田野和代 宮原ゆかり 戸渡京子 野崎美智子 倉
 住孝枝 杉森宏治 有水友晴 井口薫 岩石いづみ 大津幸男 梶原久美子 西浦喜久子 花田博
 雄 林祥夫 平江信子 酒井笑子 手嶋敏則 平江武士 香野博通 西依榮 川崎敏次郎 佐藤寛
 行 吉田秀俊 田中良一 諏訪博恭 松尾茂彦 塚副義一郎 諸岡俊弘 前原幸男 前原光恵 片
 田清子 加藤美智子 松尾千代子 高月敬信 橋口真敏 佐々田薫 平田敏雄 瀧口松夫 森山武
 雄 藤木亮介 福永将大（当時九州大学学生）

【令和 3 年度（整理作業）】

大野城市教育委員会	教育長	吉富修（～令和 3 年 6 月） 伊藤啓二（令和 3 年 7 月～）
	教育部長	日野和弘
	ふるさと文化財課長	石木秀啓
	係長	林潤也、上田龍児
	主査	徳本洋一
	主任主事	秋穂敏明
	主任技師	山元瞭平

技師	齋藤明日香
主事	鮫島由佳
会計年度任用職員（調査・啓発）	
	澤田康夫
	石川健（12月～）
	山村智子
	深町美佳
会計年度任用職員（庶務）	
	荒牧美佐子（10月）
	光原 乃里子（～9月）
	三好りさ
	野上知則（11月～）
	山上敬子
	井之口彩子

整理作業員

小畑貴子、古賀栄子、小嶋のり子、篠田千恵子、白井典子、津田りえ、仲村美幸、氷室優、松本友里江

Ⅱ. 位置と環境

1. 地理的環境

大野城市が位置する福岡平野は、南を背振山地、東を三郡山地に挟まれ、北は博多湾に面している。平野中央部に那珂川・御笠川が貫流し、広大な沖積平野を形成する。大野城市は福岡平野東南の最奥部に位置し、最も平野が狭くなる地峡部にあたる。古代以来この地峡部は交通の要衝で、現在でも九州縦貫自動車道・JR鹿児島本線・西鉄天神大牟田線・国道3号線など九州の南北を結ぶ幹線道が走っている。市域は東側を月隈丘陵に連なる乙金山・四王寺山、南側を牛頸山に挟まれ、中央に御笠川が貫流する。山地は早良花崗岩からなり、風化が著しく真砂土となっており、山麓部から平地丘陵部にかけて段丘が発達する。高位段丘は開析がすすみ、中位段丘は平坦部も多く、平野部では沖積地が広がる。

2. 歴史的環境

旧石器時代 市域北東部の松葉園遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の出口遺跡、横峰遺跡、本堂遺跡など、丘陵上の遺跡でナイフ形石器・細石刃が確認されている。周辺地域では南八幡遺跡、諸岡遺跡、諸岡城館遺跡、井尻B遺跡、門田遺跡などで後期旧石器時代に属する遺物が分布する。

縄文時代 市域で草創期の遺構・遺物は確認されていないが、周辺では門田遺跡で爪形文土器が出土している。早期になると遺跡の数が増加し、市域北東部の善一田遺跡、古野遺跡、薬師の森遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の本堂遺跡といった丘陵地で押型文土器や石器が出土している。このほか、石勺遺跡などの平野微高地上にも遺跡が展開する。前期～中期の遺跡は市域では確認されておらず、周辺地域でも遺跡の数が減少する。後・晩期の遺跡として牛頸塚原遺跡、牛頸日ノ浦遺跡で後期後半～晩期にかけての竪穴住居・土坑が確認されているほか、善一田遺跡、古野遺跡、原口遺跡、薬師の森遺跡で、後・晩期の遺物が分布する。なお、薬師の森遺跡や石勺遺跡では落とし穴状遺構を確認しており、これらは縄文時代の所産である可能性が高い。

弥生時代 弥生時代には福岡平野全域で遺跡が増加し、沖積地にも遺跡が展開する。市域では北部～中央部の丘陵・平野部に遺跡が多い。

【前期】 板付I式期にさかのぼる集落として仲島本間尺遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などがある。前期の墳墓は、御陵前ノ椽遺跡（前期中頃）、中・寺尾遺跡（前期中頃～中期）、塚口遺跡（前期後半～末）で甕棺墓・土坑墓・木棺墓などが展開する。南部では牛頸日ノ浦跡で前期後半の甕棺墓・土坑墓がある。また御陵遺跡では前期中頃～末の集落が確認されている。前期末頃には仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡など平野部で集落の数が増加し、これら集落の多くは中期に継続する。周辺地域では板付遺跡や那珂遺跡で早・前期の環濠集落が成立し拠点集落となる。

【中期】 市域では平野部の仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が前期末から中期に継続する集落である。丘陵地でも北部の中・寺尾遺跡、森園遺跡で中期前半～後半に集落が展開し、南部でも本堂

遺跡で小規模な集落がある。墳墓遺跡は前期から継続する中・寺尾遺跡や、森園遺跡で中期後半を中心にした甕棺墓群があるほか、平野部の石勺遺跡や瑞穂遺跡で甕棺墓を主体とする墳墓が展開する。周辺では春日丘陵に大規模な集落・墳墓が出現し、青銅器生産も開始される。特に須玖岡本遺跡D地点甕棺は約30面の前漢鏡・ガラス璧・多数の青銅器を副葬し「王墓」と称されている。

【後期】 中期以来の集落である仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡、本堂遺跡などが継続するほか、村下遺跡、榎町遺跡で新たな集落が出現する。仲島遺跡では貨布・銅鏡片や青銅器鋳型などが出土しており拠点集落となる。周辺地域では中期以降春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡群が拠点集落として継続しており、特に春日丘陵一帯は『三国志』『魏書』東夷伝倭人条に記された「奴国」の中心的な地域と位置づけられる。

古墳時代

【前期】

〈墳墓〉 古墳時代になると福岡平野でも前方後円墳が出現し、那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。福岡平野最古式の前方後円墳として、三角縁神獣鏡が出土した那珂八幡古墳（全長75m）がある。これに後続する盟主墳として安徳大塚古墳（全長62m）や三角縁神獣鏡が出土したとされる卯内尺古墳がある。市域において明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群周辺にはかつて前方後円墳があったという指摘があるほか、江戸時代には三角縁神獣鏡が出土しており、有力な在地勢力が存在したと考える。

〈集落〉 福岡平野の拠点集落としては、博多湾沿岸の西新町遺跡、博多遺跡群や那珂・比恵遺跡群がある。市域では仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代後期から継続し、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡などでも集落が出現する。この他、森園遺跡や本堂遺跡でも再び集落の形成が認められる。

【中期】

〈墳墓〉 福岡平野の盟主墳として初期横穴式石室を導入した老司古墳（全長76m）があり、博多遺跡群でも博多1号墳（全長56m）が築造される。また剣塚北古墳、井尻B1号墳、野藤1号墳、貝徳寺古墳など中規模の前方後円墳・円墳がある。市域では5世紀前半の笹原古墳（円墳：30m）があり、隣接して5世紀後半の成屋形古墳（帆立貝式前方後円墳：32m、太宰府市）が築造され、御笠川流域の盟主墳と考えられている。5世紀後半には牛頸塚原古墳群や古野古墳群で群集墳の形成が始まり、このうち古野古墳群では、鏡・鈴・鉄剣・農工具類といった豊富な副葬品を有する古墳もあり、成屋形古墳につぐような有力な人物がいたことを示す。

〈集落〉 集落遺跡は福岡平野全域で非常に希薄で、前代までの拠点集落である那珂・比恵遺跡群や西新町遺跡は消滅する。周辺では高畑遺跡、立花寺B遺跡などで滑石製品の生産を伴う集落が展開する。市域では石勺遺跡が弥生終末から継続する大規模な集落で、初期のカマドや朝鮮半島系の軟質系土器が出土し、滑石製品の生産も伴うことから拠点集落と位置づけられよう。このほか仲島遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、金山遺跡、原田遺跡、上園遺跡などで集落が展開する。

【後期】

〈墳墓〉 福岡平野の盟主墳として6世紀中頃築造の東光寺剣塚古墳（75m）や日拝塚古墳（46m）といった前方後円墳がある。6世紀後半には大型前方後円墳は姿を消し、これに代わり6世紀後半

第2図 遺跡分布図 (A3 折込)

第 2 図 遺跡分布図 (A3 折込)

以降、福岡平野一帯の丘陵上には直径 10 m ほどの小円墳を主体とした群集墳が爆発的に増加する。市域では月隈丘陵から乙金山・四王寺山麓にかけて大規模な群集墳が展開し、善一田古墳群・王城山古墳群をはじめとする乙金古墳群がこれに該当する。善一田古墳群は朝鮮半島系資料や鉄器生産に関わる資料が豊富であり、王城山古墳群では 7 世紀を中心とした新羅土器が集中することが特徴である。このうち、善一田 18 号墳が最古・最大（6 世紀後半築造・直径約 25 m の円墳）で、豊富な副葬品を有することから当地域の盟主的な墳墓に位置づけられる。また市域南部では須恵器工人の墓と考えられる牛頸中通・後田・小田浦古墳群や、6 世紀後半の大型円墳である日ノ浦 1 号墳がある。また、特殊な墳墓として梅頭窯跡では窯跡を転用した墳墓があり象嵌大刀を副葬する。これらの横穴式石室を主体部とする古墳や群集墳は 6 世紀後半～7 世紀にかけて築造し、8 世紀代まで追葬を行うものもある。

〈集落〉 6 世紀中頃以降、福岡平野の各地で集落が再び増加する。比恵遺跡群では 6 世紀後半に大型建物群が出現し、「那津官家」の可能性が指摘される。市域では仲島遺跡、塚原遺跡群、日ノ浦遺跡群、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡、薬師の森遺跡などで集落が展開し、7 世紀代まで継続するものが多い。仲島遺跡は集落規模が大きく、多数の掘立柱建物の存在や多量の馬骨・子持ち勾玉などの存在から、拠点的な集落と考えられる。牛頸窯跡群周辺の塚原遺跡群、日ノ浦遺跡群、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡などは須恵器工人集落と位置づけられる。薬師の森遺跡は、一部に渡来人が居住し鉄器生産・須恵器生産に関わる集落であることが明らかになっており、先述の乙金古墳群との対応関係が確認できる。なお、牛頸窯跡群の開始は 6 世紀中頃に求められ、乙金・四王寺山麓の乙金窯跡・雉子ヶ尾窯跡もこれに近接した時期に須恵器生産を開始する。

飛鳥時代 7 世紀前半代は集落・墳墓ともに古墳時代後期の様相を踏襲する。墳墓で注目すべきは大野城市と福岡市博多区の境界に位置する今里不動古墳で、7 世紀前半前後の大型円墳（直径約 30 m）とされ、御笠川右岸地域の盟主墳である。また 6 世紀後半の比恵遺跡群に展開した大型建物群は那珂遺跡群に移動する。この時期牛頸窯跡群の須恵器生産はひとつのピークを迎える。また野添窯や月ノ浦窯などでは初期瓦を生産しており、那津官家比定地の那珂遺跡に供給されたことが知られる。牛頸窯跡群周辺では集落の数や住居の数が飛躍的に増加し、牛頸塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡などは前代から継続する須恵器工人集落と考えられている。7 世紀中頃～後半には、中国・朝鮮半島を含む東アジア世界が激動の時代をむかえる。日本も白村江の戦（663 年）で敗戦を経験し、日本史上初の国際的な危機に直面する。これに伴い 664～665 年にかけて水城・大野城が相次いで築造される。国内情勢でも壬申の乱（672 年）が起こり、これを機に律令体制に基づく本格的な中央集権国家を形成していくことになる。また大宰府では第 I 期政庁が成立する。このような背景の中、市域全体で遺構・遺物の減少が認められる。例えば、薬師の森遺跡で 7 世紀中頃～後半段階に一時的に遺構・遺物が希薄となる。乙金古墳群では 6 世紀末～7 世紀初頭前後に古墳築造のピークを迎え、7 世紀後半にかけて順次築造数が減少していく。また、牛頸窯跡群における窯の数も減少し、一時的に須恵器生産も停滞期を迎える。

奈良時代 奈良時代には律令国家が成立し、九州も大宰府を中心とした支配体制が整い、各地に官衙が設置される。この時期には官道も整備され、井相田 C 遺跡、板付遺跡、那珂久平遺跡や谷川

遺跡、先ノ原・春日公園内遺跡などで道路状遺構が確認されている。集落遺跡として市域では仲島遺跡や隣接する井相田C遺跡で掘立柱建物を中心とした集落が展開する。周辺の高畑遺跡は「高畑廃寺」あるいは那珂郡衙の可能性が指摘され、麦野遺跡・南八幡遺跡で大規模な村落が成立し、御笠川中流域の官道沿いに官衙や村落が展開している景観が復元できる。牛頸窯跡群では8世紀前半に窯の数が増加し、供膳具を中心に大量生産がおこなわれる。この他、本堂遺跡群では村落内寺院と考えられる遺構が確認されている。また、薬師の森遺跡では集落の経営を再開し、鍔帯金具・ヘラ書き須恵器・越州窯系青磁・製塩土器などの特殊遺物が分布する。鍛冶炉に加え、須恵器窯に関連する遺構もあり、古墳時代に引き続き手工業生産に関わる集落と考えられる。なお、水城では8世紀前半に門の建て替えがあり、東西門や欠堤部周辺を中心に水城に関わる遺構・遺物が展開する。

平安時代 平安時代前半の9・10世紀代は福岡平野全域で遺跡数が減少する。牛頸窯跡群も規模が縮小し、9世紀中頃には操業を停止する。市域の遺跡も減少し、前代に見られた仲島遺跡、井相田C遺跡や麦野遺跡の集落も9世紀代に消滅する。9～10世紀代では牛頸月ノ浦窯跡、本堂遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡で土坑墓、薬師の森遺跡で土坑墓や掘立柱建物が展開する。

なお、9世紀前半に改称した鴻臚館は対外交渉の窓口として機能し、9世紀後半以降は中国商人の滞在・交易施設となり、初期貿易陶磁器が大量に出土している。平安時代後半になると、11世紀中頃～後半に大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、かわって博多遺跡群において中世都市「博多」が成立する。律令制は完全に崩壊し、各地で武士が活躍する時代を迎える。市域においては塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡で輸入陶磁器を埋納する土坑墓が確認されており、有力者の存在を示す。集落は松葉園遺跡、御笠の森遺跡、宝松遺跡、上園遺跡で確認されている。なお、水城の外濠は平安時代末頃にはほぼ埋没し、西門周辺では経塚の造営や棒状土製品など土器生産に関わる遺物が集中することから、律令制の弛緩とともに本来の役割が終焉を迎えていくこととなる。なお、土師器・瓦器焼成に関わる棒状土製品は、水城西門周辺～上園遺跡・本堂遺跡周辺にかけて濃密に分布し、牛頸窯跡群終焉以降の土器生産の再開を示す。

鎌倉時代～戦国時代 市域では御笠の森遺跡、本堂遺跡、石勺遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などで遺構が確認されている。薬師の森遺跡では12世紀後半～14世紀にかけての中世墓が多数営まれているほか、集落を囲むと考えられる区画溝やピット群が広範囲に広がっており、比較的有力な集団が存在していたと考えられる。御笠の森遺跡は11世紀後半以降継続して集落が展開し、16世紀後半～17世紀中頃に多数の方形区画溝があり、有力農民層の集落跡と考えられている。なお、市域の戦国期山城として乙金の唐山城、牛頸の不動城があるが、未調査のため詳細不明である。

近世 後原遺跡、御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、村下遺跡、川原遺跡、屏風田遺跡などで遺構・遺物が確認されるが、当該期の遺跡の多くは現在の集落域と重複していると考えられる。このうち、市域中央部の後原遺跡は「白木原村」の本村にあたり、屋敷地や墓地が確認されており、地祇神社を中心とした集落景観が復元できる。また、市域東北部の薬師の森遺跡・原口遺跡・古野遺跡では近世～近現代にかけての墓地が展開し、乙金村の集団墓地と位置づけられる。

近代・現代 市域東北部の王城山遺跡・古野遺跡・原口遺跡で太平洋戦争時の防空壕跡を調査しており、このうち王城山遺跡のものは規模や遺物の内容から地下疎開工場と位置づけられる。また、市域中央部の野添遺跡では、本土決戦に備え野砲を設置したと考えられる洞窟壕が確認されている。

Ⅲ. 瑞穂遺跡第3次調査

1. 調査概要

調査地は瑞穂遺跡の北東端部、大野城市曙町1丁目12-3に所在し、低地部分にあたる。調査面積は100㎡である。調査地の現況は宅地で、表土・客土(25～35cm)、暗灰褐色土(20～30cm)を除去したところで淡黒灰色土～褐色土を検出し、この面を遺構面と捉え遺構検出を行った。その結果、調査区東側で溝状遺構1条、竪穴状遺構1基、調査区中央～西側にかけて多数のピットを検出した。遺物は古墳時代の土師器の他、瓦器や白磁が出土した。なお、調査区西側には近代遺構の攪乱が複数ある。

2. 遺構と遺物

(1) 溝状遺構(第3図、図版1)

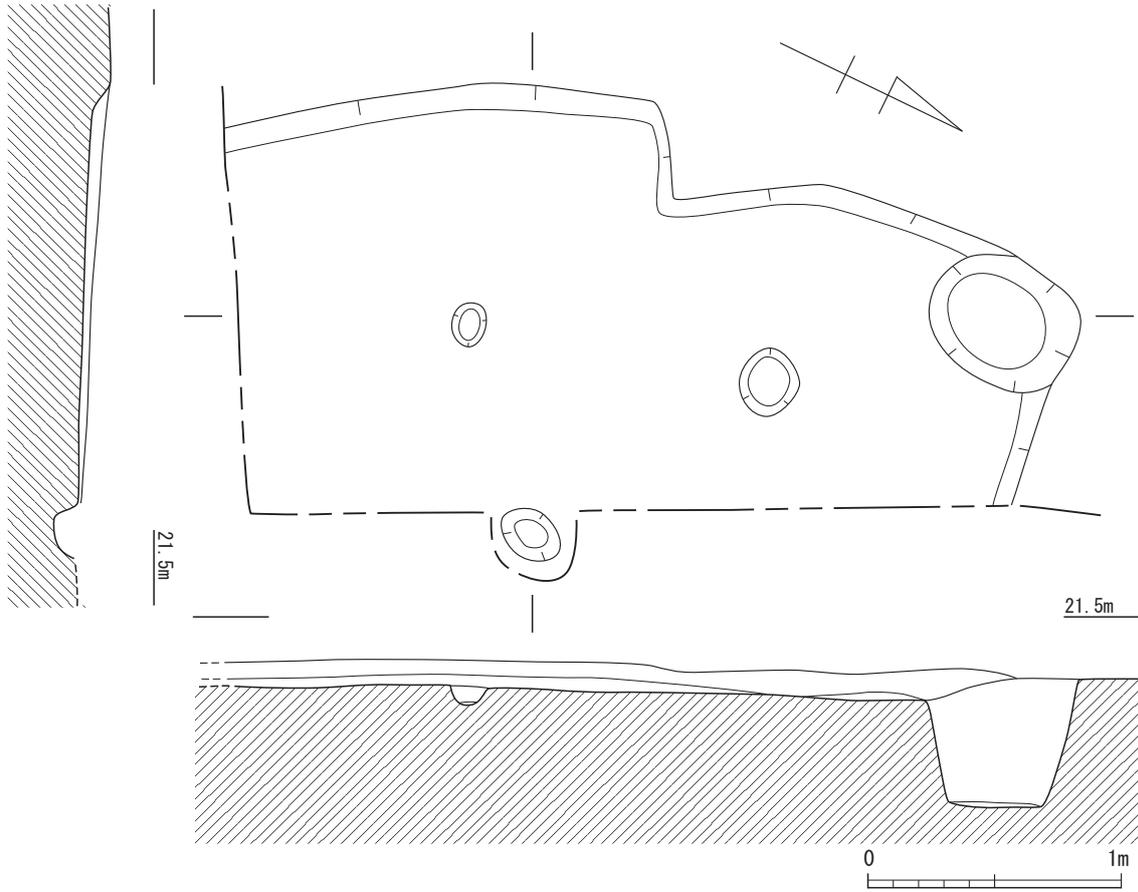
SD01 調査区東側を南北方向にのびる溝状遺構である。中央部で二股に分岐し、南北ともに調査区外にのびるため、全形は不明である。長さ9.5m以上、最大幅2.3m、深さ0.1mである。埋土中から古墳時代の土師器や平安時代の土師器が出土した。

出土遺物(第5図、図版75)

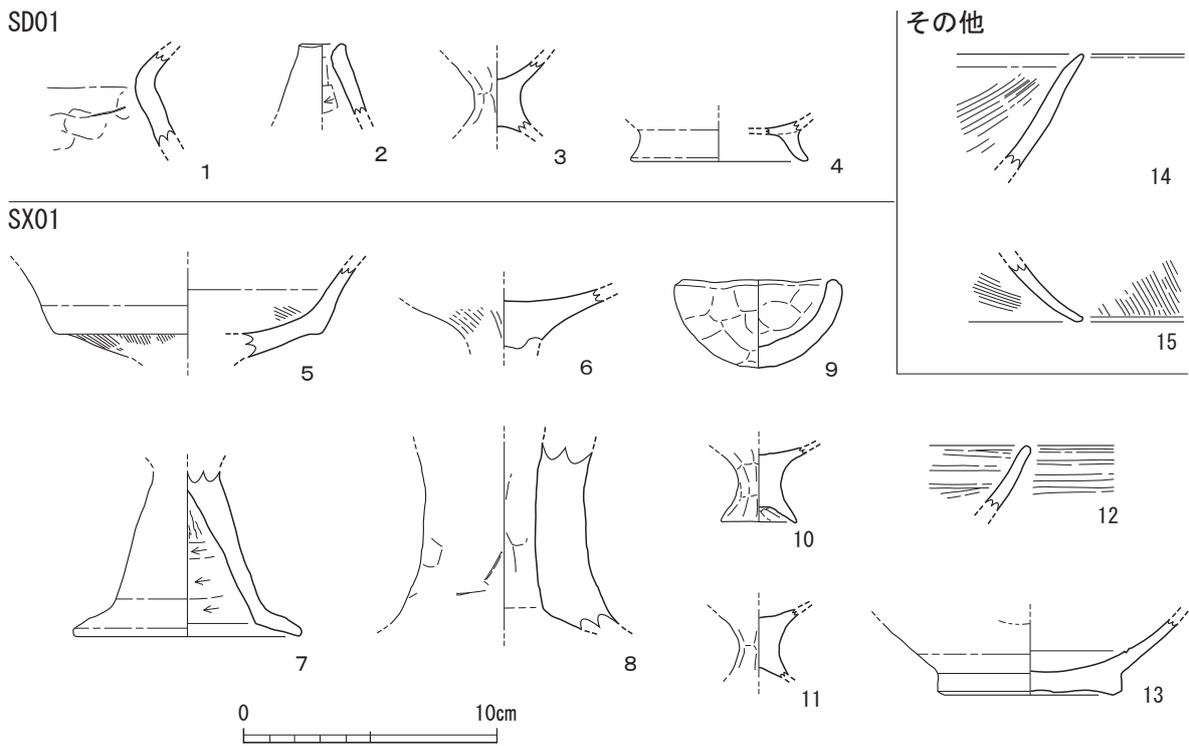
土師器(1～4) 1は甕の頸部片で、口縁端部は欠損する。内外面ともにナデ調整。2はミニチュア土器だが、器種は不明。脚裾部を欠損する。外面はナデ調整で、内面はヨコ方向のケズリ。3はミニチュア土器の高杯で、口縁部・脚裾部ともに端部は欠損する。内外面ともにナデ調整。4は椀



第3図 遺構配置図(1/100)



第4図 縦穴状遺構 (SX01) 実測図 (1/30)



第5図 出土遺物実測図 (1/3)

の高台部片。底部内面はナデ、高台部は内外面ともにヨコナデ。

(2) 竪穴状遺構 (第4図、図版1)

SX01 調査区南東隅部に位置する。東側・南側は調査区外に展開するため全形は不明であるが、南北3.3 m以上、東西1.7 m以上の不整形で、深さは0.1 mである。古墳時代の土師器のほか、瓦器や白磁碗が出土した。

出土遺物 (第5図、図版75)

土師器 (5～11) 5は高杯の杯部。外面は屈曲部から上位はヨコナデ、屈曲部より下位はハケメの後にナデ。6も高杯の杯部。外面はハケメ、内面はナデ。7は高杯の脚部で、脚柱部が少し膨らむものである。脚柱部外面と裾部内外面はナデで、脚柱部内面はヨコ方向のケズリ。8は支脚。内外面ともにナデ。9はミニチュア土器の鉢。内外面ともにナデ。10はミニチュア土器の高杯で、杯部端は欠損する。内外面ともにナデ。11もミニチュア土器の高杯で、杯部・裾部ともに端部は欠損する。内外面ともにナデ。

瓦器 (12) 碗の口縁部片。内外面ともにミガキ調整。

磁器 (13) 白磁碗IV類の底部である。内面に1条の沈線を施し、高台は低く削り出す。体部下位から底部外面は露胎。

(3) その他の出土遺物 (第5図、図版75)

土師器 (14・15) 14は高杯の杯部片。内外面ともにハケメの後研磨しており、内面にはハケメが残る。15は高杯の脚裾部片。外面はハケメ後ヨコナデ。内面はハケメ後ナデで、端部はヨコナデ。

3. 小結

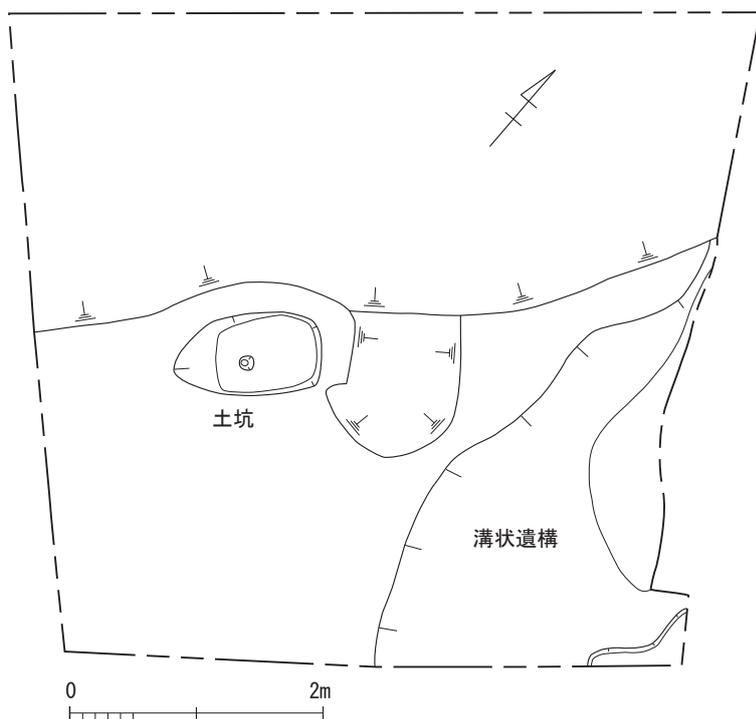
現場の所見では、溝状遺構は古墳時代の所産と考えていたが、土師器碗も含まれていることから、平安期まで下る可能性もある。竪穴状遺構も5世紀前半頃の遺物を中心に12世紀までの遺物を含んでおり、この幅の中で考えておきたい。いずれの遺構も性格については不明と言わざるをえない。

古墳時代の遺物に関してはミニチュア土器を多く含むことから、周囲で何らかの儀礼の場があった可能性がある。

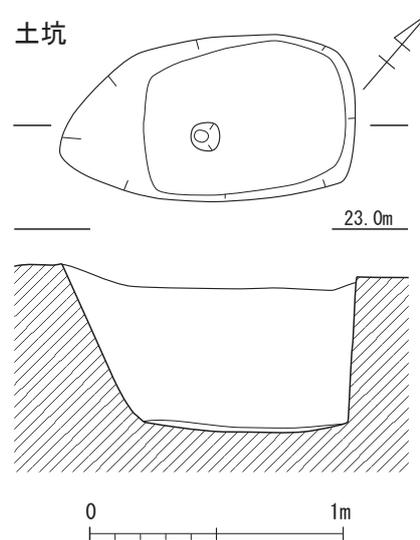
IV. 瑞穂遺跡第4次調査

1. 調査概要

調査地は瑞穂遺跡の中央部、大野城市瑞穂町2丁目1-5に所在し、低地部分に位置する。調査面積は30㎡である。調査地の現況は宅地で、客土(15cm)、褐色土(15cm)、黒色土(15cm)を除去したところで灰褐色土を検出し、この面を遺構面と捉え遺構検出を行った。その結果、調査区東南部で溝状遺構1条、調査区中央部で土坑1基を検出した。調査区北半部はカクランのため遺構面が消滅する。出土遺物はない。



第6図 遺構配置図 (1/60)



第7図 土坑実測図 (1/30)

2. 遺構

(1) 土坑 (第7図)

調査区中央部に位置する。長軸1.2m、短軸0.7mの平面楕円形である。深さは0.6mで、西壁は緩やかに立ち上がり、他は直立する。出土遺物はない。

(2) 溝状遺構 (第6図)

調査区南東部に位置する南北方向の落ち込みである。長さ4.0m以上、幅1.8m以上、深さ0.8mで、西壁は緩やかに立ち上がり、現状の床面は平坦である。出土遺物はない。

3. 小結

土坑・溝状遺構ともに出土遺物がないため時期的な位置づけは不明である。また、性格についても不明と言わざるをえない。

V. 瑞穂遺跡第7・8次調査

1. 調査概要

調査地は瑞穂遺跡の中央部、大野城市瑞穂町2丁目30-1の一部、31-1に所在し、微高地の最高所付近にあたる。

調査地の現況は公園で、表土直下で橙色粘質土を検出し、この面を遺構面と捉え遺構検出を行った。その結果、弥生時代の甕棺墓・木棺墓・土坑墓・石蓋土坑墓・石棺墓、古墳、近世～近現代の甕棺墓・桶棺墓・土坑墓・木棺墓などを確認した。

2. 遺構と遺物

(1) 弥生時代の遺構

① 甕棺墓

1号甕棺墓（第9・11図、図版6・76）

調査区中央部に位置し、5号甕棺墓に寄生する小型棺である。壺と壺を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸11.5m（床面で0.45m）、短軸0.7m（床面で0.4m）の楕円形を呈し、深さは0.35mで、上甕側にテラスがある。甕棺の主軸はN-14°-Eで、傾斜角度は約20°である。

16は上甕の壺である。口縁部はやや外傾する鋤先形で、胴部最大径付近と上位に1条の三角突帯を貼り付け、頸部内面に横方向のミガキが残る。17は下甕で、胴部上位が張る壺である。胴部2カ所に2条の三角突帯を貼り付ける。

2号甕棺墓（第9・11図、図版7・76）

調査区中央部に位置し、5号甕棺墓に寄生する小型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.5m（床面で0.65m）、短軸1.2m（床面で0.5m）の楕円形を呈し、深さは0.65mで、下甕は南側壁面に0.15mほど挿入される。甕棺の主軸はN-30°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

18は上甕。口縁部は内傾する逆L字状を呈す。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、外面にはタテ方向のハケメが残る。19は下甕。上甕と同様に内傾する逆L字状口縁で、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。最大径が胴部上位にあり、外面はタテ方向のハケメである。

3号甕棺墓（第9・12図、図版6・7・76）

調査区中央部に位置し、5号甕棺墓に寄生する小型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.05m（床面で0.3m）、短軸0.6m（床面で0.4m）の楕円形を呈し、深さは0.55mで、上甕側にテラスがある。甕棺の主軸はN-76°-Wで、傾斜角度は約13°である。

20は上甕で口縁部は逆L字状を呈し、直下に1条の三角突帯を貼り付ける。最大径は胴部上位にあり、外面はハケメ調整である。21は下甕である。内傾する逆L字状口縁をもち、口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、胴部が張る。

4号甕棺墓（第9・12図、図版8・76）

調査区中央部に位置する。5号甕棺墓の東側に隣接する大型棺で、鉢(上甕)・甕(中甕)・甕(下甕)を組み合わせた、いわゆる多連棺である。墓坑は長軸2.15m(床面で0.35m)、短軸1.65m(床面で0.7m)の隅丸方形を呈し、深さは1.15mである。棺の主軸は墓坑主軸と平行せず、45°ほど振れる。床面は上甕側から階段状のテラスが3段あり、下甕は南側壁面に0.7mほど挿入される。甕棺の主軸はN-10°-Eで、傾斜角度は下甕はほぼ水平、中甕・上甕が14°である。

22は上甕の鉢である。口縁部は逆L字状となり、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部中位から下位にかけて黒斑がある。23は中甕で、口縁部と底部を打ち欠く。胴部が張り、最大径付近に1条のM字突帯を貼り付ける。24は下甕。胴部は砲弾形である。口縁部はT字状でやや外傾し、内側に大きく張り出す。胴部中位に1条のM字突帯を貼り付け、わずかにハケメが残る。胴部下位に大きく黒斑が残る。

5号甕棺墓(第9・13図、図版9・76)

調査区中央部に位置する大型棺で、1号・2号・3号甕棺墓が寄生する。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸2.5m(床面で2.4m)、短軸1.6m(床面で1.0m)の隅丸方形を呈し、深さは1.25mである。床面は上甕側に階段状のテラスが2段あり、下甕は東側壁面に0.6mほど挿入する。甕棺の主軸はN-60°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

25は上甕である。口縁部はT字状でやや外傾する。胴部は砲弾形で胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。底部はやや上げ底である。26は下甕。口縁部はやや外傾するT字状で、胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。底部はやや上げ底である。

6号甕棺墓(第9・13図、図版9・77)

調査区中央部に位置し、SX35の北側に隣接する小型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.15m(床面で1.0m)、短軸0.8m(床面で0.4m)の楕円形を呈し、深さは0.2mである。甕棺の主軸はN-10°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

27は上甕で、28は下甕である。上下甕とも同様の器形で、胴部上位が内湾し、逆L字状の口縁をもつ。いずれも外面はタテ方向のハケメが残る、底部は上げ底となる。

7号甕棺墓(第10・13図、図版9・10・76)

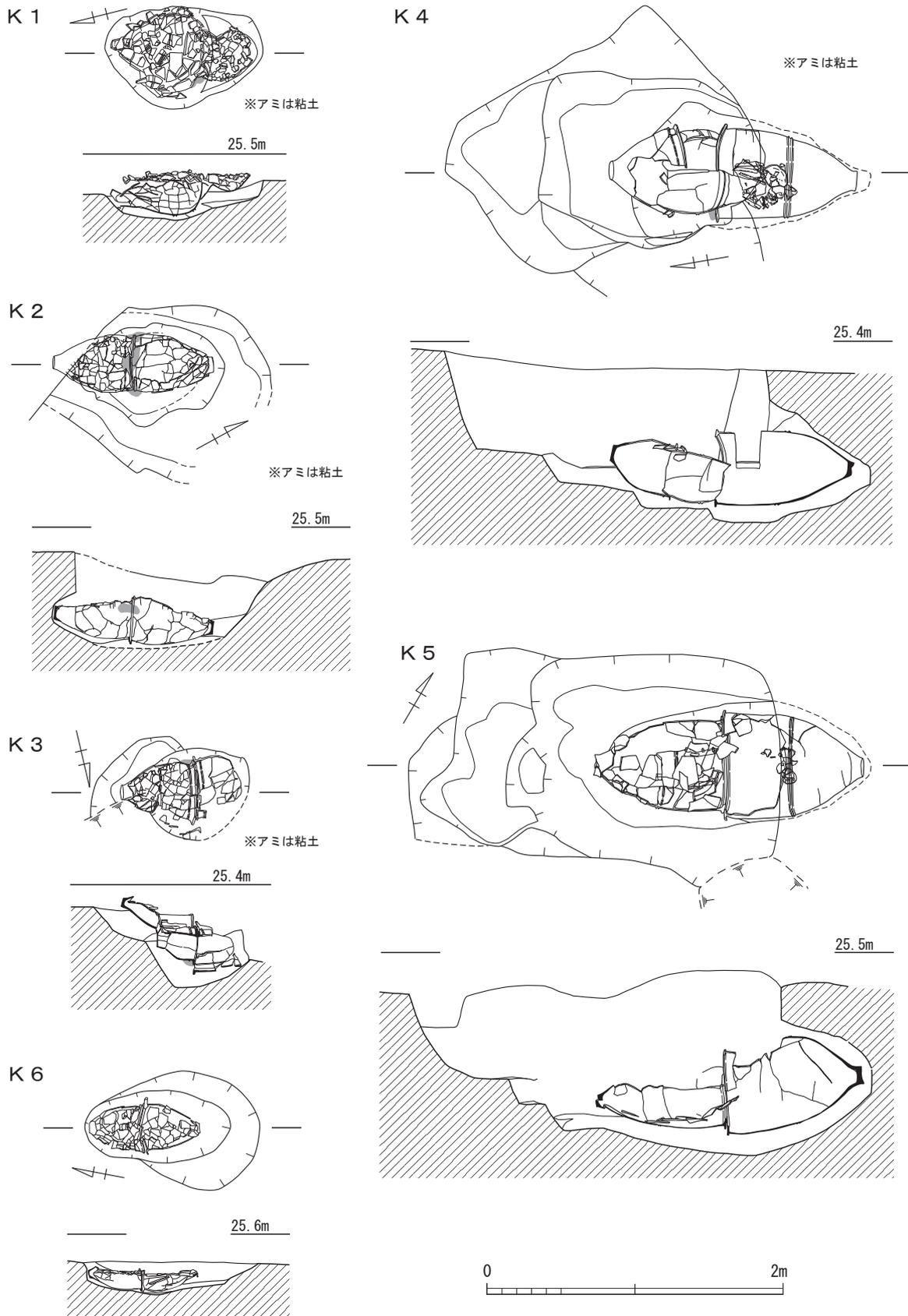
調査区中央東側に位置し、15号甕棺墓の東側に隣接する大型棺である。近世墓に切られるため、遺存状況は悪い。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.1m以上、短軸1.05m(床面で0.6m)の不整長方形を呈し、深さは0.45mである。甕棺の主軸はN-33°-Wで、傾斜角度は約5°である。

29は上甕の鉢である。口縁はT字状で端部に刻目を施し、口縁下に三角突帯を2条貼り付ける。30は下甕で、胴部がほぼ直立する砲弾形の器形をもち、口縁はT字状で内側に張り出す。中位にM字突帯を1条貼り付ける。

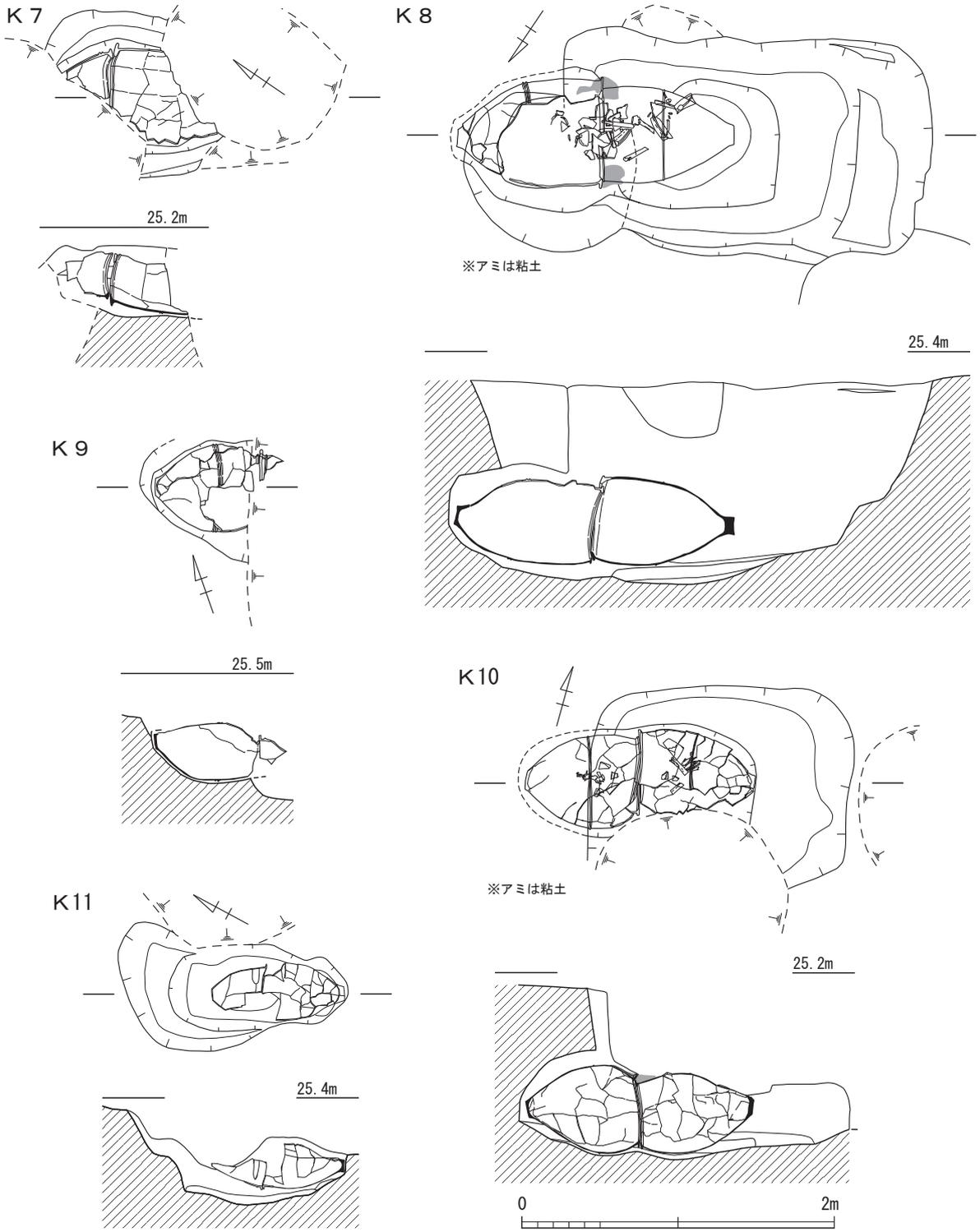
8号甕棺墓(第10・14図、図版10～12・77)

調査区中央東側に位置し、15号甕棺墓の西側に隣接する大型棺である。一部は近世墓により破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸2.35m(床面で2.5m)、短軸1.45m(床面で0.6m)の長方形を呈し、深さは1.3mである。床面は上甕側に2段のテラスがあり、下甕

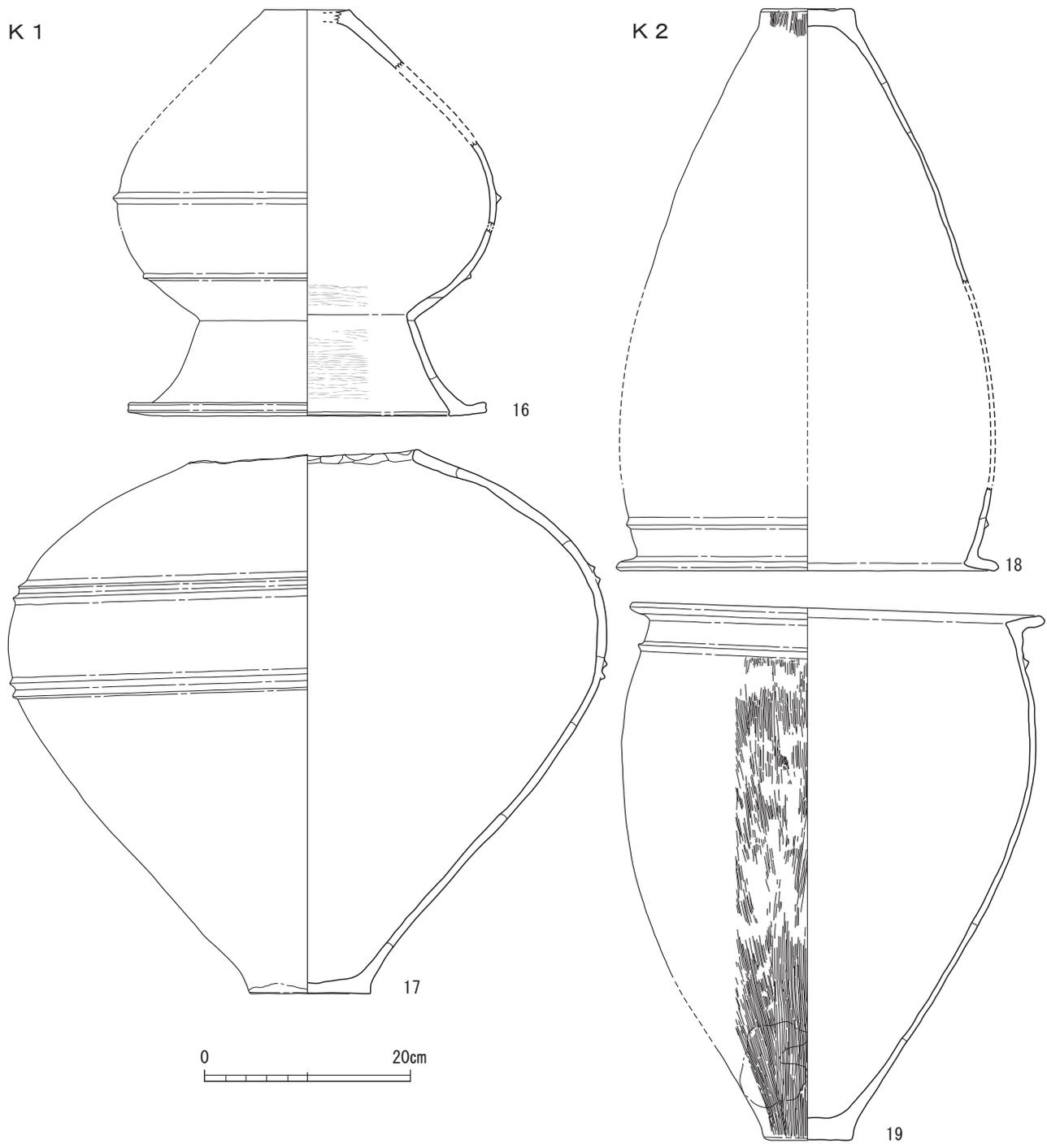
7・8次遺構配置図 A3
裏白



第9図 1号～6号甕棺墓実測図 (1/40)



第10図 7号～11号甕棺墓実測図 (1/40)



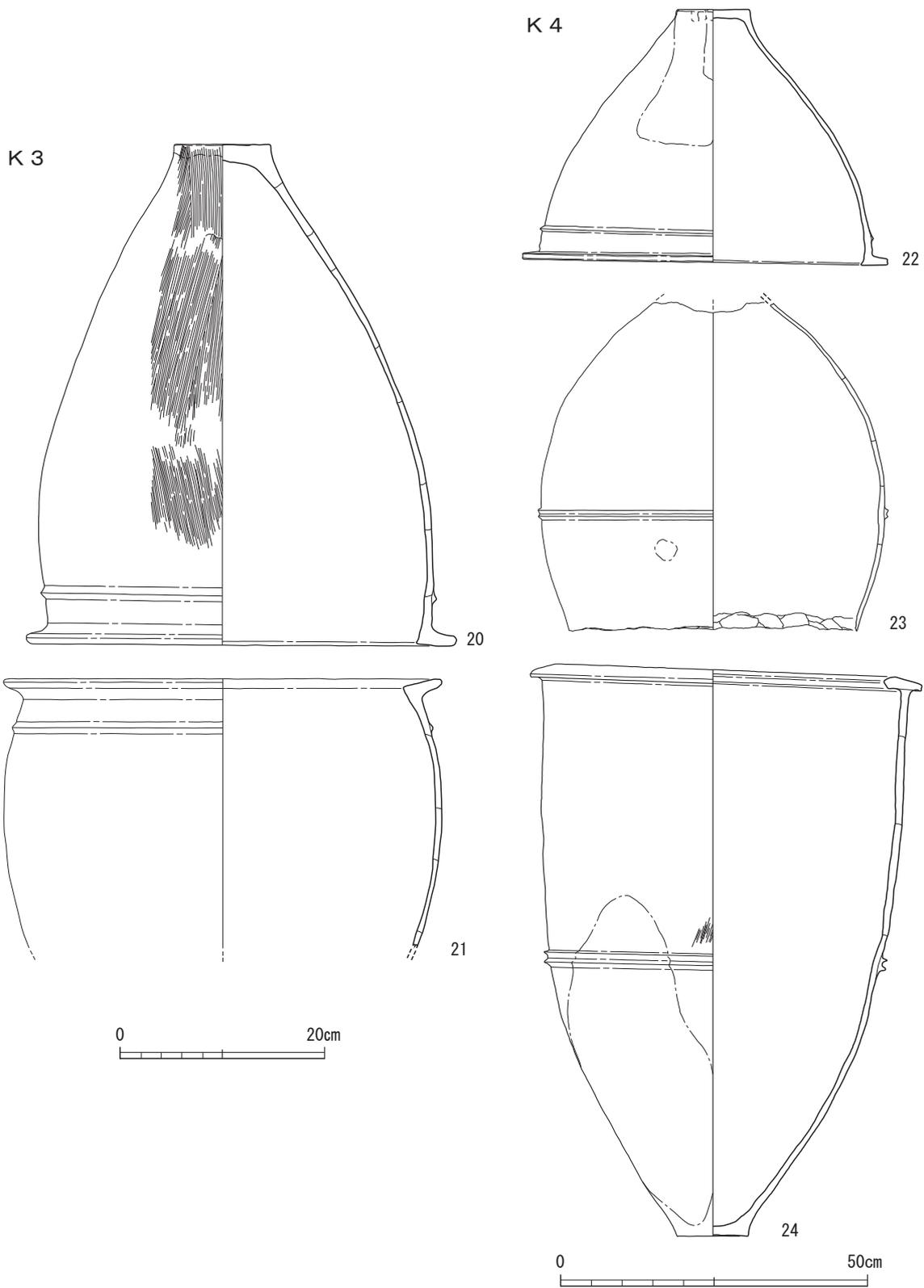
第11図 1号・2号甕棺実測図(1/6)

は北側壁面に0.35mほど挿入する。甕棺の主軸はN-56°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

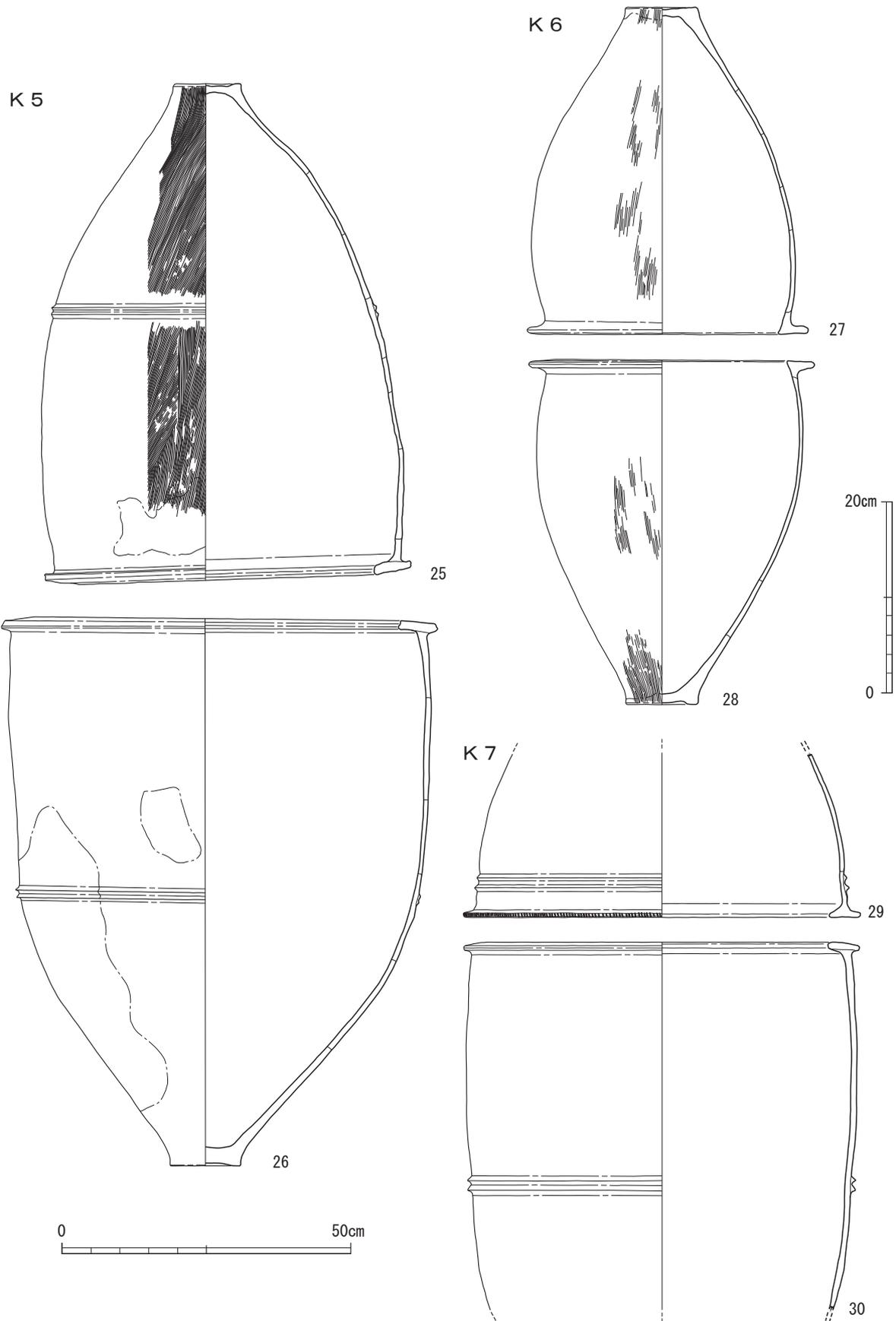
31は上甕である。丸みを帯びた砲弾状の器形で、口縁部は外側に傾斜するT字状である。胴部中位に1条の三角突帯を貼り付ける。32の下甕は、砲弾形を呈する。口縁部はT字状で、上面はやや外傾する。胴部中位に1条のM字突帯が貼り付く。胴部中位から下位に大きく黒斑が残る。

9号甕棺墓(第10・14図、図版12・77)

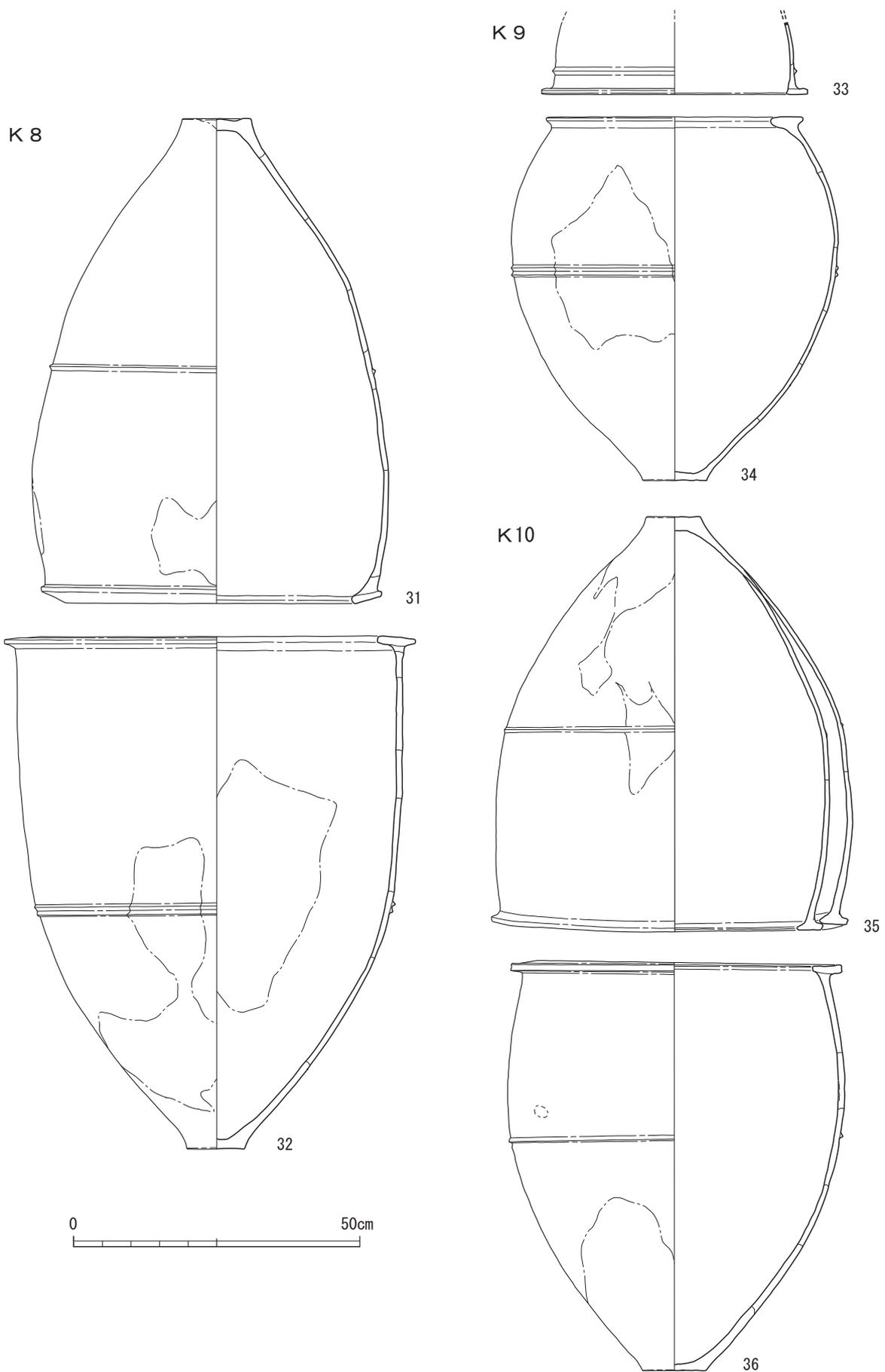
調査区中央東側に位置し、16号甕棺墓を切る大型棺である。近世墓に切られるため、遺存状況



第12図 3号・4号甕棺実測図 (20・21は1/6、22～24は1/10)



第13図 5号～7号甕棺実測図 (25・26・29・30は1/10、27・28は1/6)



第14図 8号～10号甕棺実測図(1/10)

は悪い。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 0.7m 以上、短軸 0.8m 以上で楕円形を呈し、深さは 0.45m である。甕棺の主軸は N-71°-W で、傾斜角度はほぼ水平である。

33 は上甕である。胴部下位を欠損、口縁部は逆 L 字状で口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付ける。34 は下甕。口縁は水平で、内側に張り出し厚みがある。胴部最大径は上位にあり、丸味を帯びた器形である。胴部中位に 2 条の三角突帯を張り付ける。胴部に大きな黒斑が残る。

10 号甕棺墓 (第 10・14 図、図版 12・13・77)

調査区南東部に位置し、SX20 の東側に隣接する大型棺である。一部、近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 1.7m (床面で 1.9m)、短軸 1.3m (床面で 0.5m) の長方形を呈し、深さは 1.1m である。下甕は西側壁面に 0.5m ほど挿入する。甕棺の主軸は N-81°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。

35 は上甕で胴部の歪みが大きい。口縁部はほぼ水平な T 字状で、胴部中位に低い三角突帯を 1 条貼り付ける。胴部から口縁部にかけてややすぼまる砲弾形の器形である。36 の下甕は、口縁部は逆 L 字状となり、胴部中位に 1 条の三角突帯を貼り付ける。胴部は上甕と同様に口縁に向かってややすぼまる。

11 号甕棺墓 (第 10・16 図、図版 14・77)

調査区中央部に位置し、12 号甕棺墓に近接する小型棺である。一部、近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 1.4m (床面で 0.4m)、短軸 0.75m (床面で 0.2m) の不整楕円形を呈し、深さは 0.6m である。床面は上甕側にテラスを有する。甕棺の主軸は N-28°-W で、傾斜角度は約 7° である。

37 は上甕で、胴部下位を欠損する。口縁部は逆 L 字状で内傾する。口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付け、外面にハケメが残る。38 は下甕。胴部上位に最大径がある。口縁部は逆 L 字状で内傾し、口縁下に 1 条の三角突帯を貼り付ける。外面はハケメである。

12 号甕棺墓 (第 15・16 図、図版 14・77)

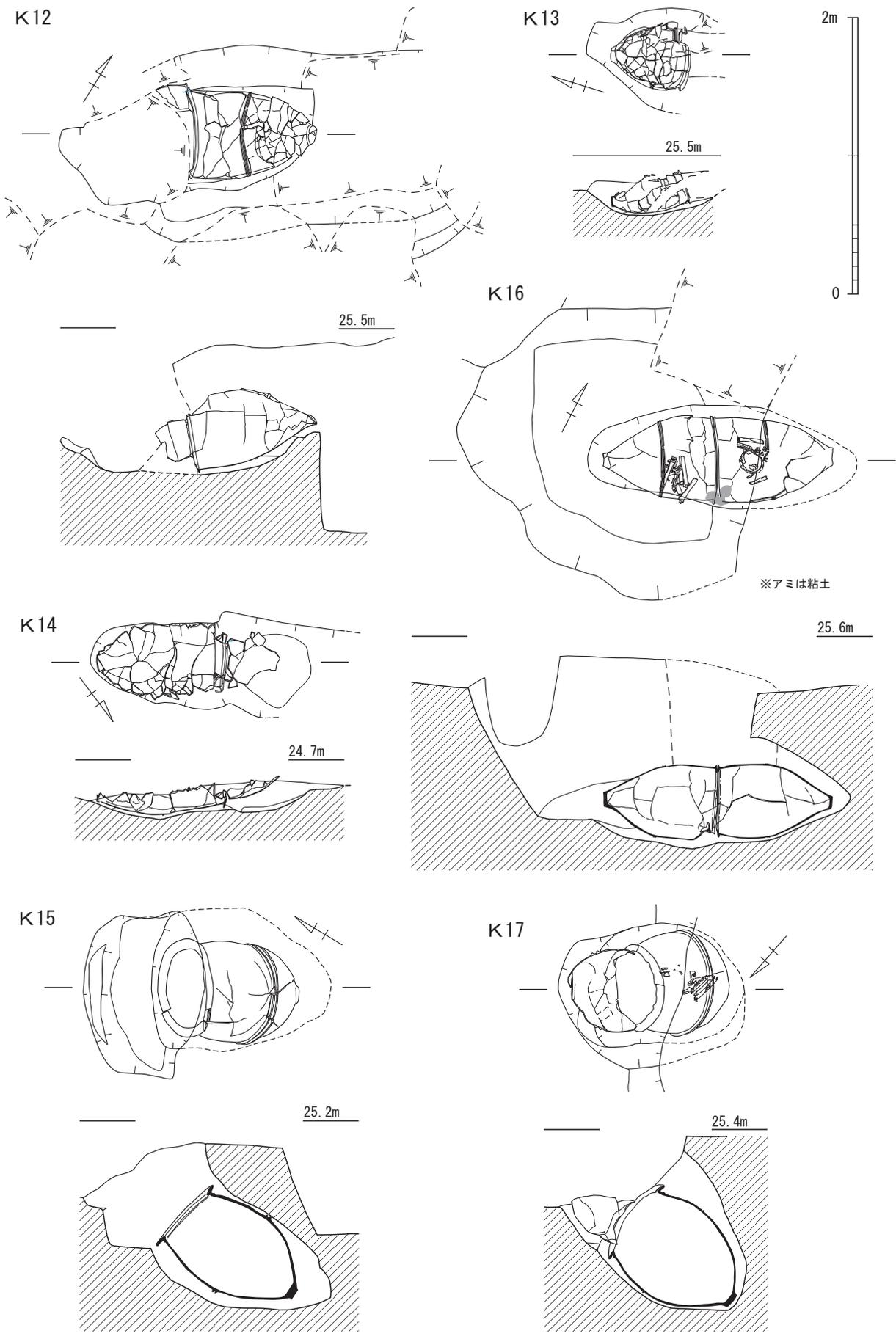
調査区中央部に位置し、SX64 に切られる大型棺である。近世墓に破壊されるため、遺存状況は悪い。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 2.3m、短軸 1.35m (床面で 0.5m) の楕円形を呈し、深さは 1.0m である。甕棺の主軸は N-58°-E で、傾斜角度は 13° である。

39 は上甕である。口縁部は水平な T 字状で、内外への張り出しは小さい。胴部から口縁部へゆるやかに内湾する。40 の下甕は、胴部は砲弾形で上位は外湾気味である。口縁部は T 字状で、内側に張り出してやや外傾する。胴部中位に 1 条の M 字突帯を貼り付ける。胴部下位に黒斑が残る。

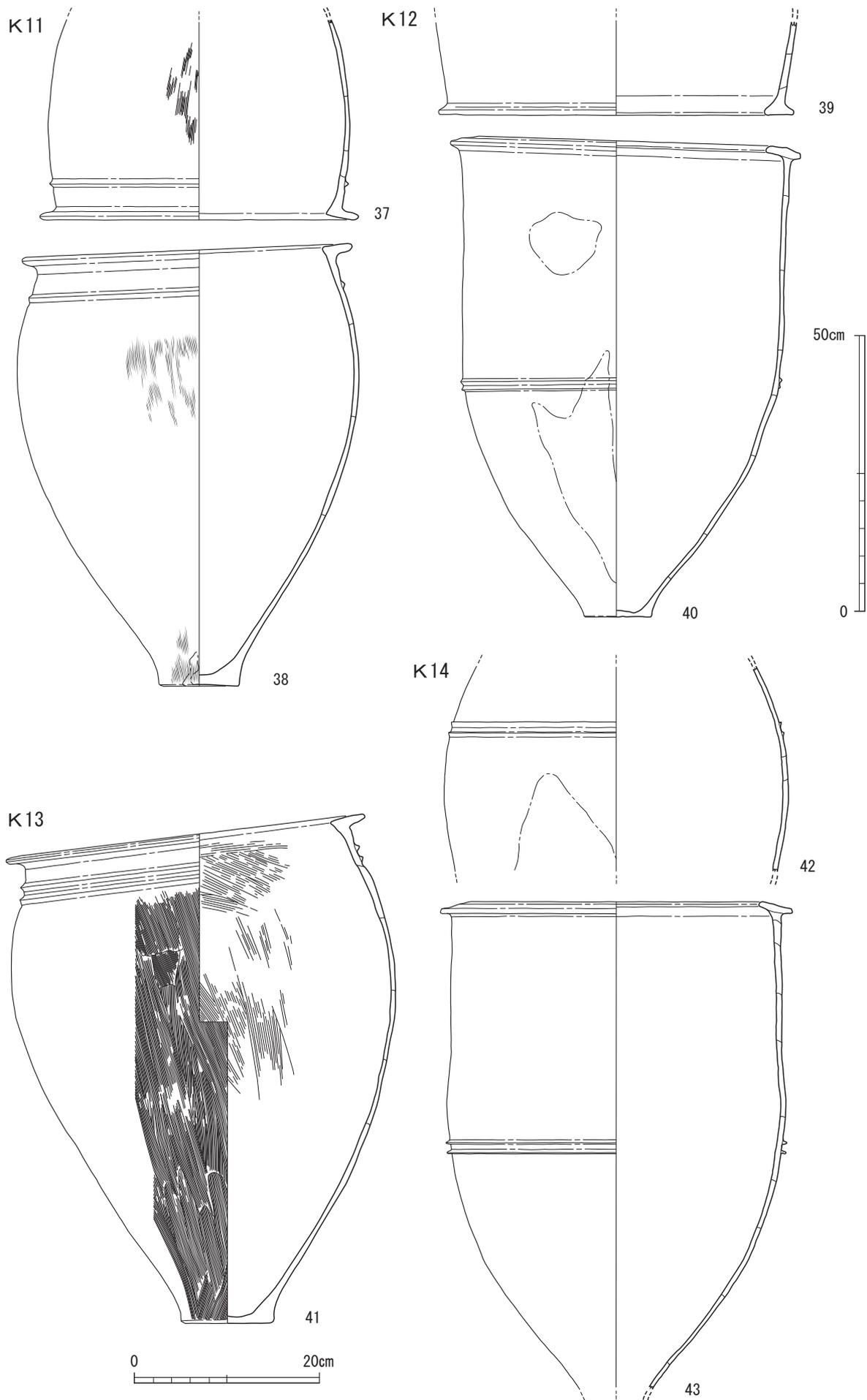
13 号甕棺墓 (第 15・16 図、図版 78)

調査区中央東側に位置し、16 号甕棺墓に寄生する小型棺である。上面を削平され下甕のみ遺存するため合口甕棺か単棺かは不明である。墓坑は長軸 0.8m 以上、短軸 0.75m (床面で 0.4m) の楕円形を呈し、深さは 0.35m である。甕棺の主軸は N-18°-W で、傾斜角度は 16° である。

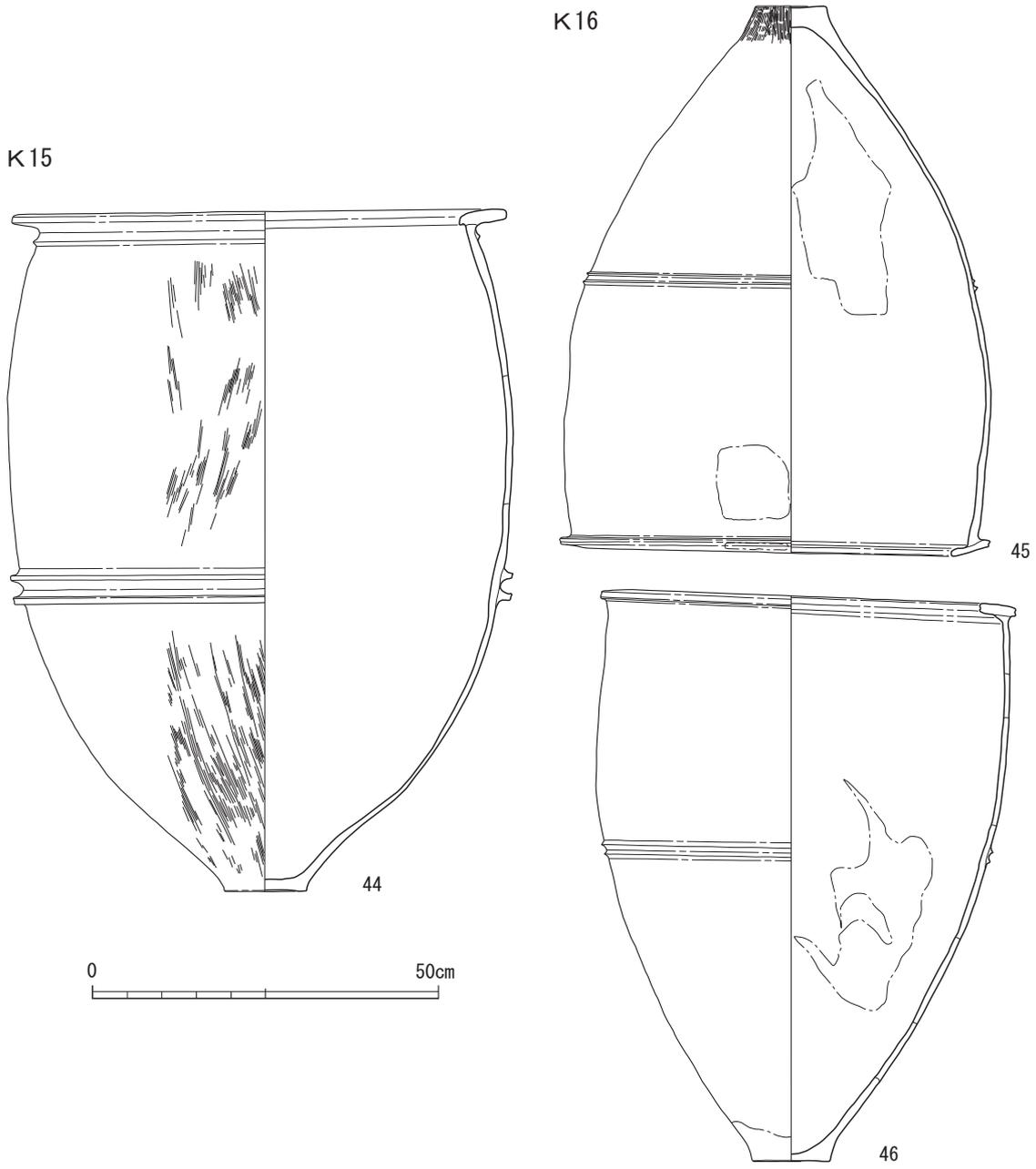
41 は下甕。全体的に歪み、大きく傾く。口縁部は逆 L 字状で、口縁下に 2 条の三角突帯を貼り付ける。内外面ともハケメである。



第15図 12号～17号甕棺墓実測図 (1/40)



第16図 11号～14号甕棺実測図 (37・38・41は1/6、他は1/10)



第17図 15号・16号甕棺実測図 (1/10)

14号甕棺墓 (第15・16図、図版78)

調査区中央東端に位置する大型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。上面が大きく削平されるため、規模・形状は不明確であるが、墓坑は長軸1.8m以上、短軸0.6m以上(床面で0.5m)の細長い楕円形を呈し、深さは0.3mである。甕棺の主軸はN-53°-Wで、傾斜角度は13°である。

42は上甕である。胴部は丸みを持ち、中位に2条の低い三角突帯を貼り付ける。43は下甕で、口縁部はT字状で外傾する。胴部は砲弾形となり、中位に2条の細い三角突帯が貼り付く。

15号甕棺墓 (第15・17図、図版14・15・78)

調査区中央東側に位置し、7号・18号甕棺墓に近接する大型棺で、甕を用いた単棺である。墓坑上面は0.9m×1.2mの楕円形で、横口状に掘り込んでおり、甕の大半は南側壁面に挿入する。深

さは1.2m、甕棺の主軸はN-31°-Wで、傾斜角度は38°である。

44は下甕である。胴部は丸味をち、口縁部は逆L字状で、内側は僅かに突出する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位に2条のコの字突帯を貼り付ける。外面にタテ方向のハケメが残る。

16号甕棺墓（第15・17図、図版16・17・78）

調査区中央東側に位置し、9号甕棺墓に切られる大型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸2.2m（床面で8.3m）、短軸2.1m（床面で0.7m）の不整形を呈し、深さは1.4mである。上甕側の床面にテラスがあり、下甕は東側壁面に0.7mほど挿入する。甕棺の主軸はN-62°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

45は上甕である。胴部は砲弾形で、口縁部が内側に大きく張り出し外傾する。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。底部側面にハケメが残る。46は下甕。胴部は砲弾形を呈す。口縁部上面はほぼ水平で、内側に大きく張り出す。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付け、上下甕とも黒斑が残る。

17号甕棺墓（第15・18図、図版18・78）

調査区中央東側に位置し、13号・16号・19号甕棺墓に近接する大型棺で、甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑上面は0.9m×1.0mの楕円形で、横口状に掘り込んでおり、下甕の大半は南側壁面に挿入する。深さは1.25mで、甕棺の主軸はN-51°-Eで、傾斜角度は51°である。

47は上甕である。口縁部は逆L字状でやや内傾し、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。器形は卵形で丸味をもち、胴部中位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内外面ともハケメを施す。48は下甕。胴部は丸味を持ち、口縁部は逆L字状で内傾する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、胴部中位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。胴部中位に黒斑が残る。

18号甕棺墓（第18・19図、図版80）

調査区中央東側に位置し、19号甕棺墓に寄生する大型棺である。上面が削平されるため、上甕の有無や墓坑の規模・形状は不明だが、甕棺の主軸はN-76°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

49は下甕である。胴部は丸味をもち、口縁部は鋤先状である。胴部最大径付近に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位に大きく黒斑が残る。

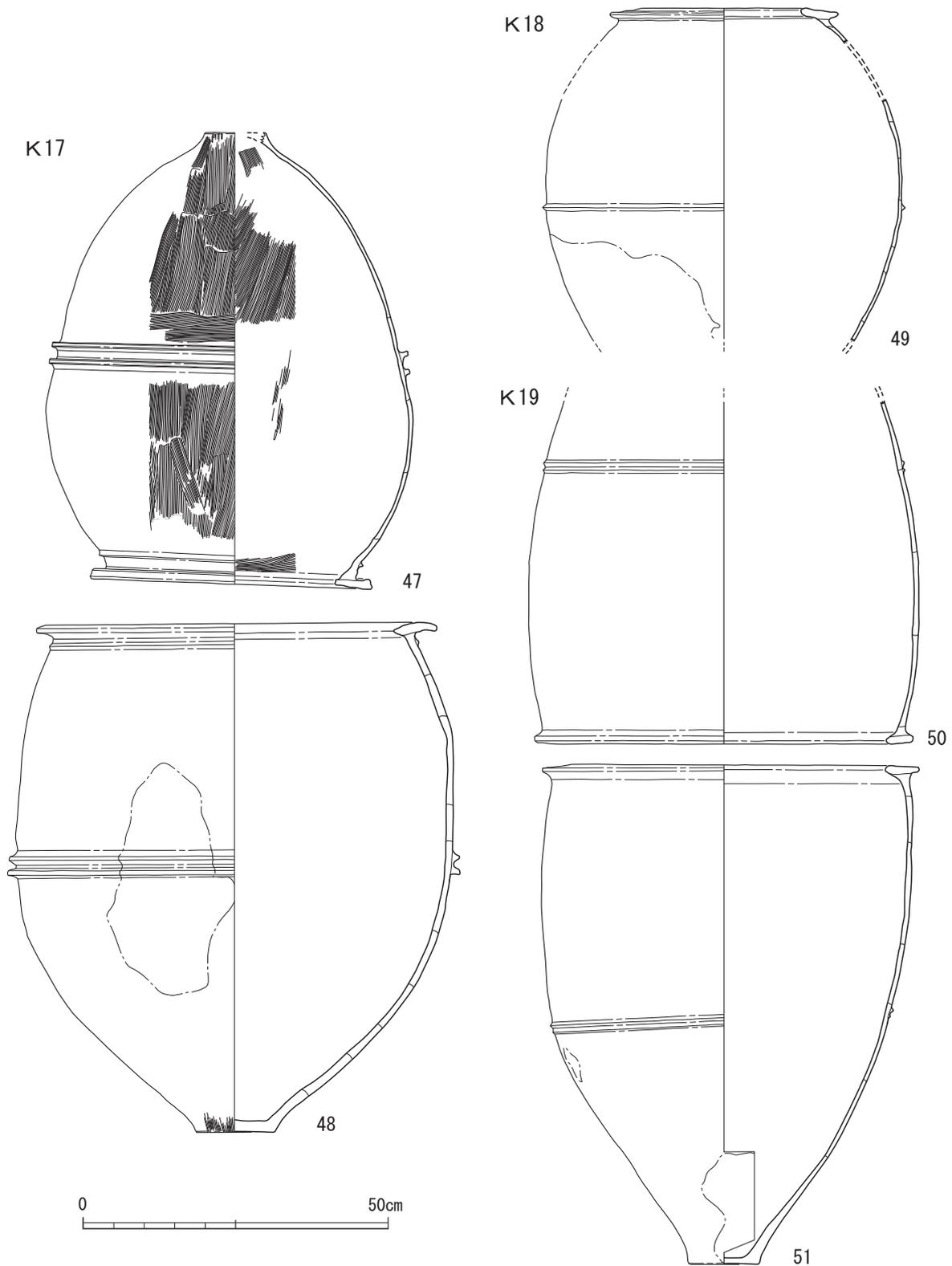
19号甕棺墓（第18・19図、図版19・78）

調査区中央東側に位置し、18号甕棺墓が寄生する大型棺である。一部は近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.3m以上、短軸1.1mの不整形楕円形を呈し、深さは0.65mである。下甕の大半は西側壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-75°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

50は上甕である。口縁部は小さめのT字状を呈し、やや外傾する。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。51は下甕で、胴部は砲弾状を呈す。口縁部はほぼ水平なT字状を呈し、胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。

20号甕棺墓（第19・20図、図版78）

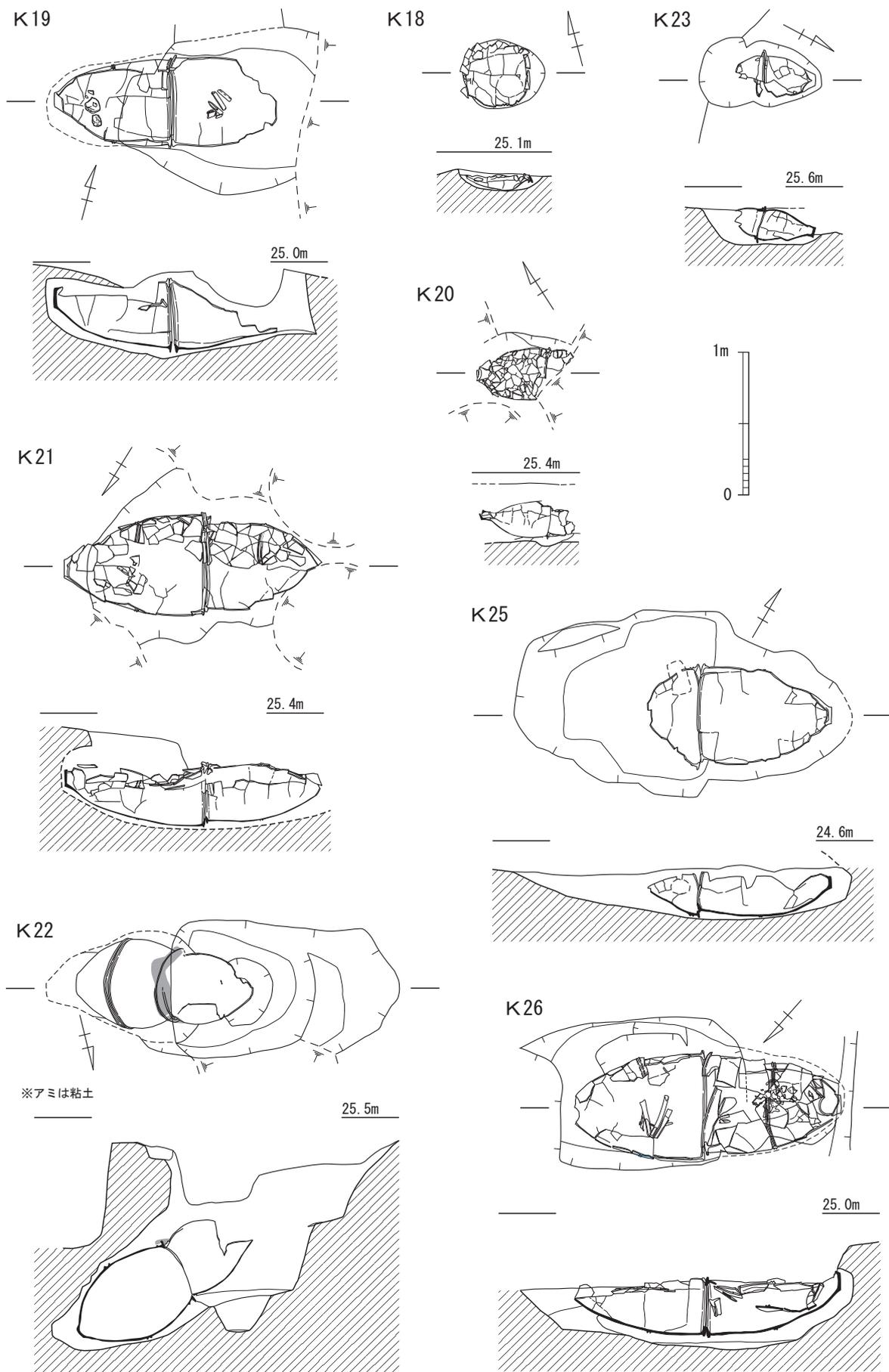
調査区中央部に位置し、21号甕棺墓に寄生する小型棺である。近世墓に破壊されるため遺存状



第18図 17号～19号甕棺実測図(1/10)

況が悪く、墓坑の規模・形状は不明であるが、甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。深さは0.45mである。甕棺の主軸はN-58°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

52は上甕である。口縁部は鋤先状で口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位は欠損する。53は下甕。胴部上位はやや内湾している。口縁部は内側にやや張り出す鋤先状で、口縁下に1条



第19図 18号～23号・25号・26号甕棺墓実測図(1/40)

の三角突帯を貼り付ける。底部側面にハケメが残り、胴部に大きく黒斑が残る。

21号甕棺墓（第19・20図、図版19・20・79）

調査区中央部に位置し、20号甕棺墓が寄生する大型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、近世墓に破壊されるため墓坑の規模・形状は不明であるが、墓坑は長軸1.6m以上、短軸1.23m以上、深さは0.7mである。下甕の一部は、北側壁面に0.2mほど挿入する。甕棺の主軸はN-59°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

54は上甕である。胴部はやや丸味をもつ。口縁部は内側に大きく張り出しやや外傾する。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。内面にハケメが残る。胴部下位に黒斑が残る。55は下甕。口縁部は内側に大きく張り出し外傾する。胴部中位に2条の三角突帯が貼り付く。

22号甕棺墓（第19・20図、図版21・79）

調査区中央部に位置し、21号甕棺墓を切る大型棺である。一部、近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.6m（床面で0.6m）、短軸1.0m（床面で0.45m）の隅丸長方形を呈し、深さは0.85mである。上甕側に一段のテラスがあり、床面中央部には直径0.4mの円形ピットがある。東側は横口状に掘り込んでおり、下甕の大半が東側壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-78°-Wで、傾斜角度は34°である。上下甕の合わせ目には、粘土の目張りがある。

56は上甕である。口縁部を打ち欠くが、くの字状で内湾すると思われる。最大径は胴部上位にあり、口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、内外面ともハケメである。57は下甕。胴部は丸味をもち、口縁部は逆L字状で内傾し、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部中位に断面台形の突帯が2条貼り付く。胴部に黒斑が複数残る。

23号甕棺墓（第19・21図、図版79）

調査区中央東側に位置し、19号甕棺墓に近接する小型棺である。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸0.85m（床面で0.6m）、短軸0.5m（床面で0.45m）の楕円形を呈し、深さは0.25mである。甕棺の主軸はN-28°-Wで、傾斜角度は14°である。

58は上甕である。口縁部は逆L字状で、口縁下に三角突帯を貼り付ける。59は下甕で、口縁部は鋤先状でやや内傾する。外面はハケメである。

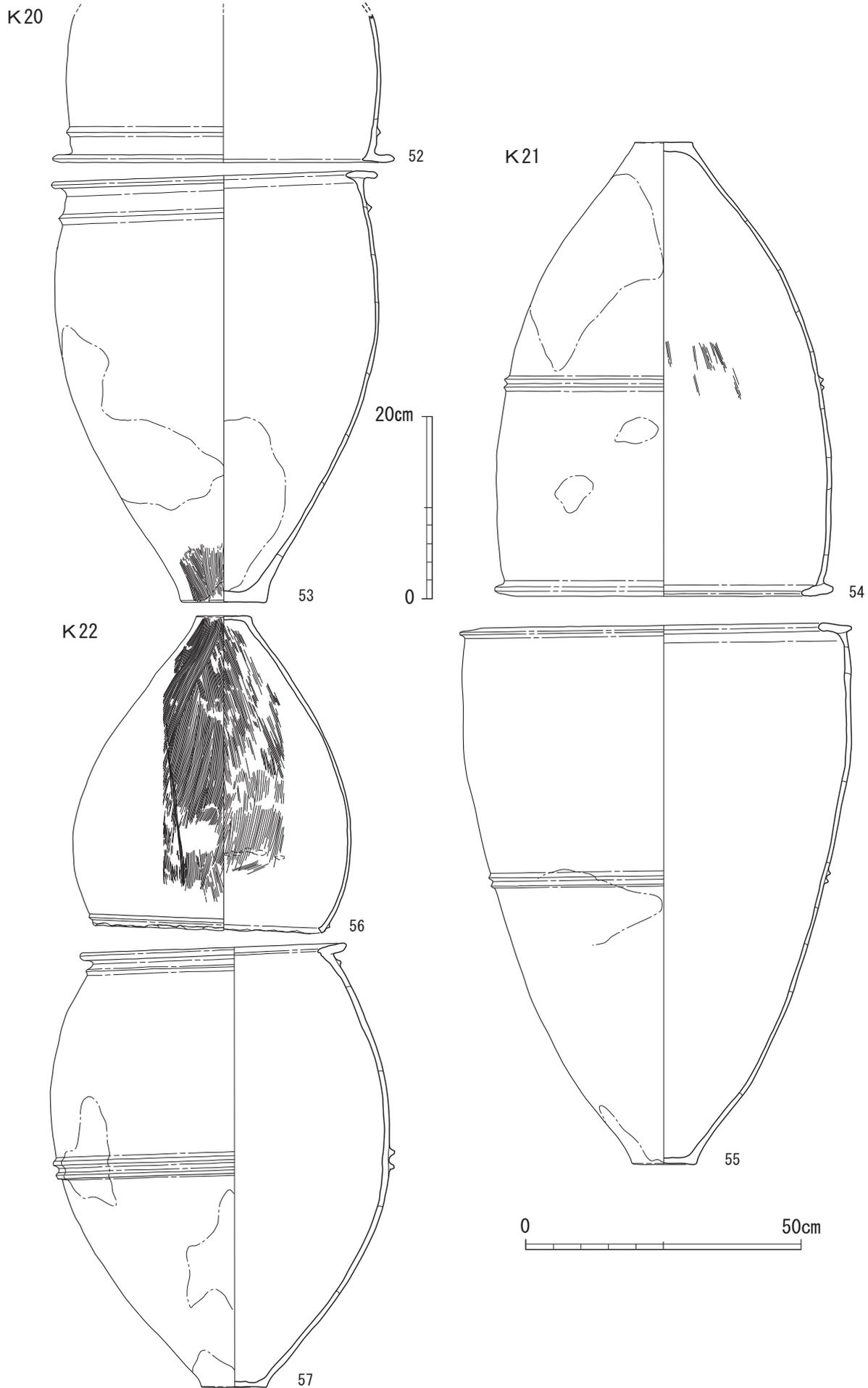
25号甕棺墓（第19・21図、図版79）

調査区中央東端に位置する大型棺である。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸2.35m（床面で2.0m）、短軸1.3m（床面で0.7m）の不整な楕円形を呈し、深さは0.35mである。東側壁面を横口状に掘り込み、下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-60°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

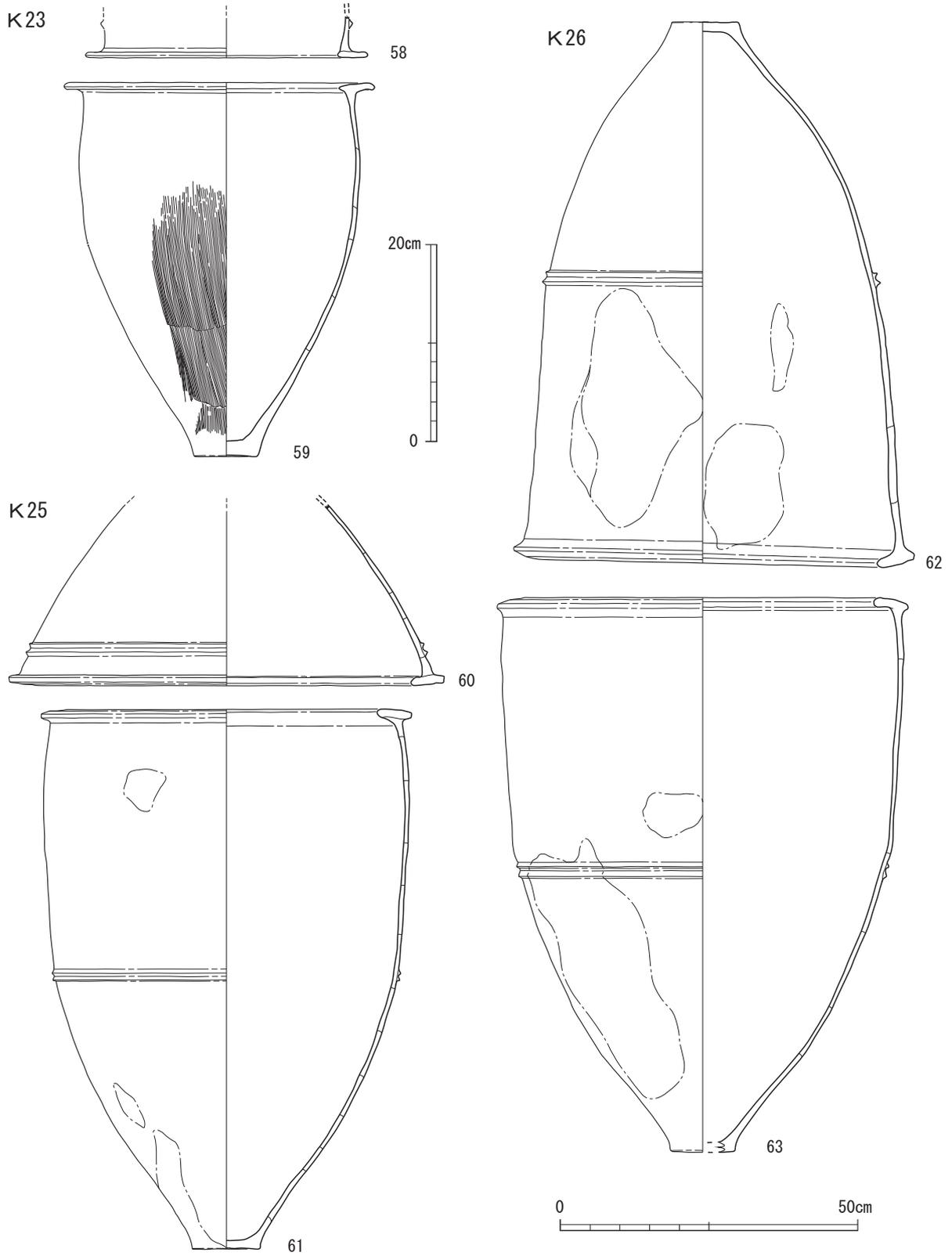
60は上甕の鉢である。口縁部はT字状でやや外傾し、口縁下にM字突帯を貼り付ける。61は下甕で、胴部は砲弾形を呈す。口縁部はT字状で内側の張り出しが強く、やや外傾する。胴部中位にM字突帯を貼り付ける。

26号甕棺墓（第19・21図、図版22・23・79）

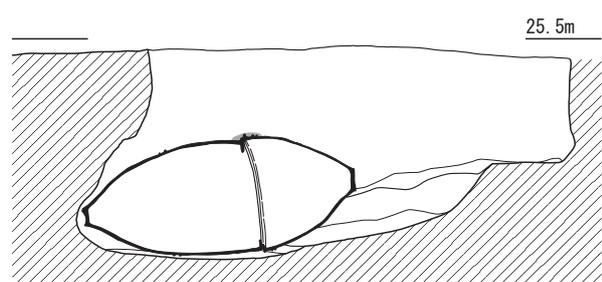
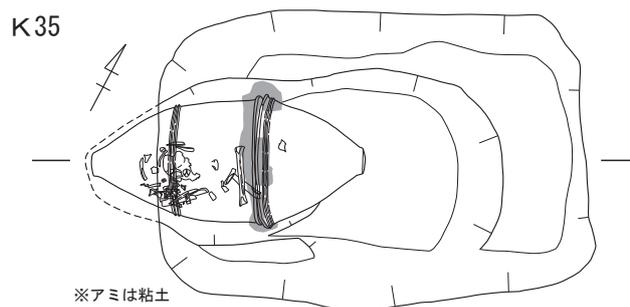
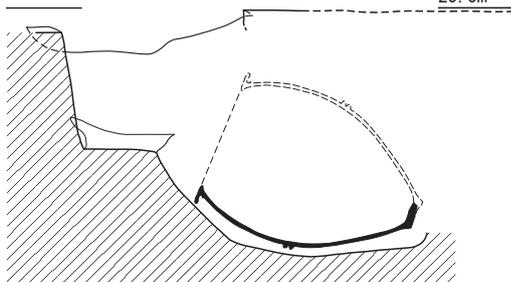
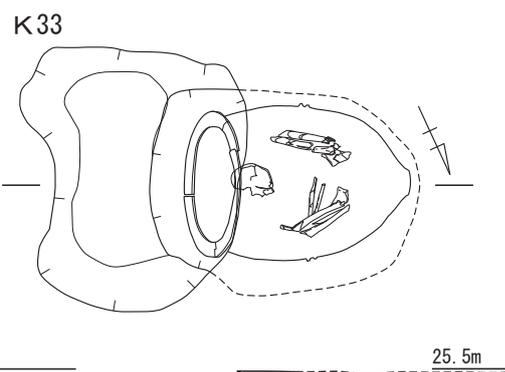
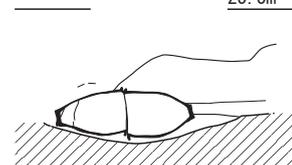
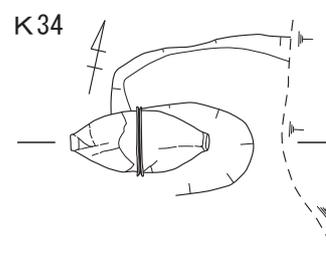
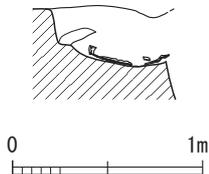
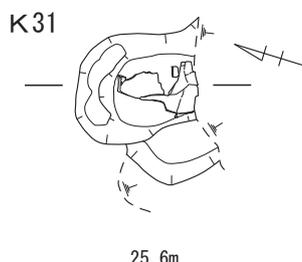
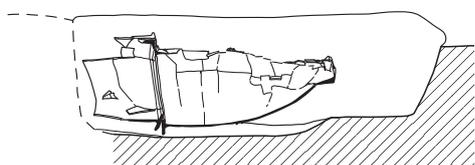
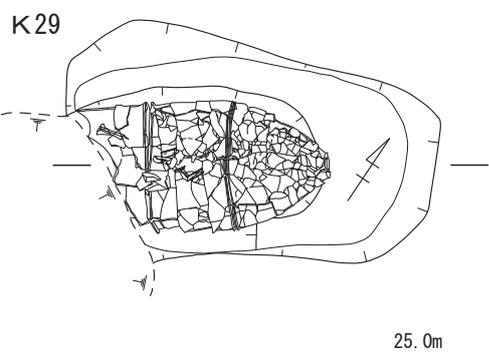
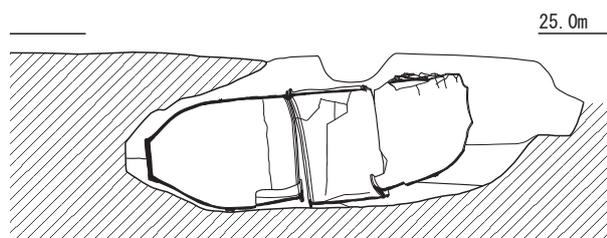
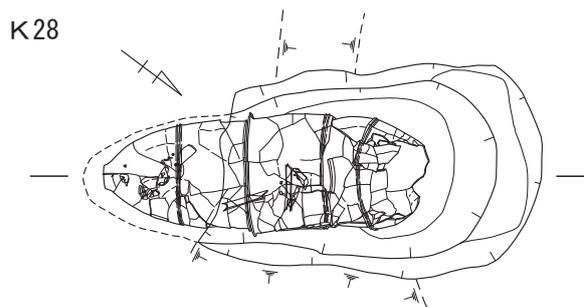
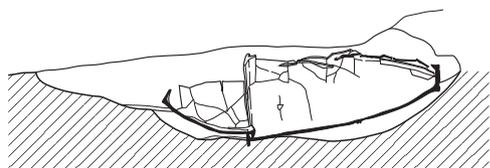
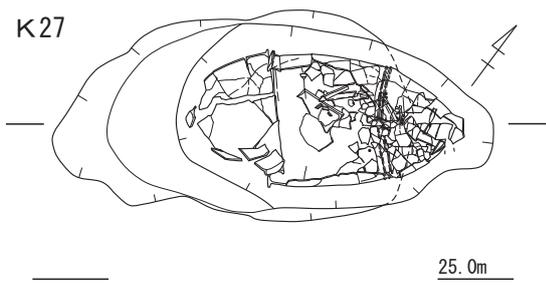
調査区中央東端に位置し、27号甕棺墓に平行する大型棺である。一部は、近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.6m以上（床面で1.05m）、短軸1.1m（床



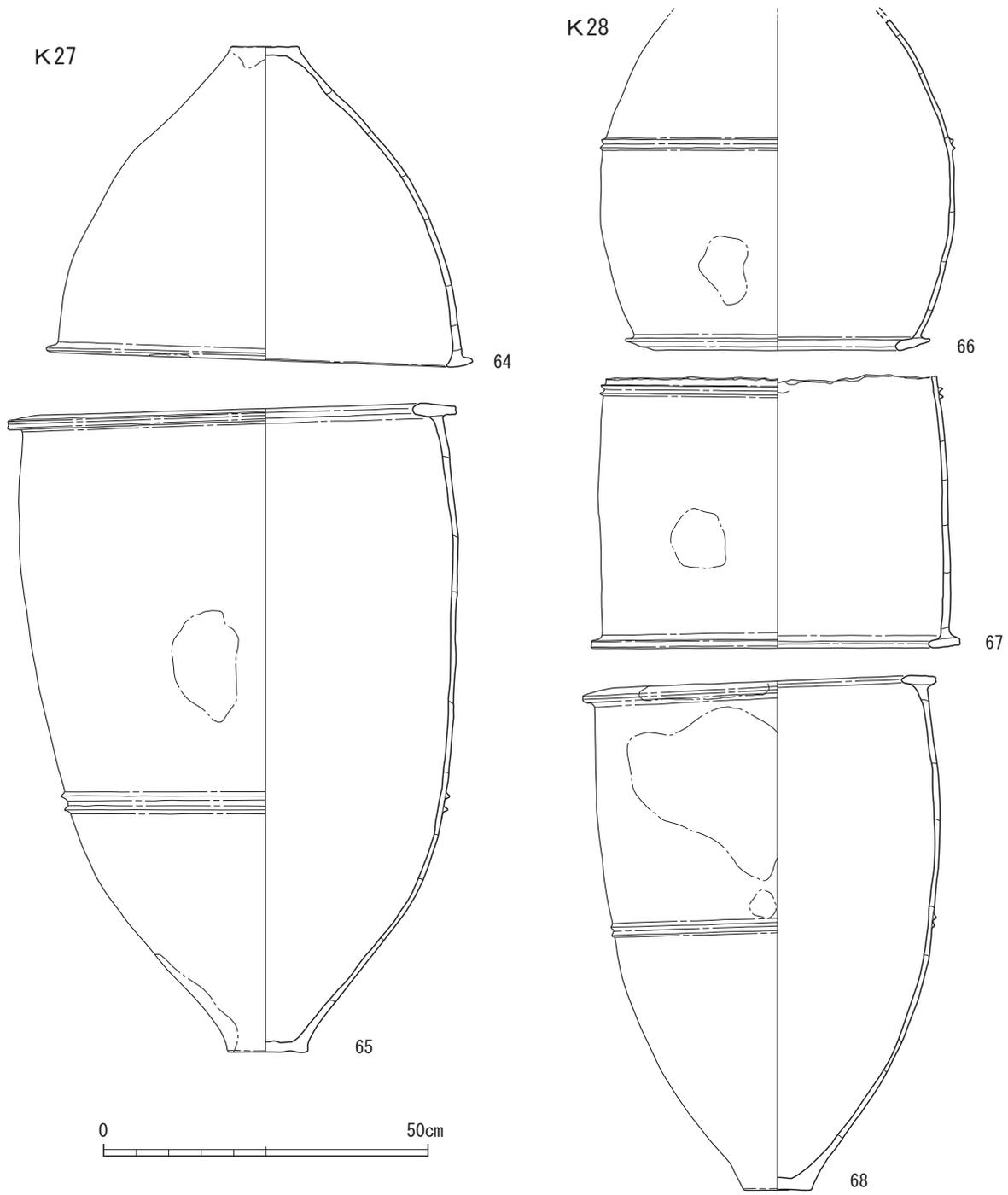
第20図 20号～22号甕棺実測図（52・53は1/6、他は1/10）



第21図 23号・25号・26号甕棺実測図 (58・59は1/6、他は1/10)



第22図 27号～29号・31号・33号～35号甕棺墓実測図 (1/40)



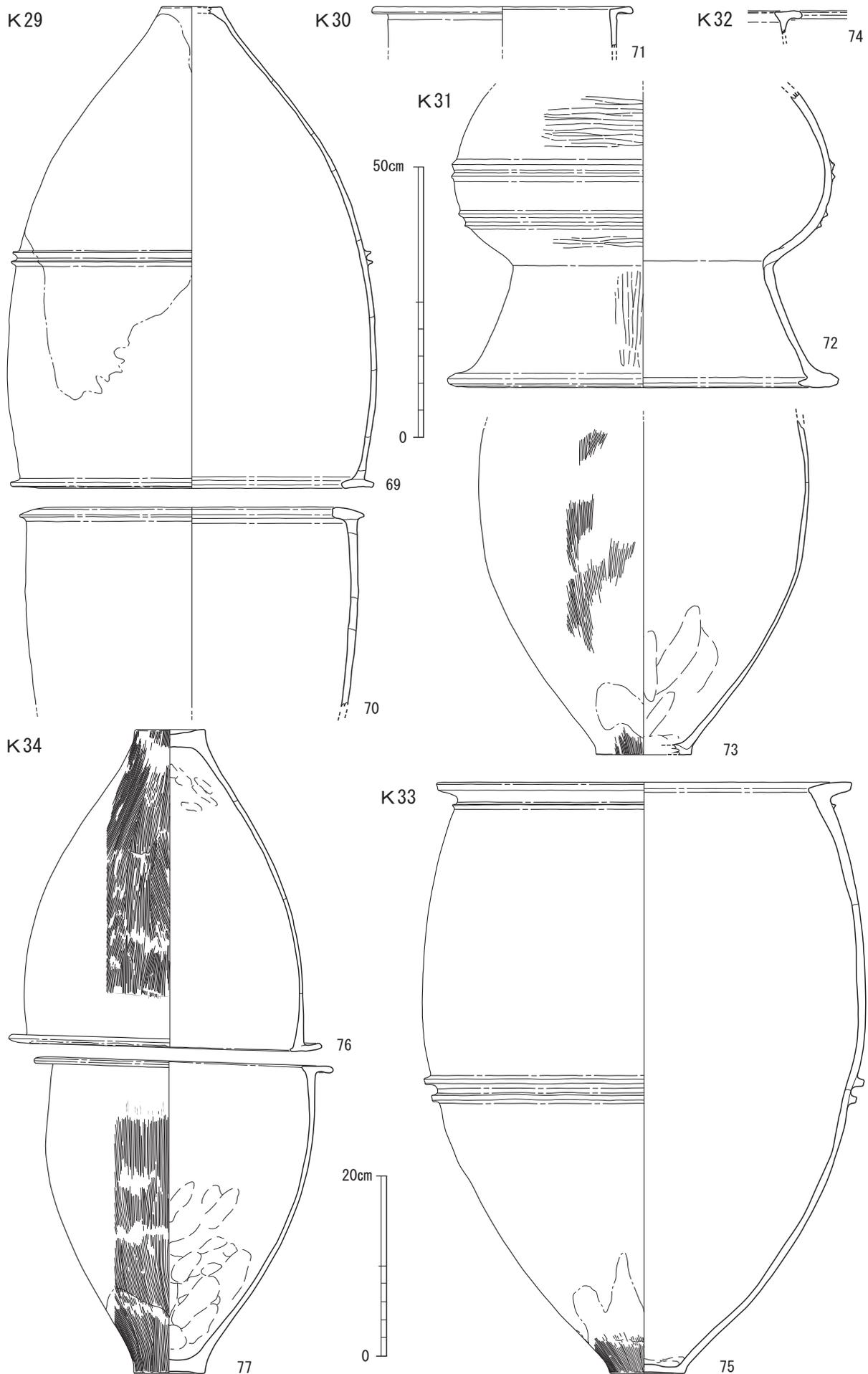
第23図 27号・28号甕棺実測図 (1/10)

面で0.4m)の隅丸長方形を呈し、深さは0.75mである。甕棺の主軸はN-55°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。

62は上甕である。胴部は砲弾形を呈し、口縁部はT字状で内側に大きく張り出し、外傾する。胴部中位にM字突帯を貼り付ける。63は下甕。胴部は砲弾形を呈し、口縁部はT字状で内側に大きく張り出し、外傾する。胴部中位にM字突帯を貼り付ける。上下甕とも大きく黒斑が残る。

27号甕棺墓 (第22・23図、図版23・79)

調査区中央東端に位置し、26号甕棺墓に平行する大型棺である。鉢と甕を組み合わせた接ロ式



第24図 29号～34号甕棺実測図 (69・70・75は1/10、71～74・76・77は1/6)

の合口甕棺で、墓坑は長軸 2.3m (床面で 1.1m)、短軸 1.1m (床面で 0.65m) の楕円形を呈し、深さは 0.65m である。甕棺の主軸は N-54°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。

64 は上甕の鉢。口縁部は逆 L 字状で、外傾する。口縁部上面の 3ヶ所に、小さい黒斑が残る。65 は下甕。胴部は砲弾形で、全体が歪む。口縁部は T 字状で、やや外傾する。胴部下位に 2 条の三角突帯を貼り付ける。

28 号甕棺墓 (第 22・23 図、図版 24・25、図版 80)

調査区中央東側に位置する大型棺で、甕を 3 つ組み合わせた、いわゆる多連棺である。墓坑は長軸 1.7m (床面で 1.0m)、短軸 1.15m (床面で 0.75m) の隅丸長方形を呈し、深さは 0.8m である。南側は横口状に掘り込んでおり、下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸は N-38°-W で、傾斜角度は 8° である。

66 は上甕である。胴部は丸味をもち、口縁部は T 字状で内側に大きく張り出し、外方に垂れる。胴部中位に M 字突帯を貼り付ける。67 は中甕。胴部の M 字突帯付近から下を打ち欠く。口縁部は T 字状で外傾する。胴部は砲弾形になると思われる。68 は下甕である。胴部は砲弾形を呈し、口縁部は T 字状で外側に低く傾斜する。胴部中位に M 字突帯を貼り付ける。

29 号甕棺墓 (第 22・24 図、図版 25・80)

調査区中央東側に位置する大型棺で、一部を近世墓に破壊される。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸 2.0m (床面で 1.1m)、短軸 1.3m (床面で 0.45m) の隅丸長方形を呈し、深さは 0.65m である。下甕は壁面に挿入されたものと考えられるが、近世墓に切られるため詳細は不明である。甕棺の主軸は N-56°-E で、傾斜角度はほぼ水平である。

69 は上甕である。胴部中位から口縁部まで緩やかに内湾する砲弾形を呈している。口縁部はほぼ水平な T 字状である。中位に 2 条の三角突帯を貼り付ける。胴部から底部に大きく黒斑が残っている。70 は下甕。口縁部から胴部上位が残存。口縁部は内側に大きく張り出し、上面は外傾する。

30 号甕棺墓 (第 24 図、図版 80)

小型棺で、残存状況が悪く遺構図の記録はない。71 は下甕の口縁部片である。口縁部は逆 L 字状でやや内傾する。

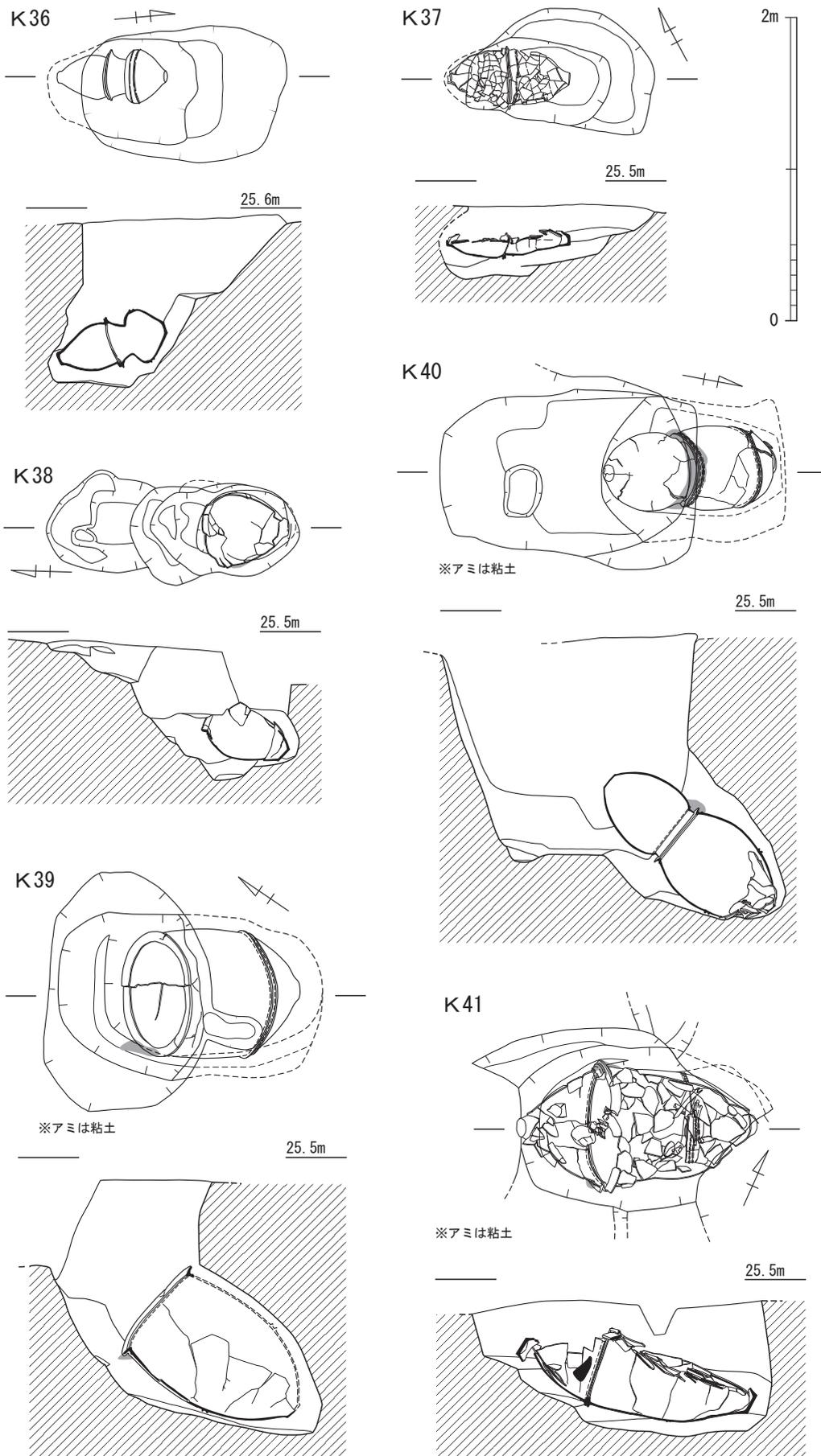
31 号甕棺墓 (第 22・24 図、図版 80)

調査区中央東側に位置し、19 号甕棺墓に寄生する小型棺である。カクランにより遺存状況は悪い。壺と甕を組み合わせた合口甕棺で、墓坑は長軸 0.6m 以上、短軸 0.8m (床面で 0.4m) の楕円形を呈し、深さは 0.3m である。甕棺の主軸は N-17°-W で、傾斜角度はほぼ水平である。

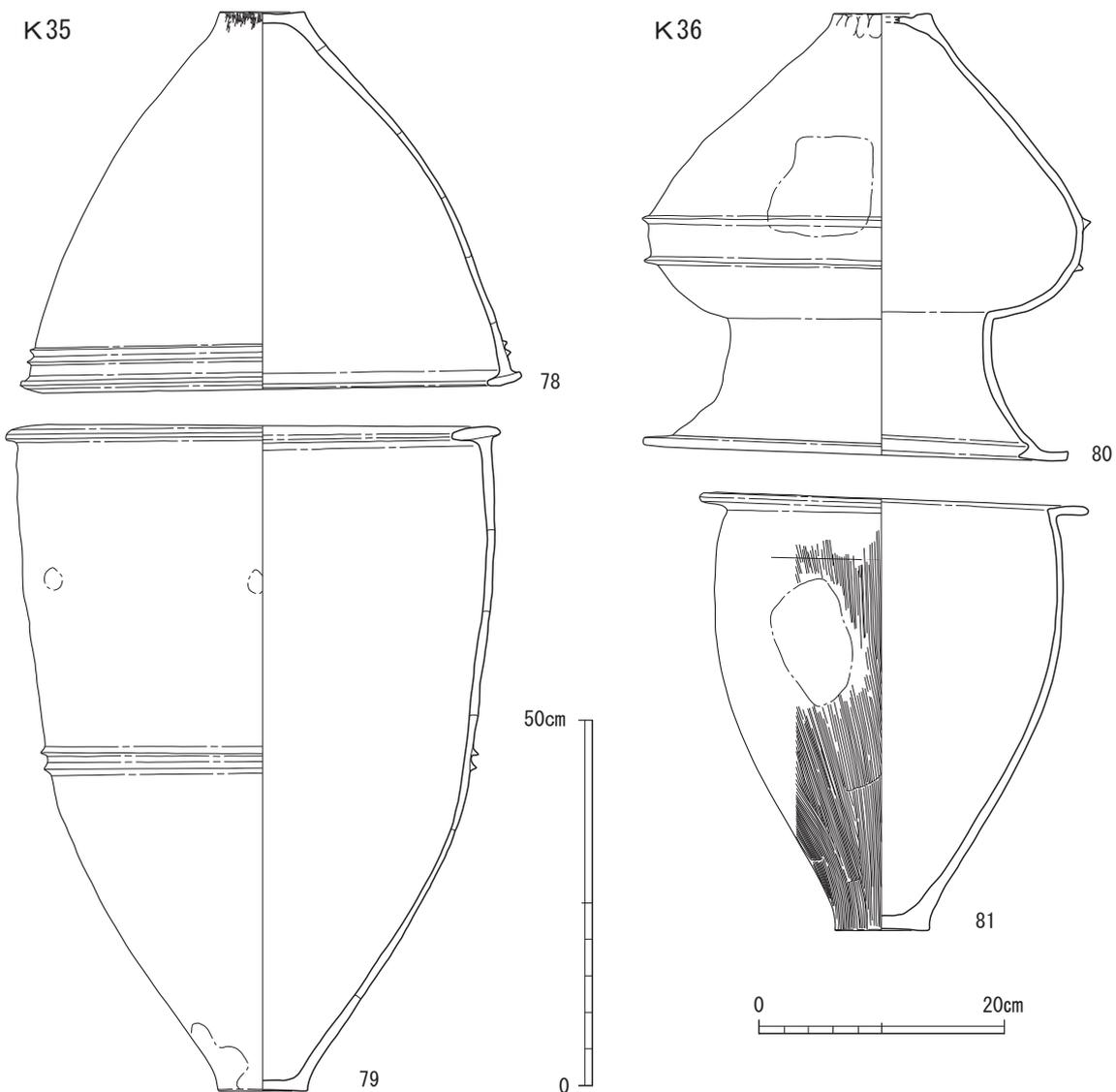
72 は上甕の壺である。口縁部は鋤先状で、頸部はほぼ直線的に外反する。胴部は丸みを持ち、上位 2 か所に 2 条の三角突帯を貼り付ける。73 は下甕である。口縁部から胴部上位は欠損する。胴部外面はハケメで、内面下位は強くナデる。

32 号甕棺墓 (第 24 図、図版 87)

調査区中央西端に位置する小型棺である。残存状況が悪く遺構図の記録はない。なお、遺構に伴うものではないが、黒曜石の石核が出土した。74 は下甕の口縁部片である。鋤先状を呈す。



第25図 36号～41号甕棺墓実測図 (1/40)



第26図 35号・36号甕棺実測図（78・79は1/10、80・81は1/6）

出土遺物（第47図、図版83）

石製品（104）黒曜石製の細石刃核。自然面以外の全面で細石刃を剥離している。

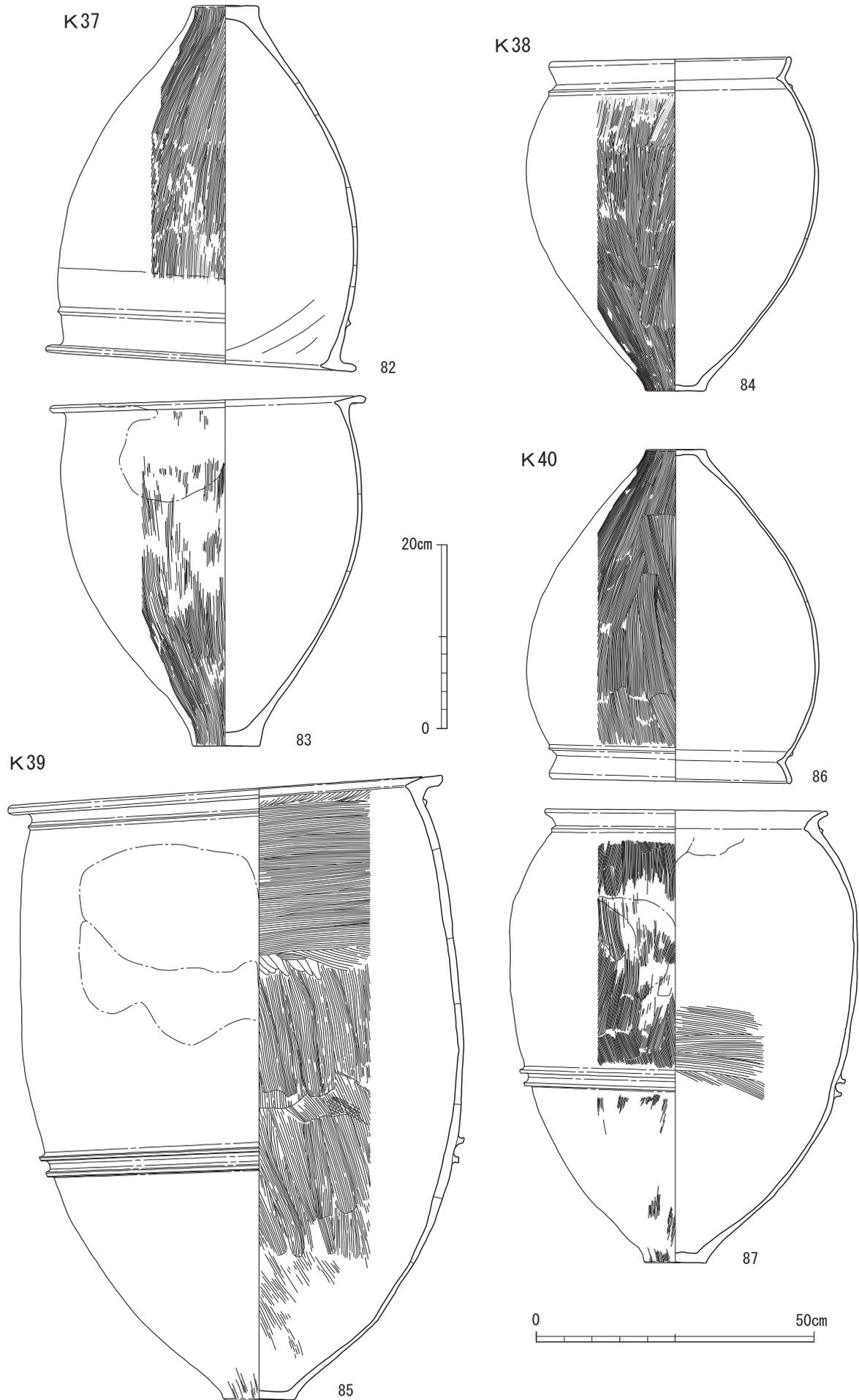
33号甕棺墓（第22・24図、図版26・80）

調査区中央西側に位置する大型棺で、SX197に切られ34号甕棺墓を切る。甕を使用した単棺で、墓坑上面は1.4m×0.95mの楕円形を呈し、深さは1.3mである。西側壁面を横口状に掘り込み、甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-65°-Wで、傾斜角度は19°である。

75は下甕である。胴部は丸味をもち、口縁部は逆L字状でやや内傾する。口縁下に1条の小さい三角突帯を貼り付ける。胴部中位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。底部側面にハケメが残る。

34号甕棺墓（第22・24図、図版27・80）

調査区中央西側に位置し、35号甕棺墓に寄生する小型棺で、33号甕棺墓に切られる。墓坑の残存状況は悪い。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸0.95m、短軸0.8mの隅丸長方形を呈し、深さは0.5mである。甕棺の主軸はN-72°-Eで、傾斜角度はほぼ水平である。



第27図 37号～40号甕棺実測図（82・83は1/6、84～87は1/10）

76は上甕である。口縁部は鋤先状で外側に垂れる。外面はハケメで、底部は上げ底である。77は下甕。口縁部はほぼ水平な鋤先状を呈し、外面はハケメである。

35号甕棺墓（第22・26図、図版27・28・33・80）

調査区中央西側に位置する大型棺である。34号甕棺墓・4号石蓋土坑墓に切られる。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、粘土目張りがある。墓坑は長軸2.25m(床面で0.95m)、短軸1.6m(床面で0.45m)の隅丸長方形を呈し、深さは1.1mである。上甕側にテラスがあり、下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-61°-Eで、傾斜角度は8°である。

78は上甕の鉢である。口縁部はT字状で内側の張り出しがやや強く、外傾する。口縁下に2条の三角突帯を貼り付け、底部側面にハケメが残る。口縁部上面の3ヵ所に黒斑が残る。79は下甕。胴部は砲弾状で、口縁部はやや内傾するT字状を呈し内側に張り出す。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付ける。

36号甕棺墓（第25・26図、図版28・29・81）

調査区中央西側に位置する小型棺で、51号甕棺墓に切られる。壺と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。墓坑は長軸1.55m(床面で0.5m)、短軸0.9m(床面で0.2m)の楕円形を呈し、深さは1.15mである。上甕側にテラスがあり、下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-5°-Eで、傾斜角度は17°である。

80は上甕の壺である。口縁部は鋤先状で頸部は外湾し、胴部上位が張る。底部はやや上げ底である。胴部上位に2条の三角突帯を貼り付ける。81は下甕。最大径が胴部上位にあり、口縁部は逆L字状で外に長く伸びる。外面はタテ方向のハケメである。

37号甕棺墓（第25・27図、図版29・81）

調査区南西端に位置する小型棺である。SX194に近接する。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.2m(床面で0.4m)、短軸0.75m(床面で0.25m)の不整な楕円形を呈し、深さは0.5mである。床面は上甕側から下甕側にかけて階段状のテラスが3段ある。主軸はN-62°-Wで、傾斜角度はほぼ水平である。

82は上甕である。最大径が胴部上位にあり、口縁部は鋤先状で内側にやや突出する。口縁下に1条の三角突帯が貼り付く。胴部外面はタテ方向のハケメである。83は下甕。胴部は口縁部に向かって内湾し、口縁は鋤先状を呈し内傾する。外面はハケメである。

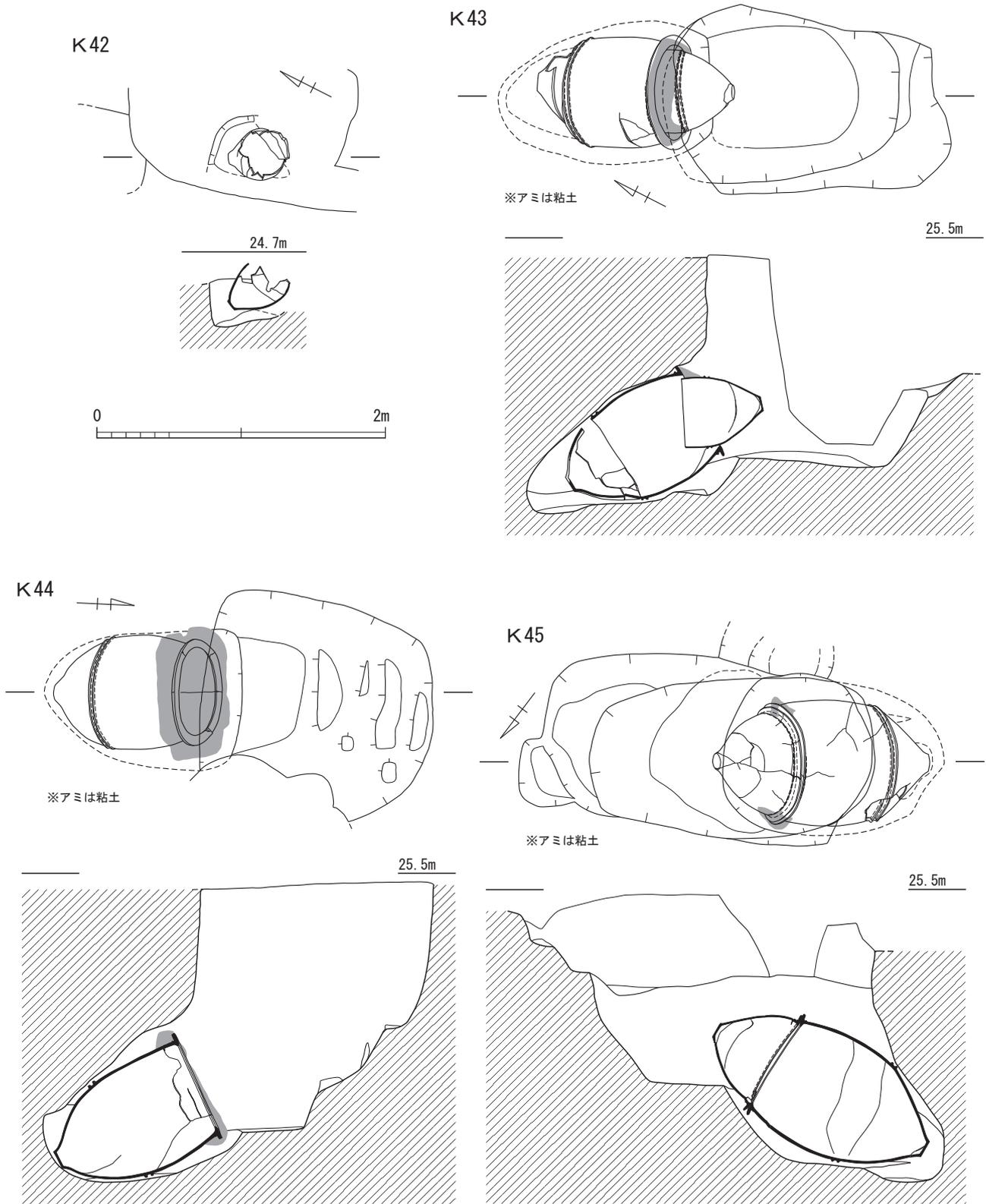
38号甕棺墓（第25・27図、図版30・81）

調査区中央西端に位置する大型棺で、1号石棺墓に切られる。甕を使用する単棺で、墓坑は長軸1.6m、短軸0.65mの不整楕円形を呈し、深さは0.9mである。北側にテラスがあり、床面中央はピット状に窪む。南側壁面を横口状に掘り込んでおり、甕の一部を壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-1°-Wで、傾斜角度は25°である。

84は下甕である。最大径が上位にある丸味を持った器形である。口縁部はくの字状で内湾する。屈曲部近くに1条の三角突帯を貼り付け、外面はハケメである。

39号甕棺墓（第25・27図、図版31・81）

調査区南西端に位置する大型棺で、SX186を切る。甕を使用した単棺で、口縁部に粘土目張りが



第28図 42号～45号甕棺墓実測図(1/40)

あることから、木蓋を伴う可能性がある。墓坑は1.6m×1.1mの楕円形を呈し、深さは1.7mである。南側壁面を横口状に掘り込み、甕の大半を挿入する。甕棺の主軸はN-35°-Wで、傾斜角度は39°。

85は下甕である。胴部は砲弾形で、口縁部は内傾するくの字状となる。口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付け、胴部内面に横方向と縦方向のハケメを施す。胴部上位に大きく黒斑が残る。

40号甕棺墓（第25・27図、図版81）

調査区南西端に位置する大型棺で、41号甕棺墓・SX183を切る。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、合わせ目に粘土目張りがある。墓坑は長軸1.7m（床面で0.95m）、短軸1.25m（床面で0.7m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.9mである。上甕側にテラスがあり、北側壁面を横口状に掘り込んで下甕の大半を挿入する。甕棺の主軸はN-10°-Wで、傾斜角度は37°である。甕棺のほか、筒形器台の破片が出土した。

86は上甕である。最大径が胴部上位にあり、丸味をもった器形。口縁部はくの字状で、内湾する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、外面はハケメである。87は下甕。胴部上位から口縁部に向かって内湾する。口縁部はくの字状で内傾し、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内外面ハケメである。

出土遺物（第47図）

弥生土器（105～107）いずれも筒形器台で同一個体と考えられる。105は透かしと透かしの間のほぼ直立する部分、106は透かしから下位の裾部片、107は脚裾部である。いずれも外面は丹塗りで、外面がタテ方向のミガキ、内面はナデ、裾端部はヨコナデである。

41号甕棺墓（第25・29図、図版31・81）

調査区南西端に位置する大型棺で、40号甕棺墓に切られSX183・SX188を切る。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.95m以上（床面で1.15m以上）、短軸1.2m（床面で0.6m）の楕円形を呈し、深さは0.9mである。上甕側に2段のテラスがある。甕棺の主軸はN-66°-Eで、傾斜角度は20°である。

88は上甕の鉢である。口縁部はT字状を呈し、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。外面の底部側面にハケメが残る。口縁部上面の3か所に小さい黒斑が認められる。89は下甕。胴部は砲弾形を呈す。口縁部は水平なT字状で、内側に大きく張り出す。胴部中位に2条の三角突帯を貼り付け、突帯から概ね直立して立ち上がる。

42号甕棺墓（第28・29図、図版82）

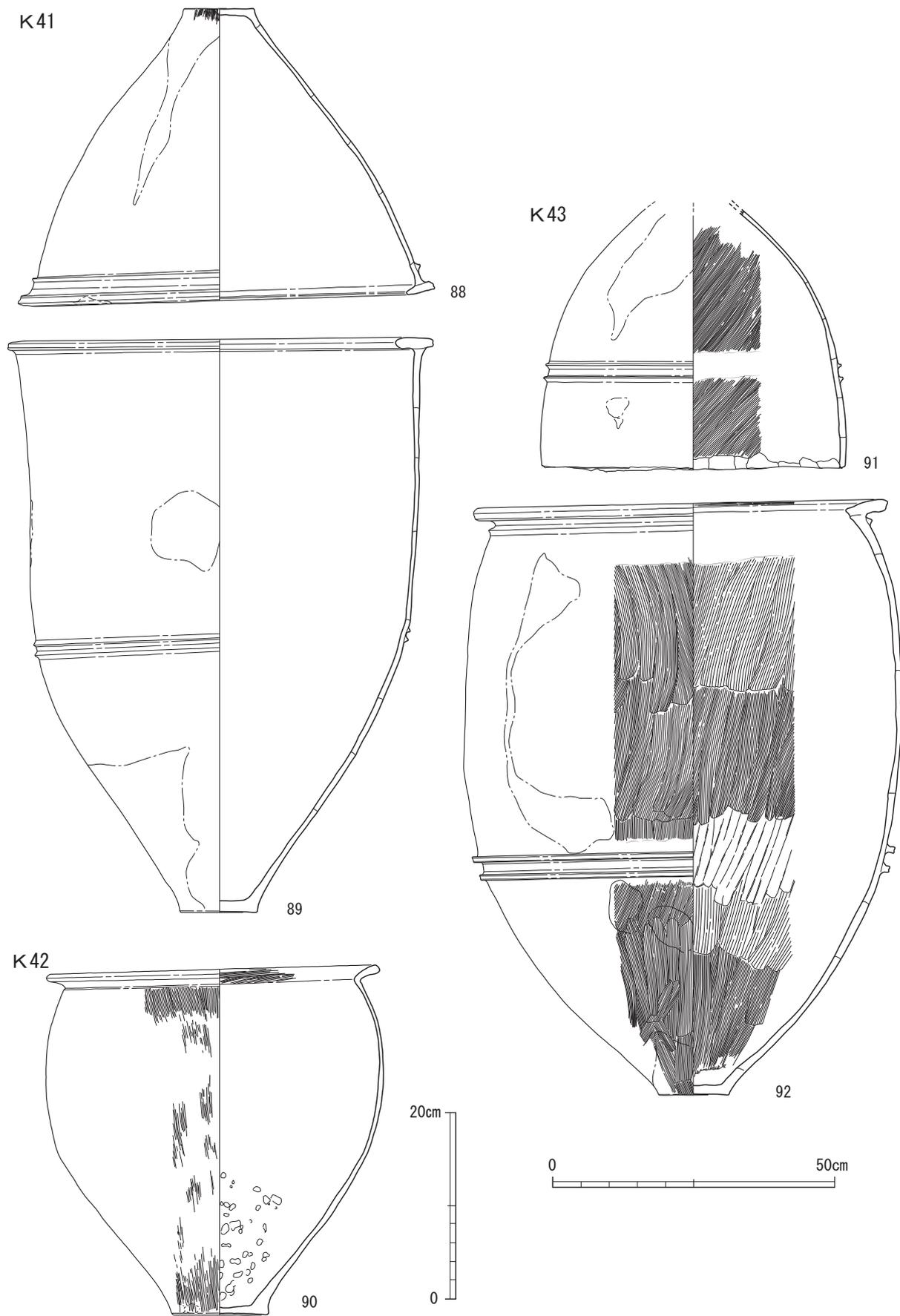
調査区南西端に位置する小型棺で、43号甕棺墓を切る。遺存状況が悪く規模・形状等は不明な点が多いが、甕を使用した単棺の可能性が高い。墓坑の深さは0.35mで、甕棺の主軸はN-27°-Wで、傾斜角度は34°である。

90は下甕である。口縁部よりも胴部が外側に若干張り出す。口縁部はくの字状で、口縁部と胴部にハケメを施す。

43号甕棺（第28・29図、図版32・81）

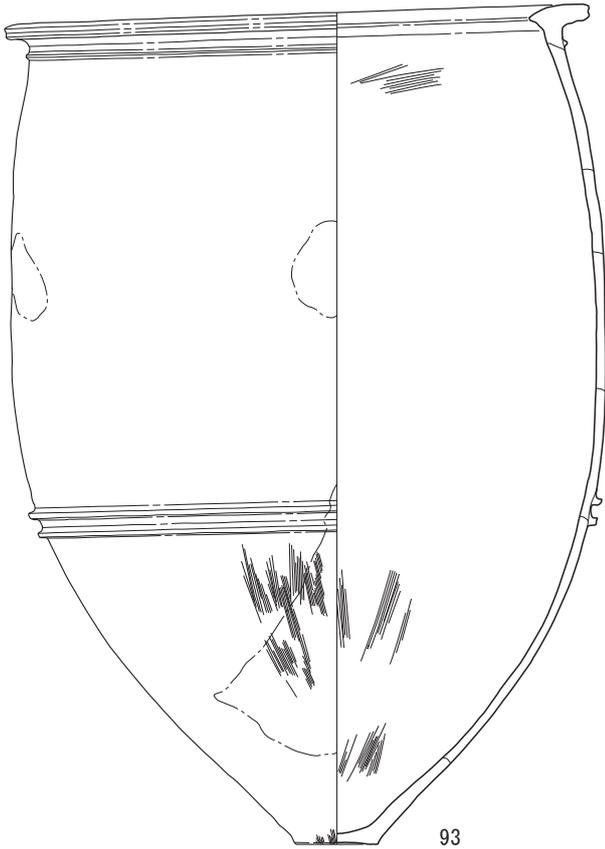
調査区南西端に位置する大型棺で、42号甕棺墓に切られる。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、合わせ目に粘土目張りがある。墓坑上面は長軸1.8m（床面で1.2m）、短軸1.3m（床面で0.75m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.8mである。上甕側に広いテラスがあり、北側壁面を横口状に掘り込み、下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-28°-Wで、傾斜角度は33°である。

91は上甕である。胴部中位で打ち欠き、底部は欠失する。胴部に2条の三角突帯を貼り付け、内面はハケメである。92は下甕で胴部から口縁部に向けて丸みを帯びた器形である。口縁部はく



第29図 41号～43号甕棺実測図（90は1/6、他は1/10）

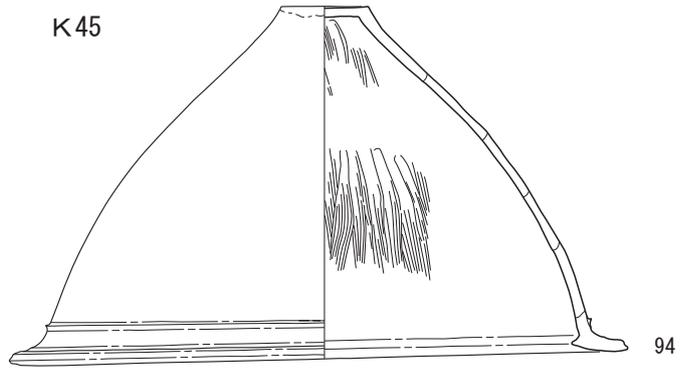
K44



93

0 50cm

K45



94



95

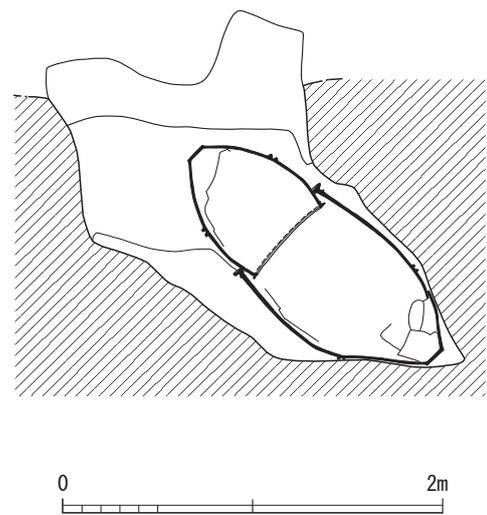
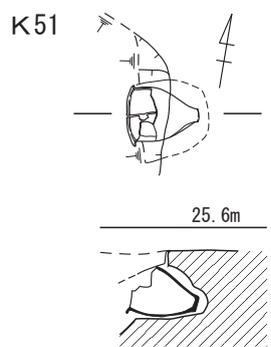
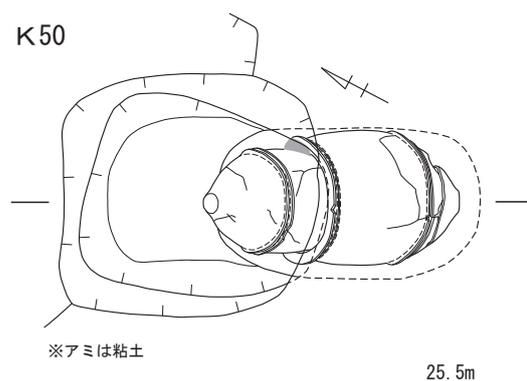
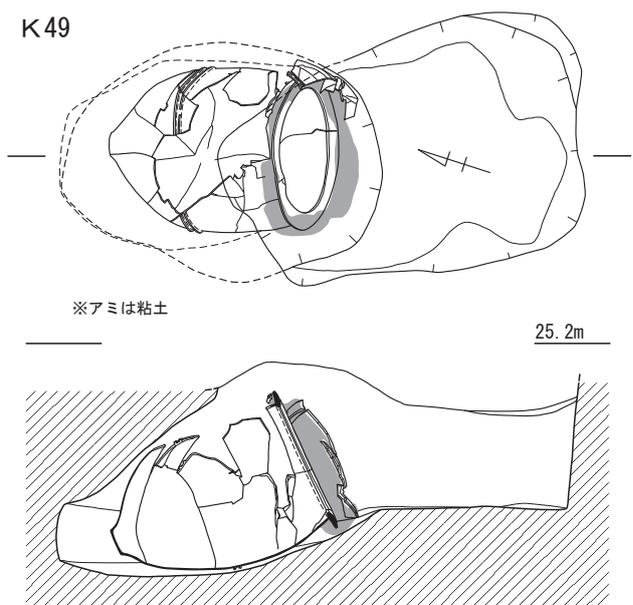
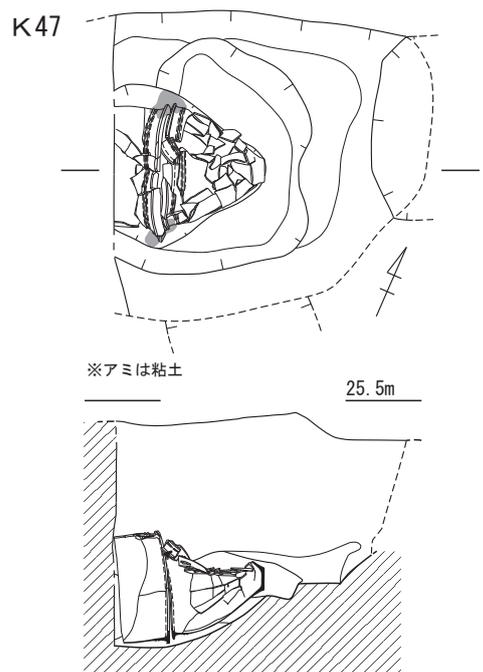
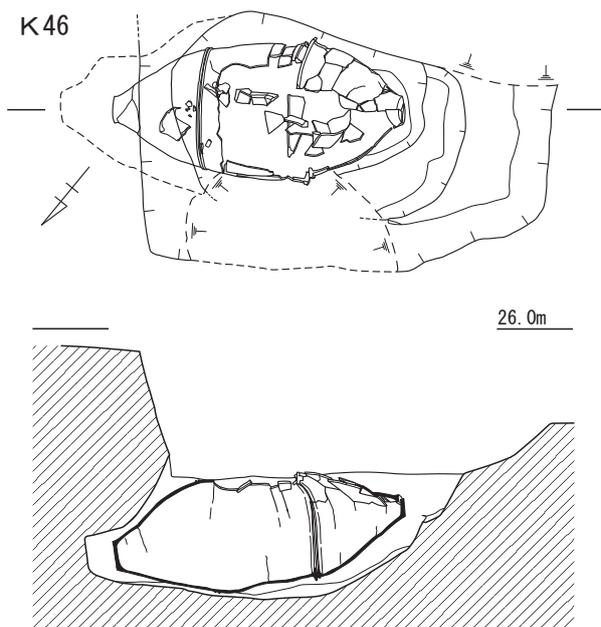
第30図 44号・45号甕棺実測図(1/10)

の字状で内傾し、端部が肥厚する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内外面ともハケメで、内面の一部は工具ナデである。

44号甕棺墓(第28・30図、図版32・82)

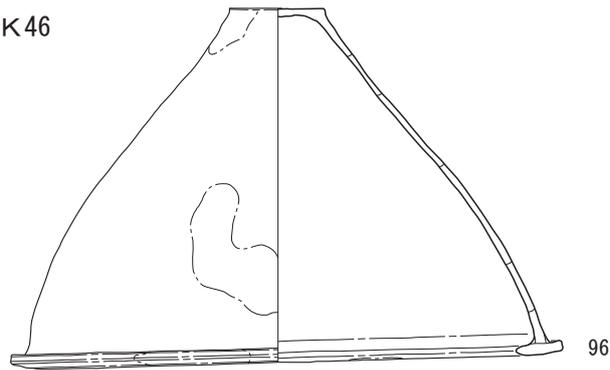
調査区南西端に位置する大型棺で、7号石蓋土坑墓に切られる。甕を使用した単棺で、口縁部付近に粘土目張りがあることから木蓋を伴う可能性が高い。墓坑上面は長軸1.6m(床面で0.6m)、短軸1.5m(床面で0.55m)の隅丸方形を呈し、深さは2.1mである。北側に複数の小さなテラスがあり、南側壁面を横口状に掘り込んで、甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-3°-Wで、傾斜角度は26°である。

93は下甕である。胴部は丸味をもち、口縁部は鋤先状でやや内傾する。口縁下に1条の三角突

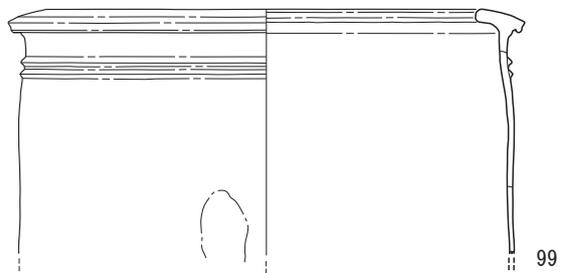
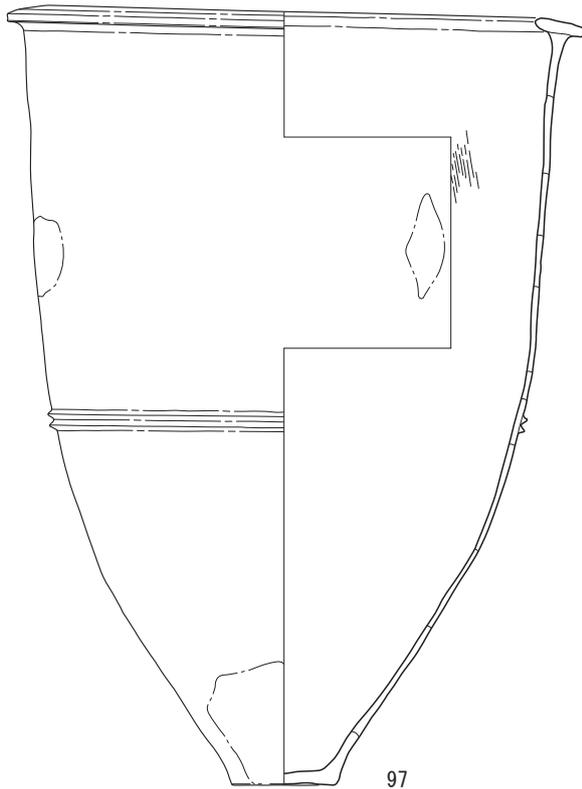
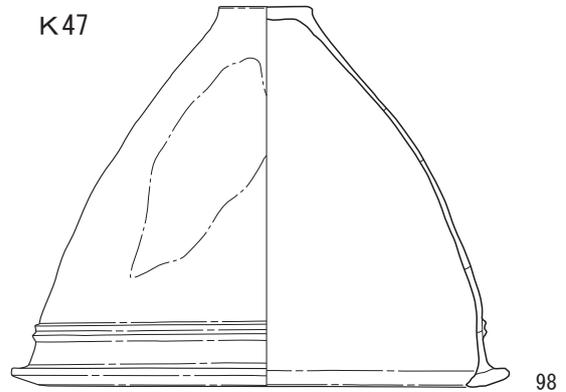


第31図 46号・47号・49号～51号甕棺墓実測図 (1/40)

K46



K47



0 50cm

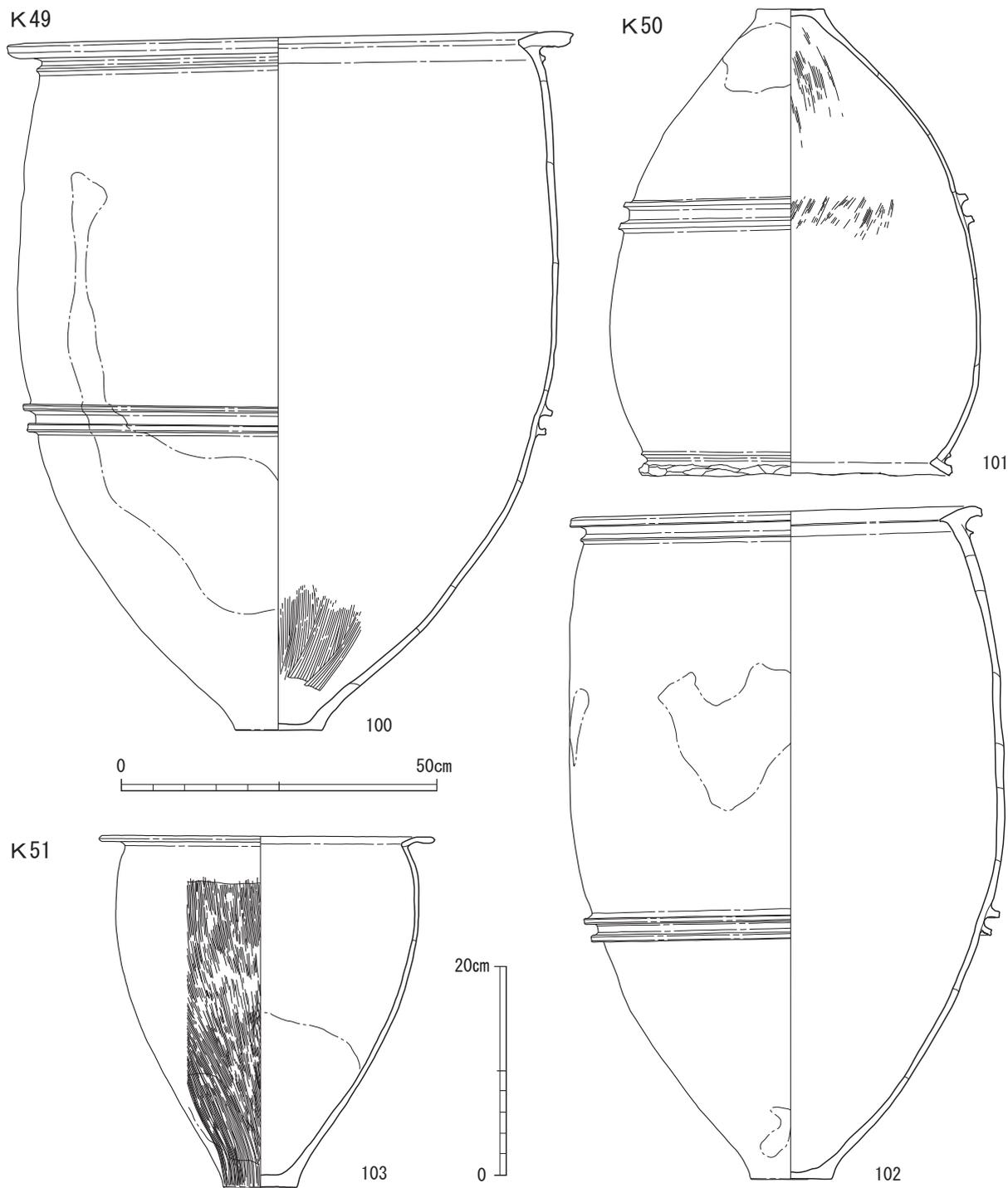
第32図 46号・47号甕棺実測図(1/10)

帯を貼り付ける。胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付け、内外面にハケメが残る。

45号甕棺墓(第28・30図、図版33・82)

調査区南西端に位置する大型棺で、46号甕棺墓・SX198を切る。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺である。合わせ目に粘土目張りがある。墓坑は長軸2.45m(床面で1.5m)、短軸1.25m(床面で0.9m)の隅丸長方形を呈し、深さは2.0mである。上甕側にテラスがあり、南側壁面を横口状に掘り込み、下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-53°-Wで、傾斜角度は30°である。

94は上甕の鉢である。口縁部は鋤先状で、口縁下に1条の三角突帯を貼り付ける。内面はハケメである。95は下甕である。上位がやや内湾して丸みを持つ器形で、口縁部はくの字状でやや内傾する。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内外面にハケメを施す。



第33図 49号～51号甕棺実測図（103は1/6、他は1/10）

46号甕棺墓（第31・32図、図版34・82）

調査区南西端に位置する。45号甕棺墓に切られる。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸2.2m（床面で1.15m）、短軸1.35m（0.55m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.3mである。南側に階段状のテラスがあり、北側壁面を横口状に掘り込んで下甕の一部は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-51°-Eで、傾斜角度は9°である。

96は上甕の鉢である。口縁部はT字状で、口縁上面の3ヶ所に小さい黒斑が認められる。97は下甕で、胴部は砲弾形となり口縁部に向けて外側にやや広がる。口縁部はT字状で外傾し、胴部中に2条の三角突帯を貼り付け、内面にハケメがわずかに認められる。

47号甕棺墓（第31・32図、図版34・82）

調査区南西端に位置する大型棺で、38号甕棺墓に切られるため、遺存状況は悪い。鉢と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、墓坑は長軸1.6m以上、短軸1.5mの楕円形を呈し、深さは1.25mである。東側にテラスがあり、階段状に底面に至る。甕棺の主軸はN-67°-Eで、傾斜角度は5°である。

98は上甕の鉢である。口縁部はT字状で外傾し、口縁下にM字突帯を貼り付ける。胴部に大きく黒斑が残る。99は下甕。胴部中位から下は欠損するが、器形は砲弾形になると思われる。口縁部はT字状で内側に大きく張り出し、外傾する。口縁下に2条の三角突帯を貼り付ける。

49号甕棺墓（第31・33図、図版35・82）

調査区南西端に位置する大型棺で、1号石棺墓に切られSX182を切る。接口式の合口甕棺と考えられるが、上甕の遺存状況が悪く、詳細不明である。合わせ目に粘土目張りが残る。墓坑上面は長軸1.9m（床面で0.5m）、短軸1.35m（床面で0.9m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.15mである。上甕側に広いテラスがあり、北側壁面を横口状に掘り込んで下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-17°-Wで、傾斜角度は24°である。

100は下甕である。胴部中位から上位にかけてゆるやかに内湾し、底部がすぼまる器形である。口縁部は逆L字状でやや内傾し、口縁下に断面台形の突帯を1条、胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内面下位にハケメが残り、外面に大きく黒斑が残る。

50号甕棺墓（第31・33図、図版36・82）

調査区南西端に位置する大型棺で、2号石棺墓に切られる。甕と甕を組み合わせた接口式の合口甕棺で、合わせ目に粘土目張りが残る。墓坑上面は長軸1.35m（床面で1.0m）、短軸1.3m（床面で0.55m）の隅丸長方形を呈し、深さは1.9mである。上甕側がテラス状となり、南側壁面を横口状に掘り込んで下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-28°-Wで、傾斜角度は41°である。

101は上甕である。胴部に丸味をもつ。口縁部は内側が低いくの字状で端部を打ち欠いている。口縁下に1条の三角突帯を貼り付け、中位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。内面にハケメがわずかに残る。102は下甕。やや胴長の砲弾状を呈する器形で、口縁部は内傾するくの字状となる。口縁下に1条の三角突帯、胴部下位に断面台形の突帯を2条貼り付ける。

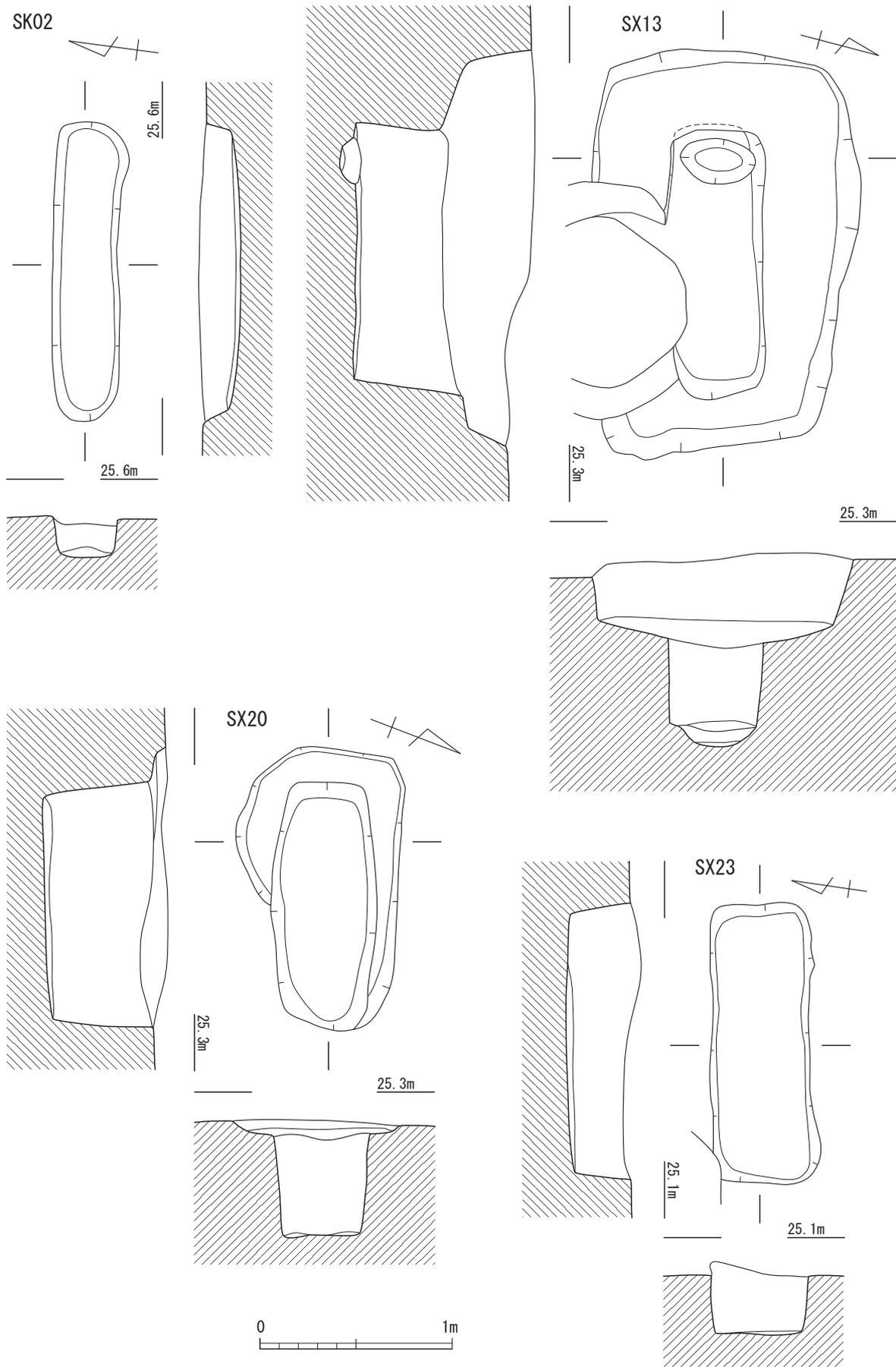
51号甕棺墓（第31・33図、図版82）

調査区南西部に位置する小型棺で、36号甕棺墓を切る。遺存状況が悪く詳細不明であるが、東側壁面を横口状に掘り込んで下甕の大半は壁面に挿入する。甕棺の主軸はN-81°-Eで、傾斜角度は15°である。

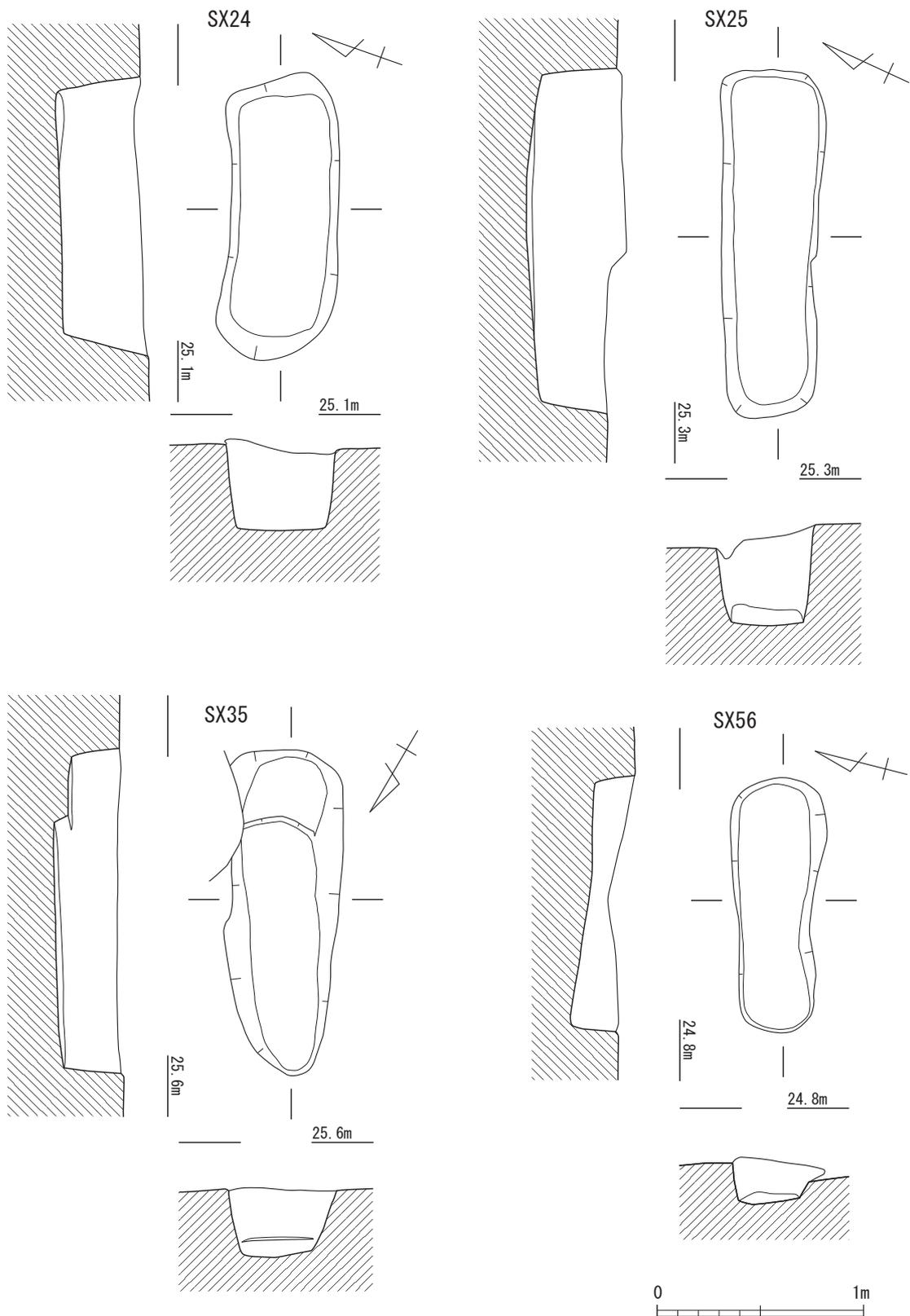
103は下甕である。最大径が胴部上位にあり、口縁部は逆L字状で、外側に長く伸び下方に湾曲する。外面にハケメを施す。

②土坑墓・木棺墓**SK02（第34図）**

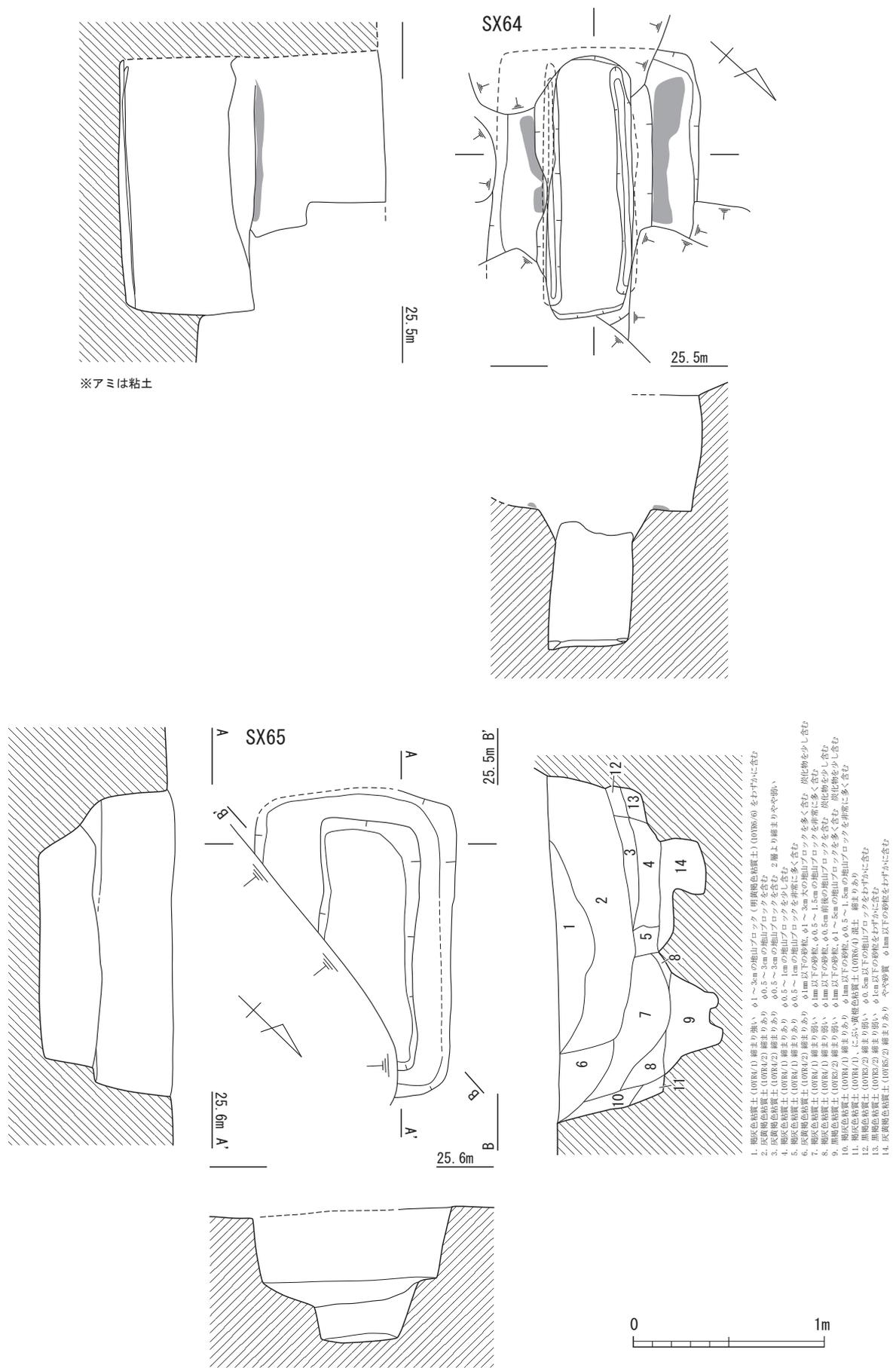
調査区南端部に位置する。平面は隅丸長方形で、長軸1.6m（床面で1.5m）、短軸0.35m（床面で0.3m）、深さ0.2mである。出土遺物はない。



第34図 SK02・SX13・20・23実測図(1/30)



第35図 SX24・25・35・56実測図(1/30)



第36図 SX64・65実測図 (1/30)

SX13 (第34図)

調査区南東部に位置する。平面は長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸2.1m、短軸1.4m、深さ0.5mで、二段目は長軸1.4m(床面で1.3m)、短軸0.5m(床面で0.4m)、深さ0.5mである。西側の小口部床面には長軸0.4m、短軸0.2m、深さ0.1mのピットがあり、木棺小口板を固定する掘り込みの可能性がある。出土遺物はない。

SX20 (第34図、図版37)

調査区南東部に位置する。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸1.5m、短軸0.9m、深さ0.1mで、二段目は長軸1.3m(床面で1.2m)、短軸0.55m(床面で0.4m)、深さ0.5mである。木蓋を伴うものであろうか。出土遺物はない。

SX23 (第34図、図版37)

調査区南東部に位置する。平面は長方形で、長軸1.45m(床面で1.4m)、短軸0.5m(床面で0.45m)、深さ0.4mである。出土遺物はない。

SX24 (第35図)

調査区南東部に位置する。平面は隅丸長方形で、長軸1.3m(床面で1.15m)、短軸0.55m(床面で0.45m)、深さ0.4mである。出土遺物はない。

SX25 (第35図)

調査区南東部に位置する。平面は長方形で、長軸1.7m(床面で1.6m)、短軸0.5m(床面で0.4m)、深さ0.5mである。出土遺物はない。

SX35 (第35図)

調査区中央部に位置し、SX34に切られる。平面は長楕円形で、長軸1.6m(床面で1.2m)、短軸0.6m(床面で0.35m)、深さ0.3mである。南側に0.3m四方のテラスがある。出土遺物はない。

SX56 (第35図)

調査区南東端に位置し、SX55に切られる。平面は長楕円形で、長軸1.25m(床面で1.2m)、短軸0.45m(床面で0.35m)、深さ0.25mである。出土遺物はない。

SX64 (第36図、図版38)

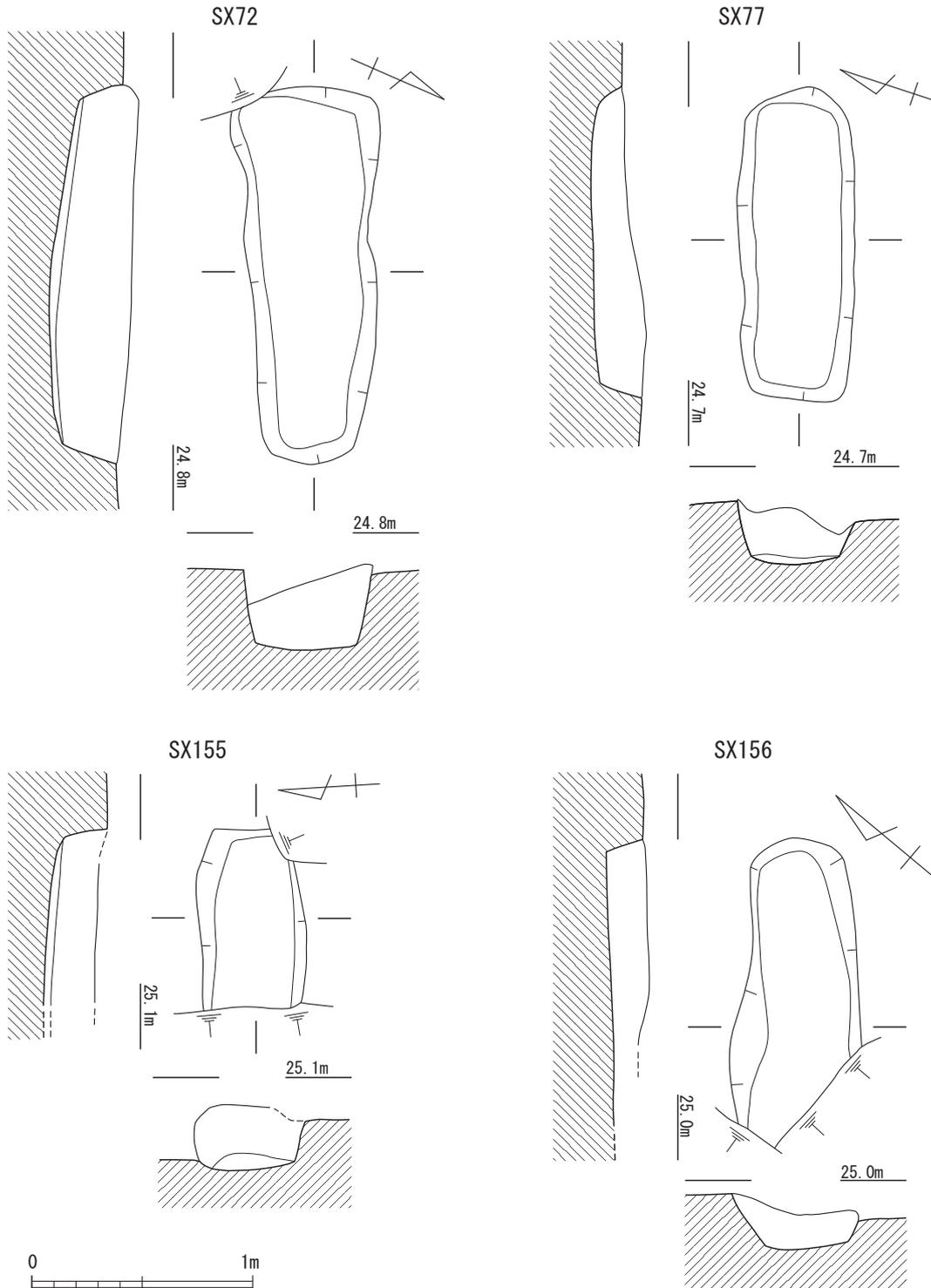
調査区南東部に位置し、SX65を切る。平面は長方形で、二段掘りとなる。一段目の長軸は1.5m以上、短軸は1.05m、深さ0.65mで、二段目は長軸1.35m(床面で1.3m)、短軸0.5m(床面で0.3m)、深さ0.7mである。テラス上の床面に粘土が分布することから、調査時の所見では木蓋土坑墓としている。また、側壁側の床面には幅・深さ5cmの溝状の掘り込みがあることから、組合式の木棺の可能性もある。出土遺物はない。

SX65 (第36図)

調査区中央部に位置し、SX37・64に切られ、SX66を切る。平面は長方形で、二段掘りとなる。一段目の長軸は1.6m、短軸は1.1m、深さ0.4mで、二段目は長軸1.3m(床面で1.2m)、短軸0.5m(床面で0.4m)、深さ0.3mである。調査時の所見では木蓋土坑墓としている。出土遺物はない。

SX66

調査区中央部に位置し、SX65に切られる。一部のみの遺存であり、規模・形態等の詳細は不明



第37図 SX72・77・155・156 実測図 (1/30)

である。出土遺物はない。

SX72 (第37図)

調査区南東端に位置し、SX71に切られる。平面は隅丸長方形で、長軸1.75m(床面で1.55m)、短軸0.5~0.7m(床面で0.3~0.5m)、深さ0.35mである。出土遺物はない。

SX77 (第37図)

調査区南東端に位置する。平面は隅丸長方形で、長軸1.4m(床面で1.3m)、短軸0.5m(床面で0.4m)、

深さ 0.2m である。出土遺物はない。

SX155 (第 37 図、図版 38)

調査区中央部に位置し、1号墳・SX126に切られる。全形は不明であるが、平面は隅丸長方形もしくは長楕円形と考えられる。長軸 0.8m 以上、短軸 0.5m (床面で 0.35m)、深さ 0.3m である。

SX156 (第 37 図、図版 38)

調査区中央部に位置し、1号墳・SX125・SX128に切られる。全形は不明であるが、平面は隅丸長方形と考えられる。長軸 1.4m 以上、短軸 0.45m (床面で 0.3～0.4m)、深さ 0.2m である。東小口部の床面上よりガラス玉、勾玉が出土した。

出土遺物 (第 47 図、図版 83)

石製品 (108) 108 は小型の勾玉で灰緑色の石材を用いる。

ガラス製品 (109～111) 109～111 は青緑色のガラス小玉。いずれも同系色だが 109 は一回り小さい。

SX182 (第 38 図)

調査区南西部に位置し、49号甕棺墓に切られる。平面は長楕円形で、長軸 1.75m (床面で 1.6m)、短軸 0.65m (床面で 0.4m)、深さ 0.3m である。西側が広く、東側が狭いことから、頭位は西側と想定される。出土遺物はない。

SX183 (第 38 図、図版 39)

調査区南端部に位置し、40・41号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 1.6m、短軸 1.0m、深さ 0.35m、二段目は長軸 1.15m (床面で 1.15m)、短軸 0.45m (床面で 0.45m)、深さ 0.7m である。南側の床面には、長軸 0.5m、短軸 0.3m、深さ 0.1m のピット状の掘り込みがある。出土遺物はない。

SX185 (第 38 図、図版 39)

調査区南端部に位置し、48号甕棺墓に切られ、SX186を切る。平面は隅丸長方形で、長軸 1.9m (床面で 1.3m)、短軸 1.3m (床面で 0.3m)、深さ 1.35m である。長軸方向壁面沿いの床面付近には幅 0.15～0.3m のテラスがある。床面はわずかにU字状を呈しており、刳抜形木棺の可能性もあるが、土層観察では確認できていない。出土遺物はない。

SX186 (第 39 図)

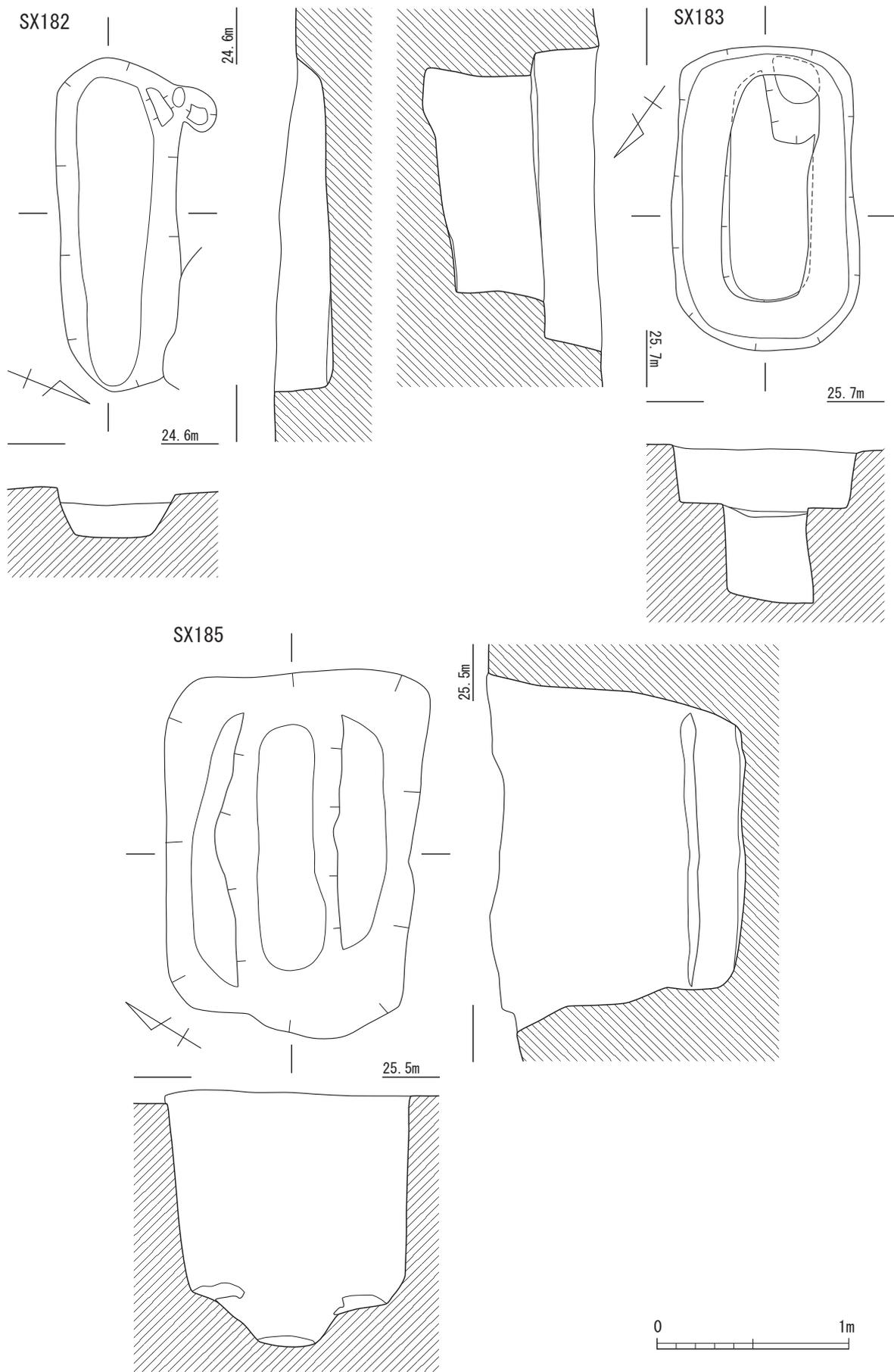
調査区南端部に位置し、SX185・39号甕棺墓に切られる。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 1.4m、短軸 0.9m、深さ 0.65m、二段目は長軸 1.1m (床面で 1.0m)、短軸 0.5m (床面で 0.4m)、深さ 0.5m である。出土遺物はない。

SX187 (第 39 図)

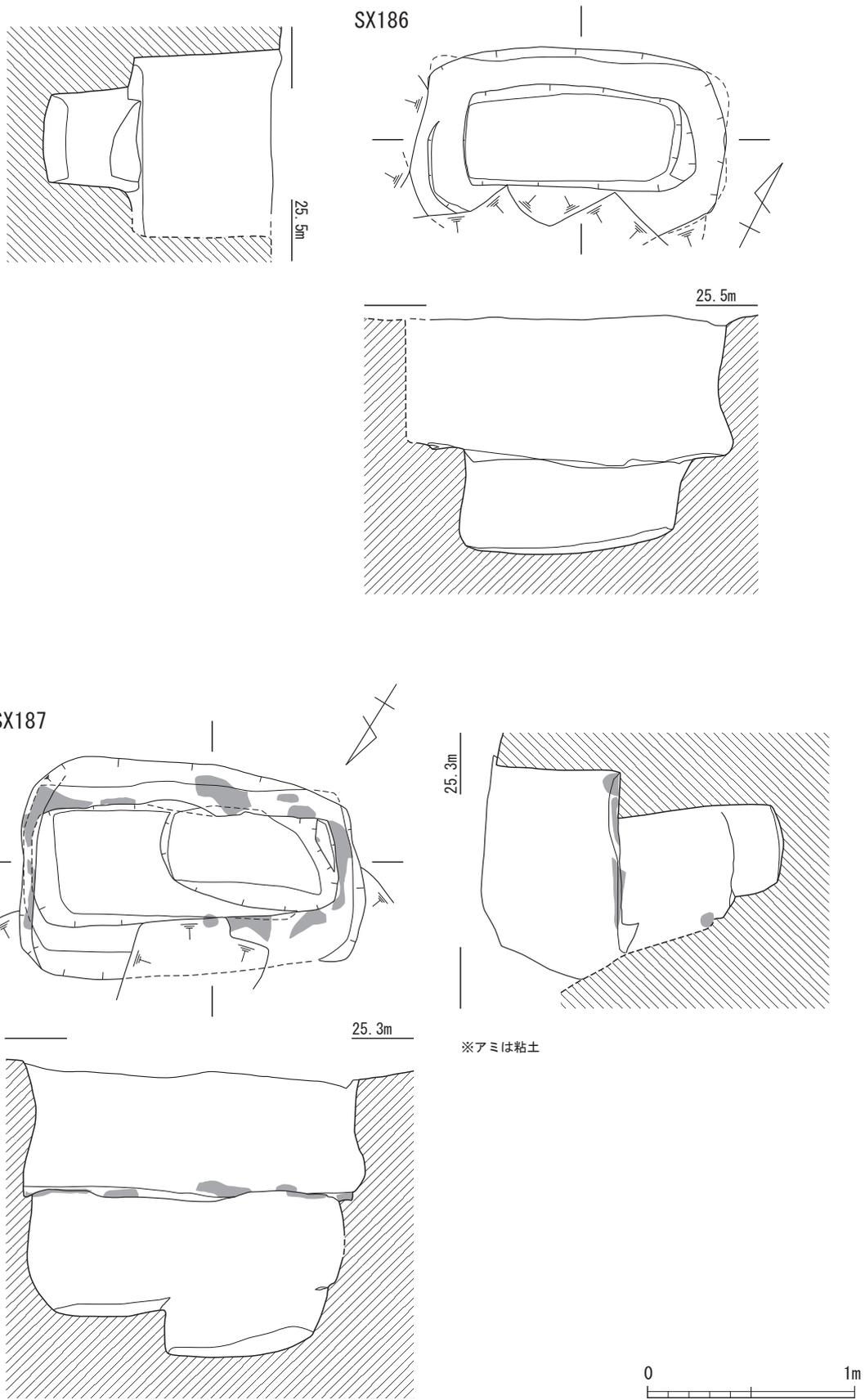
調査区南端部に位置し、SX200に切られる。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 1.65m、短軸 1.05m、深さ 0.5m、二段目は長軸 1.4m (床面で 1.25m)、短軸 0.6m (床面で 0.5m)、深さ 0.55m である。床面には長軸 0.8m、短軸 0.5m、深さ 0.3m の楕円形の掘り込みがある。出土遺物はない。

SX188 (第 40 図、図版 40)

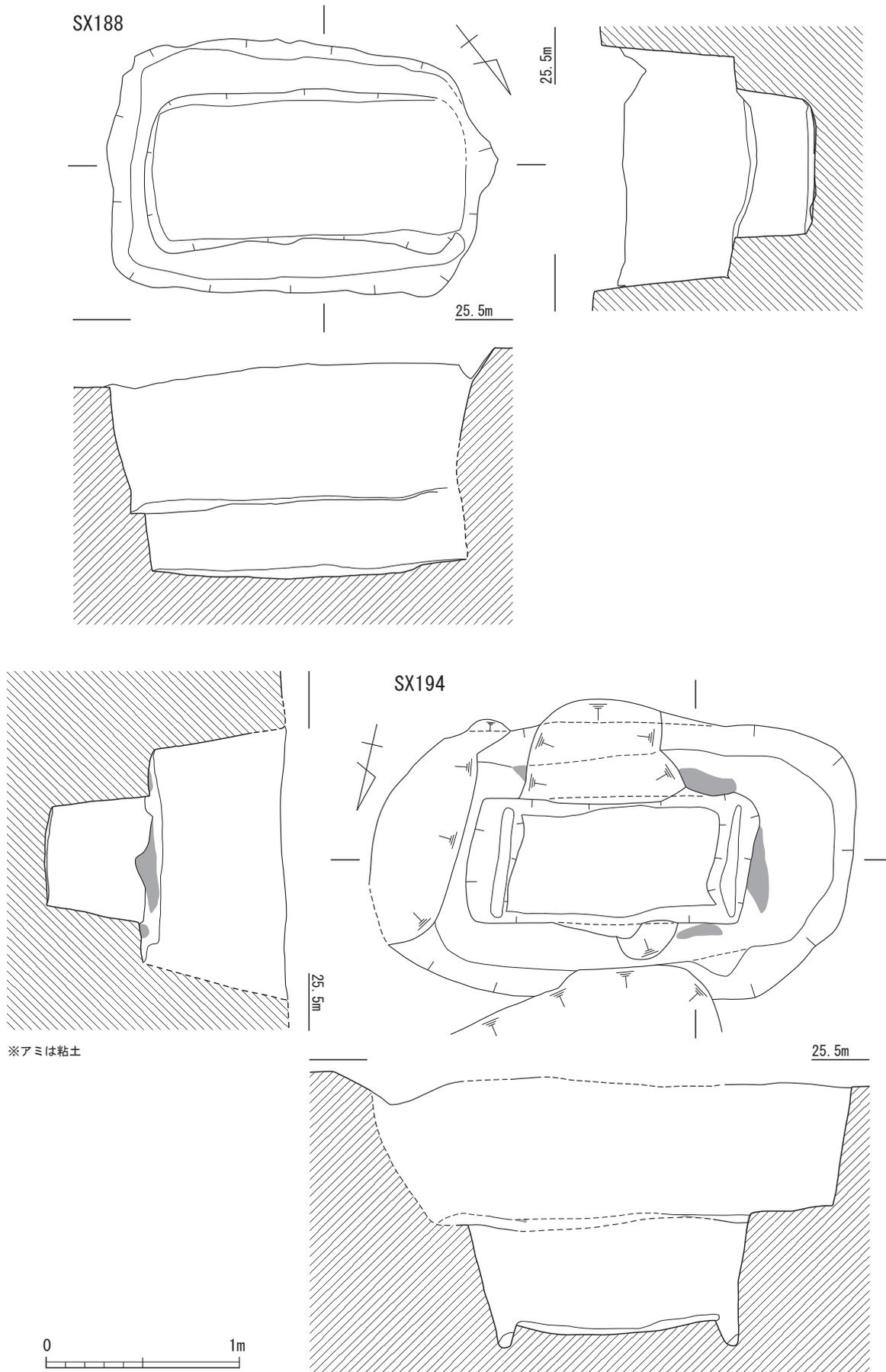
調査区南端部に位置し、41号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は



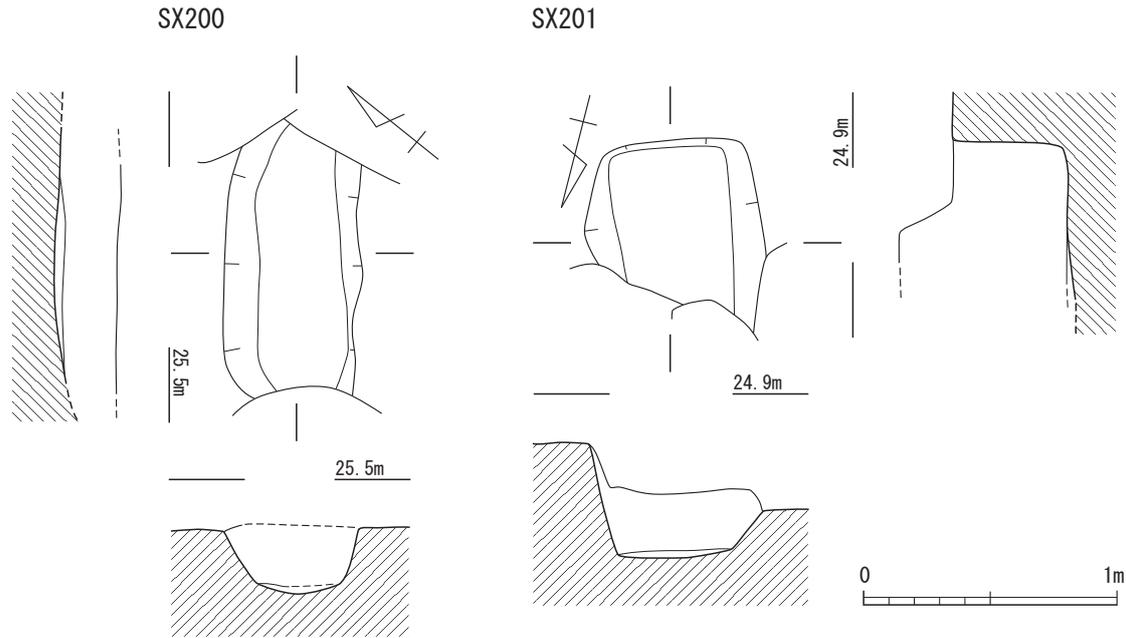
第38図 SX182・183・185実測図(1/30)



第39図 SX186・187実測図(1/30)



第40図 SX188・194実測図(1/30)



第41図 SX200・201 実測図 (1/30)

長軸 1.9m、短軸 1.3m、深さ 0.7m、二段目は長軸 1.6m (床面で 1.6m)、短軸 0.8m (床面で 0.75m)、深さ 0.4m である。埋土中から弥生土器片が出土した。

出土遺物 (第47図、図版83)

弥生土器 (112・113) 112は壺の口縁部で、内外面ともに丹塗り。口縁端部はヨコナデ、他はミガキ。外面のミガキは暗文状で、タテ方向のミガキの後、上部にナナメ方向のミガキを施す。内面のミガキはヨコ方向。113は筒形器台の破片で透かしがある。外面は丹塗り。外面は縦方向のミガキ、内面はナデ。

SX194 (第40図、図版40)

調査区南端部に位置し、37号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。一段目は長軸 2.5m、短軸 1.4m、深さ 0.7m、二段目は長軸 1.5m (床面で 1.0m)、短軸 0.65m (床面で 0.5m)、深さ 0.5m である。両小口部の床面には幅 0.15m、深さ 0.1m の溝状の掘り込みがあり、木棺小口板を設置した痕跡と考えられることから、組合式木棺の可能性が高い。出土遺物はない。

SX200 (第41図)

調査区南端部に位置し、SX187を切り、SX195に切られる。平面長楕円形で、長軸 1.1m 以上、短軸 0.5m (床面で 0.3m)、深さ 0.25m である。出土遺物はない。

SX201 (第41図)

調査区中央部に位置し、SX152・153に切られる。平面隅丸長方形で、長軸 0.8m 以上、短軸 0.7m (床面で 0.5m)、深さ 0.65m である。出土遺物はない。

③石蓋土坑墓

1号石蓋土坑墓 (SX30) (第42図、図版41)

調査区中央部に位置し、SX63に切られる。平面は不整な隅丸長方形で、長軸 1.9m (床面で 1.7m)、

短軸 0.8m (床面で 0.4m)、深さ 0.3m である。墓坑上位の南側・東側にテラスがあり、テラス上に平面方形・多角形のやや扁平な石材を平置きして蓋とする。床面の東側は数cm程度高く、東側が頭位となるうか。出土遺物はない。

2号石蓋土坑墓 (SX29) (第42図、図版41)

調査区中央部に位置し、SX31に切られる。平面は隅丸長方形で、長軸 2.0m (床面で 1.8m)、短軸 0.6～0.8m (床面で 0.4m)、深さ 0.35m である。墓坑上～中位にテラスがあり、テラス上に平面方形・多角形のやや扁平な石材を平置きして蓋とする。出土遺物はない。

3号石蓋土坑墓 (SX40) (第43図、図版41・42)

調査区中央部に位置し、SX41に切られる。平面は隅丸長方形で、長軸 1.85m 以上 (床面で 1.5m)、短軸 0.65m (床面で 0.4m)、深さ 0.3m である。墓坑上面に平面長方形・楕円形のやや扁平な石材を平置きして蓋とする。蓋石の範囲と西側床面に朱の散布が認められる。出土遺物はない。

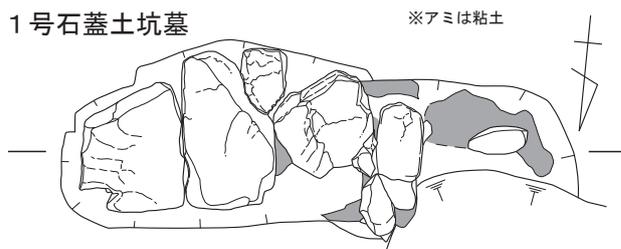
4号石蓋土坑墓 (第43図、図版43)

調査区南西部に位置し、5号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。上面で長軸 2.1m、短軸 1.1～1.2m、一段目の深さは 0.05m である。二段目は長軸 1.75m (床面で 1.7m)、短軸 0.45m (床面で 0.35m)、深さ 0.4m である。蓋石は、西側小口部のテラス上に扁平な石材が 1 石残るが、他は消失する。北東側のテラス上から、弥生土器壺が出土しており、棺外副葬と考えられる。なお、床面は、西側が狭く、東側が広いことから、頭位は東側と考えられる。

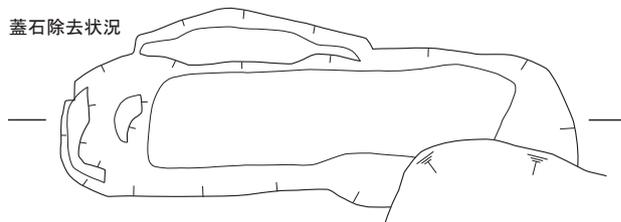
5号石蓋土坑墓 (第44図、図版43・44)

調査区南西部に位置し、SX197に切られる。平面は隅丸長方形で、長軸 2.1m (床面で 2.0m)、短軸 0.55m (床面で 0.4m)、深さ 0.4m である。西側の床面にはピット状の掘り込みがあり、足元掘り込み式と考えられる。また、東側の床面は数cmほど高くなっており、朱の散布があることから東

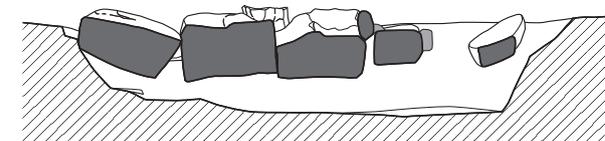
1号石蓋土坑墓



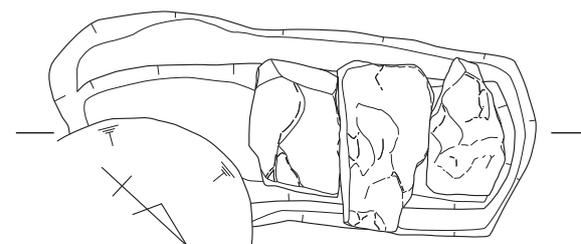
蓋石除去状況



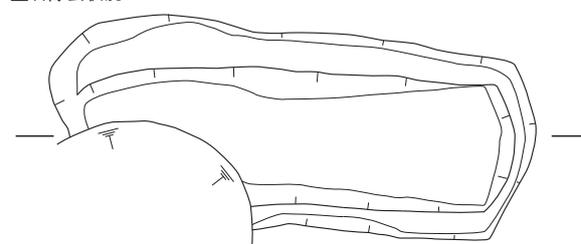
25.5m



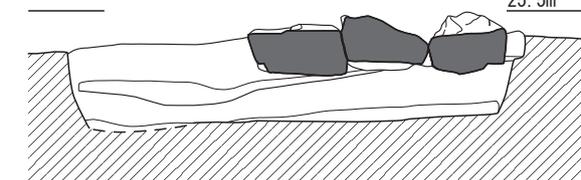
2号石蓋土坑墓



蓋石除去状況



25.5m



0 1m

第42図 1・2号石蓋土坑墓実測図 (1/30)

側が頭位の可能性がある。蓋石はほぼ完存し、平面長方形・方形のやや扁平な石材を5～6石配置する。出土遺物はない。

6号石蓋土坑墓（第44図、図版45）

調査区南西部に位置し、2号石棺墓に切られる。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。上面は長軸1.1m以上、短軸0.7m以上、深さ0.1mである。二段目は長軸0.9m（床面で0.9m）、短軸0.2～0.3m（床面で0.15～0.25m）、深さ0.4mである。床面は東側が狭く、西側が広いことから、西側が頭位の可能性がある。蓋石は完存し、平面長方形・方形の扁平な石材を3石配置する。西側蓋石の北側で土器が出土しており、棺外副葬品と考えられる。また、土器の西側で朱を確認した。

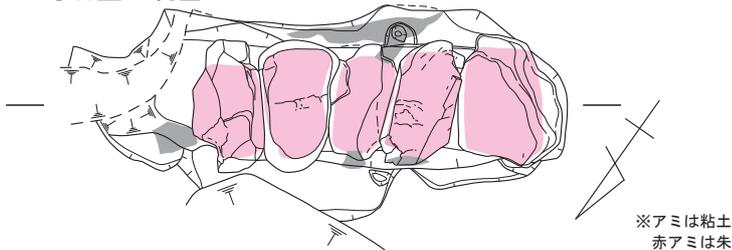
出土遺物（第47図）

弥生土器（114）壺で、口縁部から胴部上位は欠損する。外面はハケメで、底部は一部ヘラケズリ。内面はナデで、工具痕がある。

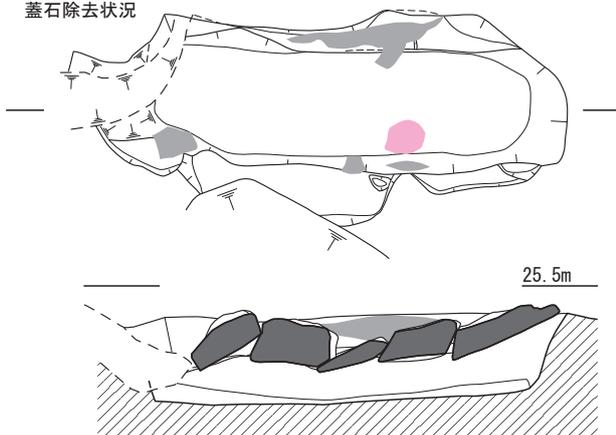
7号石蓋土坑墓（第45図、図版45・46）

調査区南西部に位置し、2号石棺墓に切られ、44・50号甕棺墓を切る。平面は隅丸長方形で、二段掘りとなる。上面は長軸2.1m、短軸1.5m以上である。二段目は長軸1.6m（床面で1.45m）、短軸0.2～0.6m（床面で0.15～0.3m）、深さ0.3mである。床面は西側が狭く、東側が広く床面

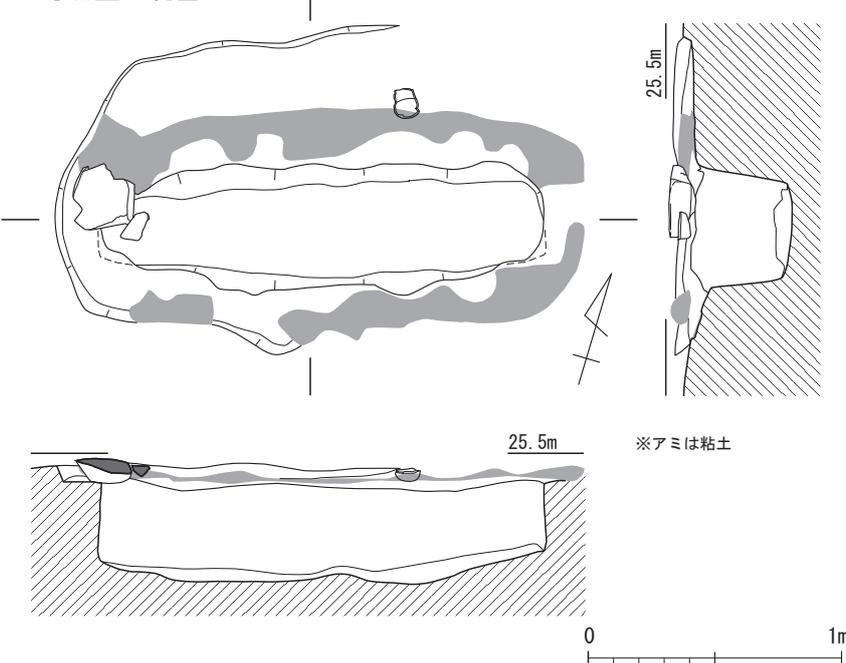
3号石蓋土坑墓



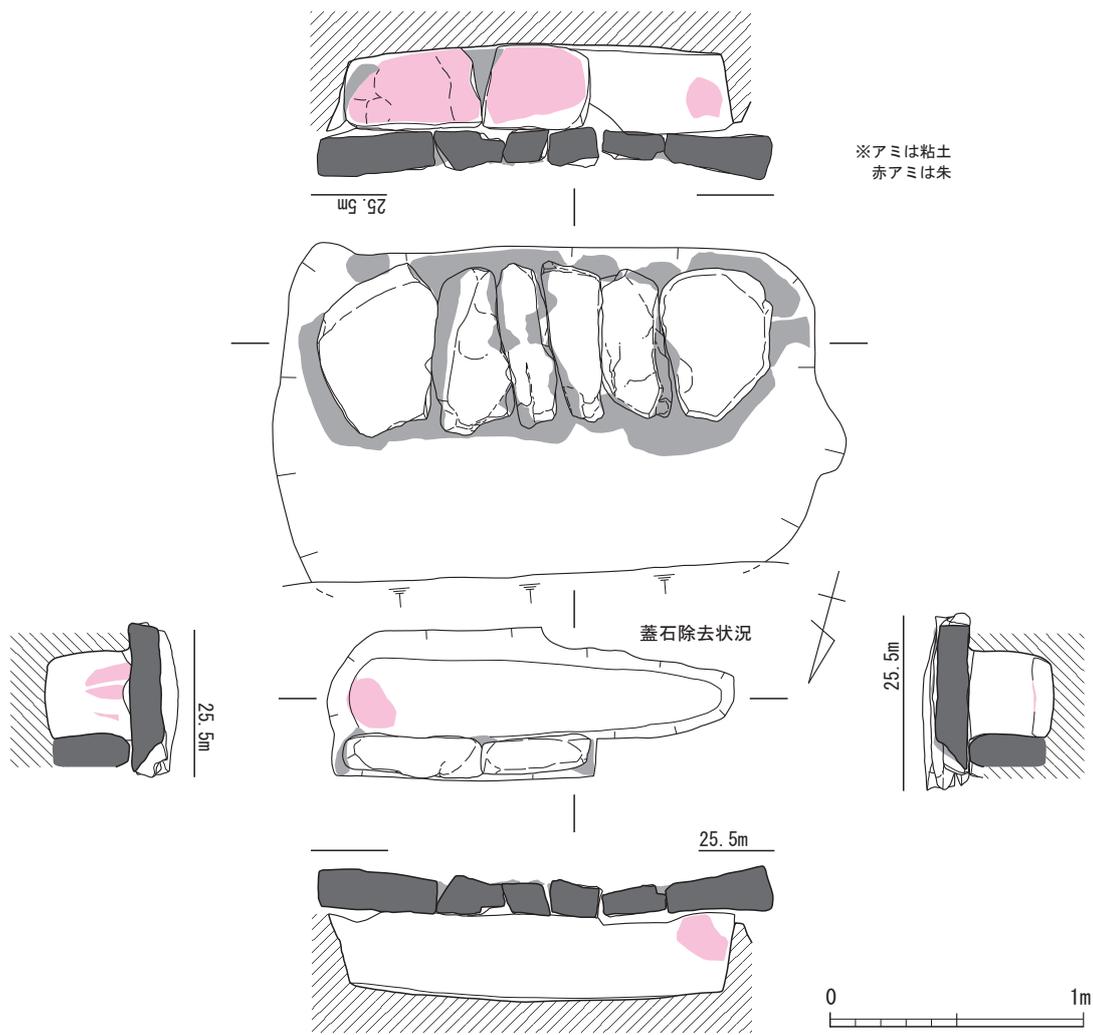
蓋石除去状況



4号石蓋土坑墓



第43図 3・4号石蓋土坑墓実測図（1/30）



第45図 7号石蓋土坑墓実測図 (1/30)

に朱の散布があることから東側が頭位の可能性がある。蓋石は完存し、平面長方形・方形の扁平な石材を6石配置する。また、北側の壁面の一部には、扁平な石材を2石立てて側壁とし、この上に蓋石がのる。出土遺物はないが、西側壁と東側小口部に朱が認められる。

④石棺墓

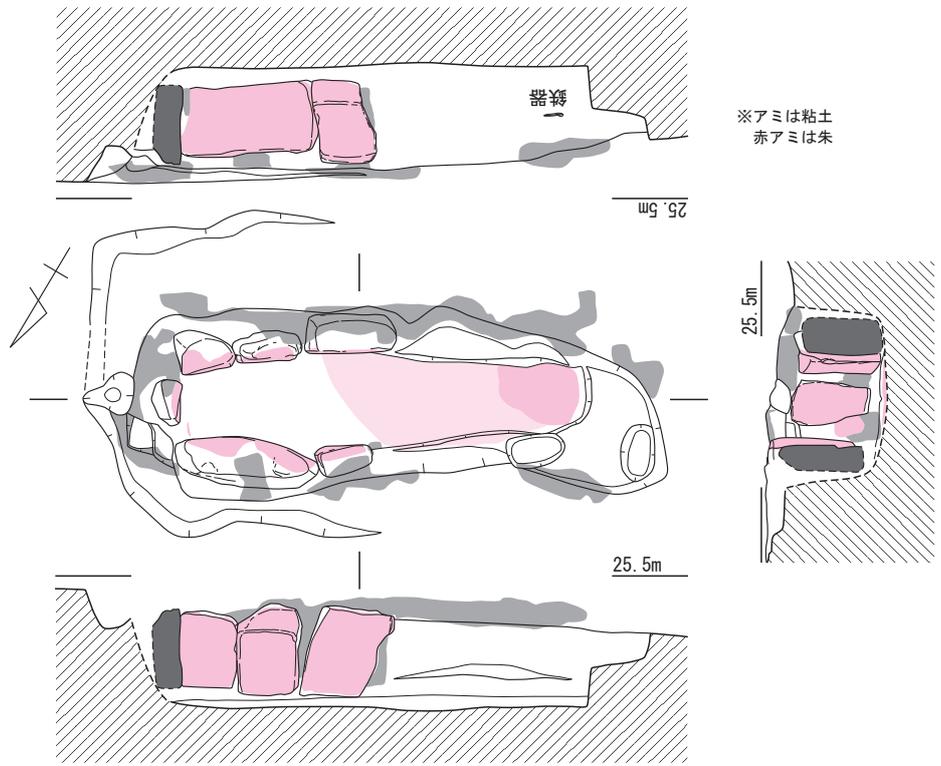
1号石棺墓 (第46図、図版47～49)

調査区南西部に位置し、38・47・49号甕棺墓を切る。掘方の平面は不整な長方形で、二段掘りとなり、長軸2.2m、短軸1.8mである。石棺掘方は、長軸1.6m、短軸0.65m、深さ0.35mで、壁面に接するようにやや扁平な方形・長方形石材を立てて設置する。西側の小口壁・側壁の一部を失うが、小口壁は1石、側壁は4～5石で構成するものと考えられる。石棺の床面は長軸1.55m、短軸0.3mで、西半分の床面と壁面の石材に朱が認められる。鉄器が出土した。

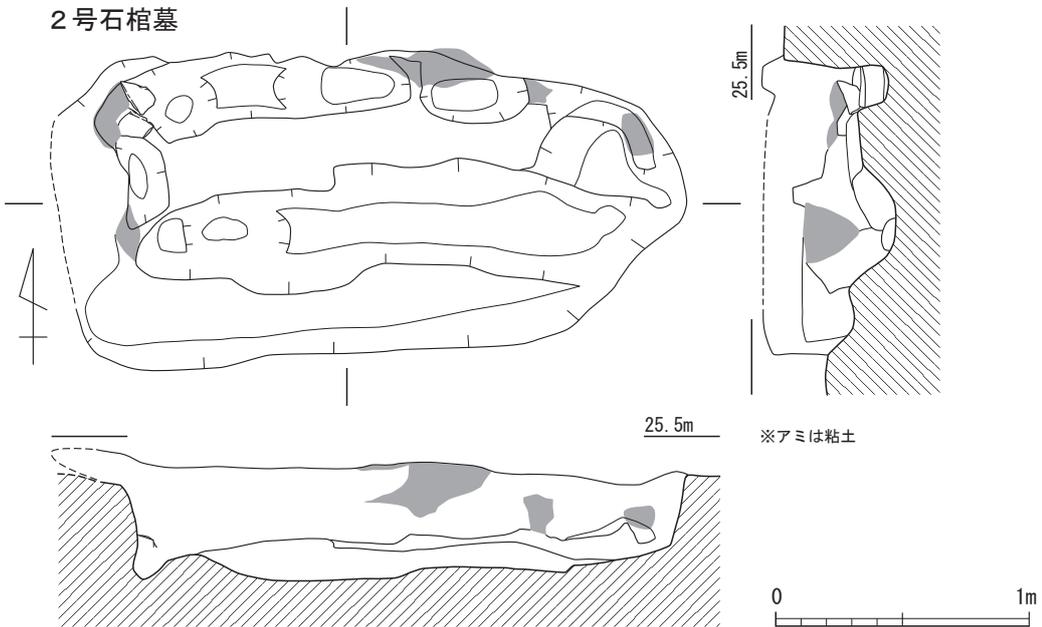
出土遺物 (第47図、図版83)

鉄製品 (115・116) 115は平根式の方頭鏃。鏃身には錆膨れのため判別しがたいが細長い透かしがある。116は穂摘鎌。直刃で両端を折り曲げる。

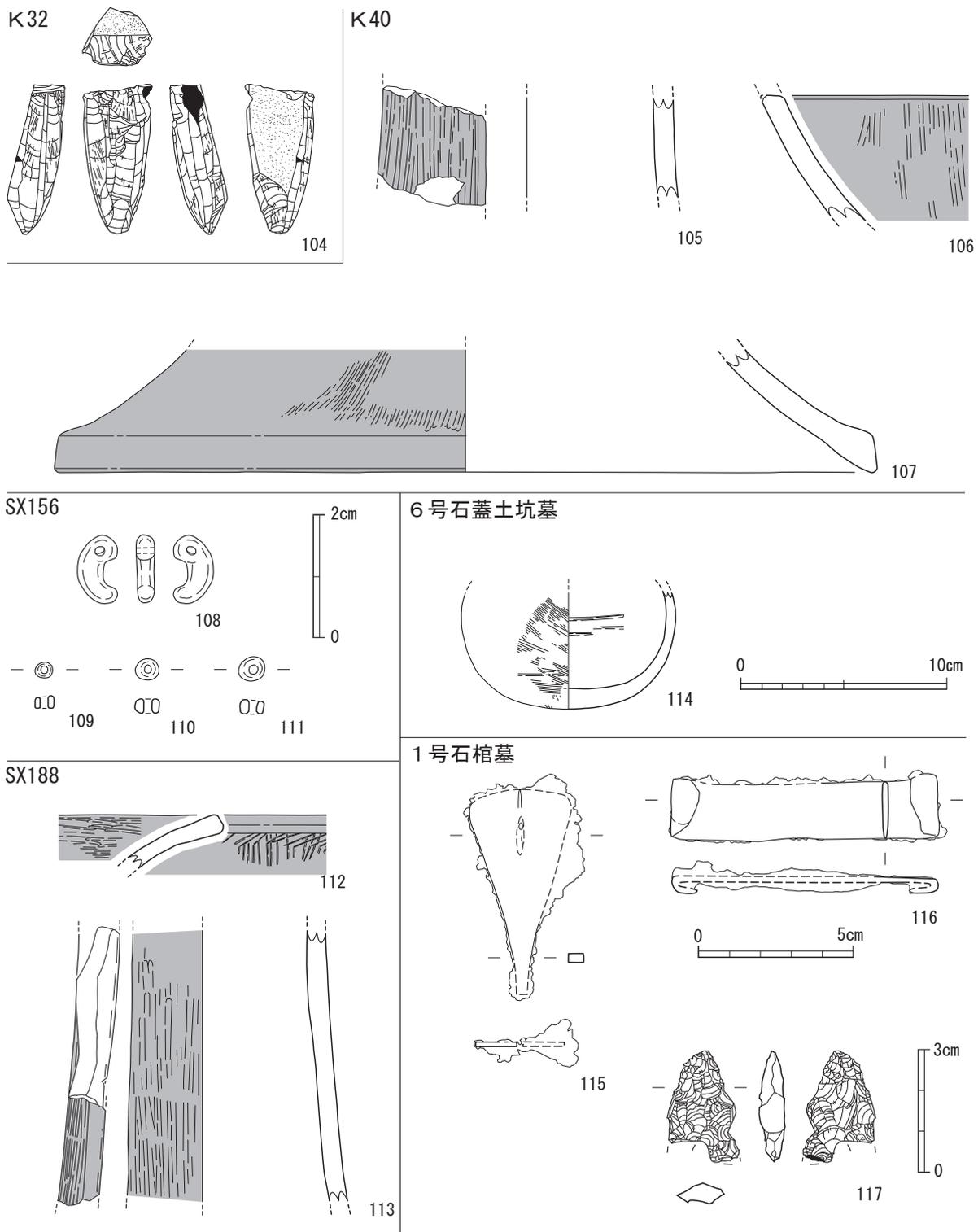
1号石棺墓



2号石棺墓



第46図 1・2号石棺墓実測図 (1/30)



第47図 弥生時代遺構出土遺物実測図(1)
(104・117は2/3、108～111は原寸、115・116は1/2、他は1/3)